
真・恋姫†無双 ～袁の王佐～

雪待兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～袁の王佐～

【Nコード】

N7854T

【作者名】

雪待兎

【あらすじ】

後漢末期、漢王朝の権威は衰え時代は乱世を迎える。

その中で一人の諸侯が思いを胸に乱世に乗り出そうとしていた。その名は袁術。

純粋な思いを胸に道歩く小さな王の傍らには常に側に控える一人の青年の姿があった。

幼い少女と一人の少年。

二人が出会った時、外史は新たな幕を迎えようとしていた。

この小説は作者の気分転換で書いている作品です。不定期な更新となりますのでご了承ください。
作者はギャグが苦手なので基本シリアス展開です。

登場人物一覧（前書き）

登場人物にオリキャラが多いので分かりやすいように纏めました。

名前 字 の順に並んでいます。

（ ） の名前は真名です。

随時更新していきます。

あと脇役キャラからメインキャラへと昇格する可能性もあります。

登場人物一覧

袁術軍

メインキャラ

君主

袁術 公路

(美羽)

原作と比べてかなり能力UP

補佐役

樂就 守路

(泉)

主人公。陣営のNo2

参謀

田豊 元皓

(翠香)

戦術に優れる。

沮授 信貫

(蒼香)

戦略に優れる。

徐庶 元直

(真里)

水鏡塾出身。内政手腕に優れる。自

ら戦える参謀。

武将

?燕 飛高

(雄)

樂就の腐れ縁の友人。偵察・隠密部

隊長

張? 儁乂

(李雪)

武官筆頭。趙雲と関係あり?

紀靈 義伯

(華漣)

袁術軍のステルス武官

黄忠 漢升

(紫苑)

未亡人の弓使い

徐晃 公明

(薔薇)

袁術と樂就の友人。武の腕は上位。

文官

張勳 志直

(七乃)

人事才能はピカ一。覚醒済み

袁渙 曜卿 (芙蓉) 元女官の文官。

客将

脇役キャラ

武官

李豊 ベテラン爺さんその1
梁綱 ベテラン爺さんその2
文聘 仲業 若手武官その1
雷薄 若手武官その2
陳蘭 若手武官その3

文官

閻象 下級官吏

特別職

陳紀 袁家専属商人
黄奇 月英 (烈) 発明家

孫家軍

君主

孫策 伯符 (雪蓮) フリーダムな隠居人
孫權 仲謀 (蓮華) 美羽の盟友
孫朗 尚香 (小蓮)

軍師

周瑜 公瑾 (冥琳) 孫呉の大軍師。 泉とは好敵手
陸遜 伯言 (穩) 孫呉の副軍師
呂蒙 子明 (亞莎) 孫呉の見習い軍師

武將

黄蓋 公覆 (祭) 孫呉の宿将。 大の酒好き。
韓当 義公 (結) 孫呉の宿将その2
程普 徳謀 (舞) 孫呉の宿将その3
甘寧 興霸 (思春) 元水賊にして蓮華の護衛兼腹心。
周泰 幼平 (明命) 孫呉の隠密。

故人

孫堅 文台 (赤蓮) 孫家三姉妹の母親。 黄祖との戦いで死

亡。

登場人物一覧（後書き）

恋姫ビジュアルブック風の能力値も一応設定していますがやると厨二病っぽくなりそうなので載せませんでした。

希望が出るようなら載せますが。

序章 出会い（前書き）

懲りずに投稿。

序章 出会い

「おぬしなにをしているのじゃ」

「何って・・・飯を探してるんだよ」

「メシ？メシとはなんじゃ？」

「飯は飯だよ。食い物のことだ」

「たべものじゃと？それはたべものではなくごみじゃぞ？」

「この中に食べれる物が入ってるんだよ」

「そうなのかや？それはおいしいのかのう？」

「・・・美味いわけがねえだろ。所詮は残飯だ。それよりあんた見たところ良い所のお嬢様だろ？この辺りは物騒だからさっさと帰った方がいいぞ」

「おいしくないのにたべるのかや？」

「・・・っ！別にいいだろ。俺の事は放っておいてさっさと帰れ。それとも迷子か？」

「わらわはまいごではない！じいたちがいなくなってしまったのでわらわがさがしてあげているのじゃ！」

「・・・それを迷子って言うんだよ。はあ、仕方がねえ・・・。せ

つかく二日ぶりの飯にありつけると思ったのにな……。おいガキ、大通りまで送ってやる、着いてこい」

「むう、わらわはガキではない！みうという名前があるのじゃ！」

「ああ、そうかい……。それとお前それ真名だろうが？軽々しく俺みたいな奴に教えるな」

「わらわがみうと叫びたならみうなのじゃ！おぬしのなまえはなんと叫ぶのじゃ？」

「……。別にいいだろ、俺の名前なんて。どうせすぐ分かれるんだし、二度と会わねえだろうよ」

「なんでじゃ？わらわはいまおぬしと叫びに在るではないか？」

「何故って……。お前には分からないかもしれないけどお嬢様と町の孤児じゃ住む世界が違うんだよ」

「ならばいっしょにすめばよいではないか？」

「……は？」

「すむところがちがうならわらわとおぬしが叫びにすめばいいのじゃ。そうすればずっといっしょである？」

「何を莫迦な事をいつてるんだ？こんな薄汚いガキをお前の家の奴が迎え入れるわけが無いだろうが！」

「ならばおぬしがわらわのものになればいいのじゃ！わらわがきめ

たのじゃ！おぬしとおはなししておるとなんだかほかのものとおはなしするのとちがつてきもちがよいのじゃ！」

「……本気か？」

「わらわはうそはいわないのじゃ！それよりおぬしのなまえをまだきいておらんぞ？」

「……泉だ。それ以外の名前はなし」

「いずみ？めずらしいなまえじゃの。わらわはみづいがいにもえんじゅつというなまえがあるのにのう」

「……袁術？」

「そうじゃ。いずみはきょうからわらわの……えんじゅついちのけらいなのじゃ」

「いつの間にか家来認定かよ……」

「ととさまのようにわらわもけらいがほしかったのじゃ。いずみよ、さつさとわらわのいえにかえるのじゃ」

「家つていうと……袁家の屋敷の事か……どうせこのままならいずれ餓死だ、賭に出てもいいか……なあ姫さん、もし俺があんたを連れて行って殺されたり追い出されたりしなければあんたの家来になつてやるよ」

「むづ、わらわはみづなのじゃ！」

「はいはい、わかりましたよ、みつお嬢様」

序章 出会い（後書き）

6月3日20時に次話投稿します。

第1話 袁逢（前書き）

ここまでがプロローグです。

第1話 袁逢

SIDE 樂就

「……懐かしい夢を見たな」

朝目を覚ました俺は起きたまましばらく感慨に耽っていた。

原因は今日見た夢の内容だ。

この世界で俺がここにいるきっかけとなった出来事。

俺には前世の記憶というものがある。

日本という国で生活していた俺はその役所で働き始めて少し経った時に病に倒れた。

その病は難病であり、この国よりも遙かに優れた医療技術を保有していたその国でも治す事は出来ず、俺は2年以上に及ぶ闘病生活の末に死んだ。

闘病生活の末期の頃には俺は自分の死期を受け入れており、その死に様は穏やかだったのだが運命の神とやらは余程にドSな性格をしていたらしい。

死んだ俺は気が付いたら赤子としてこのクソツタレな世界に生まれ落ちていた。

そう、この三国志と似ているようで違う奇妙な世界に。

洛陽に程近い農村の農家の息子として生を再び受けた俺だったが自分自身の事を自覚出来るようになったのは生まれて一年程経った時だった。

多分脳が未発達だったために自分自身の意識がはっきりしなかったんだろう。

意識がはっきりしてから周囲の大人の会話から俺はここが古代中国、それも後漢の末期らしい事に気付いた。

そして真名と呼ばれる日本の諱のような物が存在していたり、女性の武将が存在したりと俺の知っている世界と違う事も。

だがまだ赤子の身体の俺に出来る事など無く、そのまま普通に過ごしていたのだが今思えばそれがいけなかった。

生後1年程なのに大して泣きもせず常に回りを観察している子供。

それはこの世界の両親を含めた村の大人達からしてみればさぞかし不気味に思えたんだろう。

俺が生まれて5年程経った時、俺の住んでいた村の近辺は凶作となつた。

凶作と言っても実際そこまで酷いものではなかったのだが、時代の流れが追い打ちをかけた。

良心的な太守の治める地域だったらここで減税をしたかもしれないが、俺の住んでいた村周辺を治めていた太守は何をトチ狂ったのか

むしろ増税しやがったのだ。

ここで村人に気概があれば反乱の一つでも起こしたかもしれない。

だが村人は良くも悪くも従順だった。

太守の言うままに税を納める事となり、その結果村の食糧事情は圧迫。

時代を問わずに苦しい時に人間が取る手段というのは変わらない。

物が足りなければ人を減らせばいい。

つまり口減らしだ。

そして周囲に不気味な子供と思われていた俺に真っ先に白羽の矢が立った。

一応最後の良心が咎めたのか少量の食料を持たされた俺は実の両親によって村から連れ出された。

定番通り『後で迎えに来るから』と言葉を受けて村から1日程した山に捨てられた俺だったがそのまま素直に待つバカではない。

凶作となった時から口減らしの事を覚悟していた俺は村にいた頃から身の処し方について一応考えていた。

凶作はこの辺り一帯を襲ったので別の村に行ってもよそ者の俺は追いつけられないだけだろう。

かといつてもまだ子供の身体の俺が野生児のように山で生きていく筈がない。

となると残る手は大きな都市に行つて何かのおこぼれを掴むしかない。

そう考えた俺は山を出ると予め把握していた方角を頼りに洛陽へと向かつたのだ。

他の流民に紛れて無事に洛陽に入る事が出来た俺だったが現実想像以上に厳しかった。

最初は丁稚扱いでどこかの商家に転がり込めないかと考えていたんだが生活が苦しいのは町に住んでいる民も変わらない。

当然のことながらツテも何もないガキの俺を商家が雇ってくれる筈がなく、俺はストリートチルドレンへと身を賣した。

町の裏にある衛生環境もくそもないスラム街の隅に住みながらゴミを漁る日々。

そんな生活の中で俺が何とか生き抜く事が出来たのは知識のお陰だった。

都のゴミ山はスラム街に住む奴らの戦場だ。

数多くの大人が混じる中で子供がその競争に勝てる筈がない。

そこで俺は副業に手を染めた。

ゴミ山から手に入れた他の奴らが気にもしないゴミ……糸や小さな骨を使って道具を作り、それを使って商売を始めたのだ。

洛陽の近くには川が流れている。

俺はその川に作った仕掛けを設置して田鰻等の魚を捕った。

他に川で捕まえたタニシや蛙、それに食べれる野草を洛陽の町で売ったのだ。

俺が子供である事もあって大概それらは買い叩かれたが、その手に入れた食料とお金によって俺は何とか食いつなぐ事が出来た。

そうして3年程スラム街で過ごしていた俺だったが、その間に世の中はどんどん悪くなっていった。

宦官らによる政治は腐敗を極め、洛陽の近くにも賊が出没するようになる。俺も気軽に川に行くことが出来なくなる。

そして流民も増え、スラム街の食料事情も悪化。

俺は一日中駆けずり回って何とかほんの少しの食べ物を得る事が出来るかどうかという有様だった。

その中で俺の転機となったのが今日見た夢の出来事……袁術こと美羽との出会いだ。

浮浪児に身を賣しても俺は人としての矜持まで捨てた覚えはない。

今にも泣き出しそんな美羽を放っておくことが出来なかった俺は美

羽を袁家の屋敷まで送り届けたのだが……。

「楽就、起きているか？」

思考に沈んでいた俺だったが突然の呼びかけに意識を戻すと部屋の入り口にこの家の家人が立っていた。

「御館様がお呼びだ。さっさと行ってこい」

そっけなく言って家人はさっさと行ってしまった。

何やら冷たく感じるが、これはいつもの事なので特に気にならない。

それにしても周陽様が俺に何の用だろうか？

その内容を気にしながらも俺は着替えを済ませて周陽様の部屋へと向かった。

袁逢、字を周陽。

漢の名門袁家の頭領であり、現在において三公の一つである司空を務める人物だ。

俺にとって美羽と同じく恩人である人物でもある。

4年前美羽を届けに俺がこの屋敷に来た時、美羽の願い通りに俺をこの屋敷に迎え入れてくれた人物。

薄汚れた浮浪児にこの家の家人達の目は厳しかったがこの人は全く気にしなかった。

そして俺の生い立ちを聞くなり何故か俺の事を気に入り、『養子にしよう』とまで言い出した。

流石にそれは周りの親族らの反対が大きかったらしくて実現する事は無かったが、この人は俺に楽就という名を与えてくれた上で実の息子のように可愛がって俺を育ててくれたのだ。

今となつては恐れ多い事ではあるが俺はこの人を父親のように思っている。

「周陽様、楽就ただ今参上致しました」

「おお、泉、良く来たな」

部屋を訪れた俺を周陽様は寝台に腰掛けたまま迎え入れた。

周陽様はここ1、2年体調を崩しがちであり、俺の知っている民間療法を試してもいるが効果なく最近寝台に横になる日が続いている。

俺が来た頃は黒かった髪にも随分と白い物が混じっている。

「周陽様、身体のお加減は……」

「残念ながら余り良いとは言えん。正直ワシも長くないじゃろうな……」

「そんな……」

諦めたように笑う周陽様に俺は言葉が詰まる。

せつかく巡り会えた父親も同義である周陽様を失う事も悲しいが、その周陽様を慕う美羽の悲しみを思うとそれ以上に堪らない。

「よい、これも天命じゃよ……。それより泉、ワシのことは真名で呼ぶように申しつけておいた筈じゃが？」

悪戯っぽく笑う周陽様……いや、羽羽様。

高位にあるにもかかわらずこのような顔を見せる人間味がこの宦官が力を持つ中で羽羽様が頭角を現す事が出来た要因の一つだろうな……。

「……分かりました、羽羽様」

俺の答えに羽羽様は満足げに微笑む。

「さて、今日お主を呼んだのは他でもない。ワシが死んだ後の事を話すためじゃ。泉、お主に美羽の世話を任せたいのじゃよ」

俺の目をしっかりと見据えながら話す羽羽様の目は真剣だった。

そしてその羽羽様の言葉に俺は心当たりがある。

「……やはり駄目でしょうか？」

「聡いの。うむ、駄目じゃな。このままでは美羽は堕ちてしまっじやろっ」

俺の疑問に羽羽様は断言するかのよう言い切った。

問題となっているのは美羽の教育の事だ。

現在美羽には専任の教育役がついているのだが、この教育役のほとんどが親族の影響を受けている人物なのだ。

歪んだ思想を教え込んで将来自分達の都合の良い傀儡と仕立てる。

そういった思惑を感じ取れ、事実彼らが教育役に就いてから色々と言いつつながら俺は美羽から遠ざけられている。

「何度か人を変えたのじゃがあやつらはその度に近づいてきおる。もうここに至ってはお主しか頼れるものがおらんじゃ」

羽羽様の嬉しいが俺にそんな大役が務まるだろうか？

「しかし、私にそれ程の大役が務まるでしょうか？」

「何を言っておる。お主に教えた者達は皆お主の事を絶賛しておったぞ？むしろ最近ではお主が教えることの方が多そうではないか」

いや、それは前世の知識を持つ俺にとってこの世界の学問が非合理的でどうにも馴染めない点が多かったからだ。

特に算術なんて面倒くさい事この上ない。

思わず算盤を作って四則演算を使ってしまったらそれを教えてもらいに来る人が多くなってしまっただけに確かに羽羽様の言葉には覚えがある。

「それにもワシは甘やかし過ぎるようじゃ。麗羽にしても世間に触れれば少しは大人しくなるかと思いつたが……酷くなる一方じゃ。成兄上にも申し訳がたん。ワシもここ最近身体が優れないせいでどうにも美羽を甘やかしてしまう。美羽の守り役、引き受けてくれんか？」

最後は縋るかのように俺を見つめる羽羽様の願いを断る事など俺には出来なかった。

俺にとって羽羽様は父親と同じだ。

それに美羽は可愛い妹分であり、俺を慕ってくれている否はない。

俺の知っている歴史では袁術は暗君そのものだ。

それ故に身を滅ぼした史実の人物の後を美羽に追わせたくはない。

俺が介入することでこの世界がどうなるか分からないが……俺は美羽を守るとあの日決めたのだ。

「この樂就、全力を尽くさせて頂きます」

俺はその場で跪き礼を取った。

「そうか……泉、よくぞ申ししてくれた。バカ共はワシが必ずや抑える。お主は美羽を正しく導く事に専念してくれ。……そして泉よ、お主に守路の字を授ける。これよりは楽守路と名乗るが良い」

守路……美羽の字が公路だから美羽を守る者という意味か。

羽羽様がそこまで信頼してくれるとは……この浮浪児だった俺を……。

「バカ共のせいで袁の名をやる事は出来なかったがお主はワシの自慢の息子じゃ。お主の妹、美羽の事を頼んだぞ！」

「はっ！！美羽様との誓いにもかけてこの楽守路、必ずや美羽様を守り通してご覧に入れます！！」

この日俺は自分の全てをかけてこの世を美羽の為に生き抜く事を決めたのだった。

第1話 袁達（後書き）

主人公は楽就。

袁術 だと紀霊とかが多いのでへそ曲がりな作者の思いの結果です。

マイナー武將が多い小説になりそう・・・。

第2話 死別

SIDE 樂就

俺が美羽の教育係兼守役となつてから3年が経つた。

あのロクデナシ共の息の掛つた教育係達に碌でもない事を吹きこまれつつあつた美羽だが幸いな事に殆ど影響を受けていなかった。

なんでも俺が勉強をしている姿を見て触発された美羽はこつそりと書物を読んでいたらしい。

羽羽様自身がかんりの読書家であつたので袁家の屋敷には未だ高価な紙で作られた貴重で良質な書物が一杯ある。

それらを少しずつ読んでいた美羽は教育係達の言う事があまりにも書物からかけ離れている事を疑問に思つていたそうだ。

羽羽様が美羽を俺に任せてくれた時期はまさに時を得ており、羽羽様の目は流石としか言いようがない。

そうした下地もあつた御蔭で美羽の勉強は順調に進んだ。

美羽の頭の出来は中の上か上の下ぐらいであり、決して頭が良い訳ではないが物事を一つずつしっかりと自分の頭で考えて身につけている。

この時代は儒学が重要な学問なのだが俺自身があまり重視していな

かった事もあって美羽の勉強は実学と経験を積む事を中心に進めていった。

僅かな供を連れて美羽と一緒に洛陽の町や近隣の村に行き、平民の生活や世間の状況を教え込んだりもした。

遊び相手というものに飢えていた美羽は俺の浮浪児時代の知り合いや村・町の子どもと進んで交わり、泥だらけになって家に帰って家人を驚かせた事もあった。

正直名族袁家の娘の教育としては我ながら破天荒すぎるとも思うが、史実の袁術の事を考えると是非とも美羽には下の者の事も考えられるようになって欲しかった。

そうした俺の思いが通じたのか美羽は優しくしつかりとした子に成長したと思う。

この時代栄養学というものは無かったが、俺が食事にも気を使ったので身体の方も中々順調に育ち、最近はどこか色気も出てきたような気がする。

決して俺が美羽の事をそういった目でみているわけではない事はしつかりと強調しておく……事にしたい。

そうして俺はなんとか教育係としての役目を果たす事が出来たのだが、これには俺を信頼して美羽の教育の一切を任せ、他の者が口出し出来ないように抑えてくれていた羽羽様の力が大きかった。

羽羽様がいなければかならず横槍が入った事だろう。

……だがその羽羽様も先日ついに亡くなってしまわれた。

3年前から病がちだった羽羽様は1年程前に役職を退かれた。

その後羽羽様は療養生活を送っていたのだが、次第に病が重くなり、俺や美羽の介護の甲斐もなく息を引き取ったのだ。

羽羽様が亡くなった時父親も同然の人を失った悲しみもあったが、それ以上に不安を感じていた。

今まで俺と美羽は羽羽様によって内外から守られていた。

内というのは袁家の親族達であり、外というのは朝廷の勢力……特に宦官を中心とした勢力の事だ。

病に倒れていても名門袁家の頭領であり、朝廷で三公にまで上り詰めた羽羽様の影響は凄まじいものがあった。

美羽や俺の事を苦々しく思う輩がいても手を出せなかったのは羽羽様が控えていたからこそなのだ。

その羽羽様がいなくなった今俺と美羽は猛獣の住む森の中に放り出されたに等しい。

そして俺の感じていた不安はしつかりと的中してしまう。

きっかけは袁家の頭領の座だった。

羽羽様は生前に袁家の次の当主は美羽だと言いついて残っていたのだが、親族達は羽羽様が守っていた為に自分達と馴染みの薄い美羽が当主

となる事に反発した。

『袁公路様は袁家の当主という重責を背負われるには余りにも幼い。ここは袁周様様の兄君の御子である袁本初様が当主となられるべきではないか？』

というのが奴らの言い分だ。

更にその袁紹自身も周囲に煽てられてすっかりとその気になってしまふ。

そこに付け込んだのが十常侍を中心とした宦官達だった。

目の上のタンコブだった羽羽様がいなくなり、袁家が分裂状態になっている事を目にした玉ナシ共はこれを幸いにと皇帝にあることないことを吹きこんで袁家を中央から遠ざける事にしたのだ。

漢王朝きつての名族である袁家を追い出せば自分達は安心して勢力を伸ばせるとでも思ったのだろう。

分裂した袁家にこの宦官の策謀を防ぐ事は出来ず、美羽と袁紹の太守への赴任はあっさりと決まったのだった。

この話が決まった時、俺はこの話は案外悪いものではないと考えていた。

漢王朝が廃れてきており、これから時代は乱世になる事を俺は知っている。

それならば地方で力を蓄える事は必ずしも悪い選択ではないのだ。

ただ後悔があるとすれば袁紹の任地が冀州であり、美羽の任地が荊州となった事だ。

荊州も貧しい訳ではないがこの時代中国大陆の中心は河北であり、冀州と荊州を比べた場合荊州の方が格が落ちる。

つまり任地に差が出た事で図らずも袁紹が袁家の後継として世間に見られるようになってしまったのだ。

後から分かった事だが宦官達の動きに気付いた袁紹の取り巻きの一人が宦官達に袖の下を送ったらしい。

その動きに全く気付かなかった俺はそれを激しく後悔し、美羽にそれを詫びた。

美羽は俺を笑って許してくれたが……このオトシマエはいつか必ずつけてやる。

その後俺と美羽は太守として赴任する為の準備を進めていたのだが、俺達の状況は袁紹と比べて厳しい。

まず袁紹の取り巻きの親族達によって袁家の財産の大部分が抑えられてしまった。

実質上の袁家の後継者が袁紹という印象が強いせいで袁家の財政を任されていた家臣共が袁紹にすり寄ったのだ。

事前に手を打っておいたおかげである程度は確保することが出来たが、それでも心もとないことは確かだ。

次に問題なのは赴任先の事だ。

当初美羽に任されることとなったのは荊州の南陽だったのだが、これに揚州の寿春が加わった。

寿春近辺を治めていたのは江東の虎こと孫堅。

元は長沙の太守だった孫堅は水賊討伐のために駆り出され、呉群を本拠地としていた。

その孫堅が劉表と争った結果死亡したのだが後を継いだ孫策は若年で配下の豪族が次々と離反。

事態に収拾がつかなくなり、隣りの南陽に赴任する美羽が寿春も預かる事となったのだ。

孫策達の身柄も美羽が預かる事になるらしい。

正直これは内に爆弾を抱えているのと同じだ。

孫策と言えば江東の小霸王として名を馳せる人物。

そんな人物が親の土地を他人に奪われたままでその配下に甘んじている筈がない。

それに加えて赴任地の南陽、寿春は汝南郡に近い。

袁家は汝南袁家と呼ばれるように汝南郡が本拠地だ。

そんなところに美羽が赴任すれば莫迦で欲の張った親族共がすり寄ってくる事は目に見えている。

つまり俺達は赴任早々資金が少ない事に加えて爆弾を二つも抱え込むことになったわけだ。

これは何らかの対策を立てておかないとまずいな……。

そうして俺が頭を悩ませていると部屋の扉が叩かれた。

「泉、今大丈夫かや？」

「ああ、大丈夫だぞ」

聞きなれた美羽の声に顔を上げると美羽が部屋に入ってきた。

だが美羽の顔を見た俺は思わず顔を顰める。

美羽は今にも泣きそうな顔をしていたのだ。

「……………美羽」

「すまん、泉。しばらく……………背中を貸してくれんか？」

弱弱しい美羽の声に俺は黙ってうなづいた。

視線を床に戻した俺の背中に美羽が寄りかかり……やがて俺の服が湿り出した。

「……ヒック、ヒック」

部屋の中に美羽が泣く声が静かに響く。

「のう、泉……。何故皆父上が亡くなったというのに全く悲しまないのじゃ？」

「……」

「別に妾は袁家の当主の座などそこまで気にせんかったのじゃ。麗羽姉さまの方が年上じゃし……知り合いの官吏も多い。皆が言うなら妾は心おきなく麗羽姉さまに当主の座を譲るつもりじゃったのじゃ」

「……」

「なのに麗羽姉さまやあ奴らは父上が亡くなった途端に動き始めよった……。麗羽姉さまもあれだけ父上に可愛がられておったのに……全く悲しそうな顔を見せん……」

弱音を吐く美羽に俺は何も言う事が出来ない。

美羽はしっかりしているとは言ってもまだ11歳だ。

そんな美羽は羽羽様を失ってかというものの慌ただしすぎる日々を過ごしてきた。

まだ幼い美羽にとってその負担は大きかった事は想像に難くない。
それでも美羽は名目上の袁家の当主として弱さを見せなかった。

おそらく欲にまみれて動く親族共や家臣達を見て自分がすっかりし
なければいけないと考えていたんだろう。

俺は泣き続ける美羽の頭を黙って撫でながら自分の無力さを噛みし
めていた。

「…………ふっ、すまなかったのう、泉」

しばらく泣き続けた美羽だがやがて泣きやんだ美羽は少しスッキリ
とした顔を見せた。

「なに、背中を貸すぐらいしか俺には出来なかったからな…………」

泣きやんだ美羽と俺は俺の寝台に並んで腰かけていた。

そういえば最近美羽とのんびりした時間が取れなかった気がするな
…………。

「のう、泉。泉は妾についてきてくれるのかや？」

「あ？」

突然の美羽の言葉に俺は驚いて美羽の顔を見つめる。

「何をボケたこと言ってるんだ？俺は美羽の『けらい』だろ？」

予想以上に弱気になっているらしい美羽に俺はからかうように言い
きった。

我ながらこんな不器用な慰め方しかできない自分が恨めしい。

だが俺はあの日の誓いを破る気は毛頭ない。

どうなっても俺は最後まで美羽の側にいるつもりだ。

「……………そうかや」

「全く……………くだらないこと柄にもなく考えているんじゃないよ」

安心したような笑みを浮かべる美羽の頭に俺は軽く手を置いた。

「……………のう、泉、もう一つお願いがあるんじゃないか？」

「ん？」

「久しぶりに一緒に寝てくれんかの？」

何気ない一言に俺は固まった。

いや、落ち着け俺。

美羽はただ一緒に寝て欲しいだけだ。

初潮も迎えていない幼女に欲情するなんてありえんぞ！

「……い、いや、それはちょっと……」

気まずげに断ろうとした俺だったが……。

「駄目かや？」

「うつ！？」

見上げるようなお願いする美羽の願いを無碍に断るなんて出来よう筈がなく……。

俺はその日理性を総動員しながら寝る事になるのだった……。

ちなみに寝ぼけて美羽が俺に抱きついてきたせいで背中に感じる柔らかい二つの感触を必死で気にしないようにして一晩耐えきった俺は自分を褒めたい。

……情操教育もしっかりしておくべきだったか？

第3話 人材

SIDE 樂就

「うむむ……困ったのう……」

「ああ、これは少し拙いな……」

美羽と一緒に寝る事になり、間違いなく俺が最大の試練と思われる拷問を乗り切って暫く経ったある日、俺と美羽は袁家の屋敷の一角で顔を突き合わせて悩んでいた。

荊州に出発する日も近づいており、その準備は着々と整っているのだが俺達とはある問題に直面していたのだ。

俺と美羽の前には書類が置かれていてそれには人の名前が並べて書かれている。

「どう考えても少なすぎる……」

「やはり麗羽姉様の方が羽振りが良いからのう……」

美羽は溜め息を漏らす但其の思いは俺も同じだ。

美羽が太守として赴任するに当たって俺達が直面した最大の問題は人材だった。

赴任地の南陽や寿春には元から役人達が既にいるが、孫家や汝南の袁一族の影響を受けている可能性が非常に高い。

現地で人を見極めるにはかなりかかるだろう。

当面の統治を行うには元から信頼出来る家臣団を連れていくのが最も効率が良い。

だがその肝心の連れていく人材が殆どいないのだ。

漢王朝の高官を歴代輩出してきた袁家には相応の家臣団が存在する。

だがその家臣団達は袁家の実質上の当主となつた上に財産の多くを押えてしまった袁紹側についてしまった。

俺達としても袁紹が家臣を引き抜いていくのをただ黙つて見ていたわけではなく、ついでに不正を働いていた家臣や強欲な親族達を袁紹に押し付ける事が出来たのでそれはいいのだが、やはり人材が足りない事は不安要素だ。

羽羽様に仕えていた古参の家臣達は美羽側についてくれる者が多いが、高齢で旅に出る事に不安があったり政治の中心地である洛陽に残しておいた方がいい者の事を考えると美羽について荊州に向かう事の出来る人材が殆どいないのだ。

朝廷の官吏や洛陽の私塾を尋ねてみたりもしたのだが、袁家の当主は袁紹という印象はかなり強く広まっており、美羽に付いてきてくれるという人材は殆ど見つからなかった。

一応収穫が無かった事わけではなく、俺達が人材を集めているという事を聞いたらしい張勳という少女が仕官してきたのだが、どう見てもこの張勳という少女は美羽を欲望の対象として見ているらしい

節があつてどうも信用が出来ない。

俺の教育の影響で袁家のお嬢様ながら地位の高い者達との付き合いよりも身分を気にしない平民との付き合いを好むようになって美羽としても張勳といると気持ちが悪く落ち着かないらしい。

「ったく、姫さんも泉も何暗い顔してんだ。気楽にいこうぜ？」

俺と美羽が頭を悩ませていると部屋にいなかった筈の男が琵琶の気の抜けるような音とともに声を掛けてきた。

「おお！雄ではないか！」

「雄……いつもいきなり現れるなど言っているだろうが……」

突然現れた男に対して美羽は歓声を上げるが俺は腐れ縁の友人の登場に頭が痛くなる。

派手な着物を身につけ、茶色の髪をオールバックにし、何故か琵琶を抱えた男の名は？燕、字を飛高、真名を雄という。

俺の浮浪児仲間だったのだが、袁家に俺が保護されてから姿を消してしまっていた。

俺はコイツが死んでしまったのかと思つて暫く落ち込んだりしたが、俺が美羽の教育係となった頃にひょっこりと俺達の前に姿を現した。

神出鬼没で謎な所が多いが人格は確かで信頼出来る奴ではあるので美羽に紹介したところ美羽も陽気な雄の事を気に入り、それ以来俺

と共に美羽に仕えている。

これだけ目立つ容姿をしていながらも隠密活動を得意としていきなり部屋にいたりする事はしばしばある事だった。

「それより朗報があるぜ？袁紹についていた奴が二人程こつちに付きそつだ」

「ほう……」

「本当かえ？裏があつたりするのかなの？」

雄の一言に俺と美羽は目を細めた。

この状況で人が増える事は望ましいがスパイという事も十分に考えられる。

美羽もそれに思い当つたようだ。

「それはないな。元々袁家の元書生で田豊と沮授っていうんだが上司の逢紀が袁紹について成り行きで袁紹側についただけで袁紹に会つて失望したみたいだぜ？」

沮授と田豊……史実だと二人ともその才を絶賛されながらも袁紹に冷遇され不遇のまま死んだ軍師だ。

袁家の元書生だとは知らなかったな。

書生というのは役人となる前に誰かの保護を受けて勉強や仕事の下積みをする人の事だ。

保護するのは朝廷の高官が多く、高官としても優秀な人材をそのまま自分の勢力に組み込む事が出来るから先に見える高官なら書生を多く抱えている者が多い。

羽羽様も例外ではなく、病に倒れられる前には袁家に大勢の書生を抱えていた。

それはともかくその二人には会ってみる価値がある。

美羽を見やると美羽も俺の方を見て頷いた。

「今妾達には人が足りぬ。是非その二人にはあってみたいのう」

「姫さんならそう言うと思ったぜ。実は二人とももうこっちに向かっているんだ」

美羽の言葉に雄は軽く笑う。

「相変わらず手回しがいいな、雄。どんな手を使ったんだ？」

「何、町で悩んでいるみたいだったから俺が噂話を聞かせてやっただけさ。『袁公路様は平民とも気軽に交わられているらしい。高飛車な袁本初様より親しみやすい袁公路様の方が好きだな』とさ」

「……………」

隠密役として優秀なのは結構なんだが何で誰もコイツの事を怪しく思わないんだろうか？

雄の言葉に俺の謎は深まるばかりだった。

第3話 人材（後書き）

今夜中に次話投稿予定です。

第4話 王器（前書き）

ネタキャラに注意です。

第4話 王器

SIDE 樂就

「袁公路様にはお初にお目にかかります。私は姓を沮、名を授、字を信貫と申します。以前袁周陽様の元で書生をしておりました」

「翠香は姓が田、名が豊、字は元皓です。よろしくお願いするですよ」

面会を希望してきた二人は少し……いや、かなり個性的な奴らだった。

沮授はこげ茶色の髪をショートカットにしたどこか男の子っぽい印象を受ける女の子で頭に載せたシルクハットのような帽子が印象的だ。

田豊の方は沮授と同じくこげ茶色の髪を長く伸ばしており、頭には三角巾を巻いている。

気が強そうに見えるものの沮授の後ろに隠れる姿はどこか小動物っぽさを感じる。

どこか西洋人形のような印象を受ける二人は瞳が翠と紅のオッドアイで左右対称な以外はほとんど同じ顔立ちをしていた。

「妾が袁公路じゃ。それでこやつは……」

「姓を樂、名を就、字は守路と申します。美羽の守役を務めさせて頂いています」

挨拶に応える美羽に続いて自己紹介をする。

ちなみに雄は二人が来る前に姿を消したが……多分この部屋の天井裏あたりでこの部屋を見守っているんだろう。

「さて、沮信貫殿に田元皓殿、良く来たの。本題に入る前に聞いたい事があるのじゃが……良いかや？」

……また美羽の癖が出たか。

美羽がこういふふうに目を輝かせている時は大抵その旺盛な好奇心が刺激された時だ。

どう見ても双子にしか思えない沮授と田豊の存在について好奇心が刺激されただろう。

こういふ時の美羽は止めるだけ無駄なので俺は放置している。

「二人は良く似ておるが……双子なのかや？」

「……はい、僕と翠香は双子です。外聞が悪いということで僕は生まれてすぐに沮家に養子に出されました」

沮授は美羽の質問に若干顔を曇らせながら話した。

双子というのは獣と同じように複数の子が生まれる事から獣腹として忌み嫌われている。

非常にバカげた話ではあるが、迷信というものが根深く根付いているこの世界では双子は差別の対象となっていて場合によっては生まれてすぐ殺される事もある。

それからすれば養子に出された沮授は幸いなのだろうか……あまり聞かれたくない話だろう。

その証拠に田豊は何も言わずに沮授の後ろに身を隠している。

「やはりそうなのかや！妾は会うのは初めてじゃ！本当に良く似ておるのう」

だが好奇心が刺激された美羽は止まらずに興味深く二人を交互に見やる。

その様子に二人は若干ひいていた様子だが、美羽の視線に侮蔑が全く混じっていない事に気付いたのか田豊が恐る恐る顔を出した。

「あの……翠香達を気持ち悪いと思いやがらねえんですか？」

……なんかこいつ見ていると美羽とは別の意味で癒されるな。

小動物そのままのような田豊の態度を美羽も感じ取ったのか頬を緩めている。

「何でじゃ？同じ母親から生まれたのじゃ、お主らは普通の姉妹と

変わらないじやろう？のう、泉？」

そこで俺に振るか？

「そうですね。お二人が双子だとしてもお二人は別の人物です。お二人の人柄とは全く関係がありません。そもそも美羽がお二人を差別されるようなら私は美羽とこうして話せませんよ」

俺の答えを聞いた田豊と沮授はそのまま考え込んでしまった。

『やはり……』とか呟いているところを見ると恐らく俺が元浮浪児であるという話を聞いていたりしたんだろう。

本当かどうか信じられなかったのは袁家のお嬢様が元浮浪児を傍に置いていたという話が現実味が無く、なかなか信じる事が出来なかったに違いない。

少し考え込んでいた二人はやがて顔を上げた時には意を決した顔をしていた。

「一つだけお答え下さい。袁公路様はこの先の世の事を如何に考えておられますか？」

沮授の疑問に美羽は少し頭を傾ける。

おそらく頭の中を整理しているんだろう。

沮授と田豊は間違いなく美羽の器を試している。

これは美羽が解決すべき問題であって俺が助言する事は許されな

い。

だが俺は何故だか美羽の答えについて不安はなかった。

「漢王朝に仕える袁家の妾が言うべき事ではないと思うが……間違ひなく荒れるじやろうな。宦官達が力をつけた為に政治は腐敗しておる。賄賂と売官の銭の為に地方、洛陽を問わず重税が掛けられ民の心は既に漢から離れているのじゃ。最近賊が多くなっている事が何よりの証拠じゃろう」

少し考えた後淀みなく答えた美羽に沮授は頷き代わって田豊が前に出る。

「では袁公路様はその荒れた世でどうしやがるですか？」

更に一步踏み込んできたか……。

それにしても二人ともかなり大胆だな。

これだけ胆力があればあの袁紹に諫言する事は辞さないだろうが・
・あの袁紹が聞く筈がない。

恐らく二人とも史実通りに袁紹から冷遇されただろう。

さて、美羽は二人の期待に応えられるか……いや、愚問か。

「妾は自分が大陸を統べるべき器だとは思っておらん。妾は強くもないし、頭もそれ程良いわけではないから。世で乱世を統べる英雄が居るとしたらそれは麗羽姉様の友の曹孟徳殿のような者じやろうな。何度か遠目に見た事があるが……あれは覇を唱えるじやろう

者じゃ」

美羽の答えに二人は落胆したようだったが美羽の言葉はまだ終わっていない。

「……じゃが妾は曹孟徳殿が王になつたとしても従う事は出来ん。大陸を統一しようとするればそれには莫大な時間と血が流れるじやろう。上に立つ者は大陸を統一する事こそが平和の道と言つかも知れんが妾はそう思わん。そもそも大陸という考え自体がおこがましいのじゃ」

「どういう意味でしょうか？」

美羽の言葉を疑問に思つたらしい沮授が頭を傾げた。

まあ分からなくはない。

いわゆる中華思想はこの国の基本だ。

美羽は俺のせいでその常識が薄れているが。

「そもそも大陸とは何じゃ？この国は南蛮とも北の異民族の地とも繋がつておる。西には大秦という国もあるらしいの。同じ大地にこれ程の国があるというに……この国のみが大陸を名乗るとはおこがましいとは思わんかえ？」

「「！！！！」」

逆に美羽に問いかけられた二人は呆然としている。

この国の常識に根本から喧嘩売っているからな。

「まあそれはおいておいても覇を唱える輩は己が上に立つ為に血を流し続けるじゃろつな。じゃがその血を流すのは下の民達じゃ。そもそも妾達は民が居らねば生活が成り立たん。今着ておる服も食べている物も……汗を流して作っておるのは民達じゃ。妾達は民によって支えられておる。戦が起きても国が荒れても困窮するのは民じゃ。ならば妾は妾を支えてくれる民を守らねばならん。妾達を支えてくれる民の生活を守る事……それが妾の為すべき仕事じゃ。その為に国がこれ以上あれるような戦は必ずや防がねばならん。例えばその相手がどのような者であろうと……の」

美羽が話している間俺は口を挟まなかったし、二人も口を開く事は出来なかった。

美羽の声は大きなものではなかったが心に沁みわたるような一種の気迫があった。

正直羽羽様にこの美羽の姿を見せたかったが……俺もしかしてやり過ぎたか？

この時代は王権神授説のような発想に近い考えが元になっている。

即ち天帝の代理として皇帝が国を治めるといふ発想だ。

美羽のような考えははっきり言って異質だ。

二人にこれが受け入れられるか？

「……とまあ妾の考えはこんなところじゃの。そうそう、この話は

お主らだから話した事じゃ。他の者には内緒にしてたもれ？」

それまで漂わせていた一種のカリスマ的な雰囲気を打ち消すように美羽は悪戯っぽく笑ったが沮授と田豊は硬直したまま動かない。

流石にまずかったかと俺と美羽が思っていたら二人はいきなり動き出し、顔を見合わせると一度頷いて次の瞬間には見事な跪礼をとっていた。

「この沮信貫、袁公路様を終生の主として戴きたく存じます。僕の真名は蒼香、忠誠の印としてお受け取り下さい！！」

「田元皓も右に同じですう！翠香の真名、是非受け取って欲しいですう！！」

美羽の話が二人に受け入れられるか微妙なところだったが見事に通じたらしい。

俺の方へ顔を向けてきた美羽に俺は大きく頷いた。

「二人の真名、確かに妾が預かった。妾の真名は美羽じゃ。妾は堅苦しい事が嫌いじゃからの、気楽に話してくりゃれ」

「俺の真名は泉だ。これから一緒に美羽を支えることになる。よろしく頼む」

美羽が真名を名乗ったなら俺も真名を預けないわけにはいかない。

それにこの二人はかなり気骨がありそうだ。

これから美羽を支える大きな力となってくれるだろう。

「は、はい、美羽様よろしくお願ひします！泉殿も僕の真名をお受け取り下さい」

「美羽様、よ、よろしく頼むですう。翠香も真名をお願いするですよ」

二人はいきなり美羽に真名を預けられたためか少し硬くなっている。

美羽はそれにかなり不満そうだ。

「むう……二人ともそう畏まらずとも良い。言葉使いも普段と同じにしてたもれ！」

「分かったですう。ただ翠香は元からこの口調ですよ。これは美羽様にも勘弁してもらおうしかねーです」

「翠香！？」

「どうしたですか、蒼香？美羽様が言ってるですから翠香達は従うですよ」

「うう……。僕も従うよ、美羽様」

蒼香は不満を漏らす美羽に主にタメ口を聞いて良いものか悩んでいるようだったがこの辺りは翠香の方が肝が座っているらしい。

蒼香がしぶしぶときこちなく話すと美羽の顔が明るくなった。

その途端に部屋に奇妙な音楽が響く。

……またアイツか!?

「幸せだなあ」

「ほえっ!？」

「うわわっ!？」

いきなり後ろに現れた雄に声を掛けられた翠香と蒼香が思わずその場を飛び退いた。

「いい加減人の後ろから話しかける癖も止めろっていつてるだろうが、雄」

俺がこめかみを押さえつつ文句を垂らす雄は一向に気にした様子が無い。

「俺は？燕、字が飛高で真名は雄って言うんだ。共に姫さんに仕える者同士よろしく頼むよ」

気楽に話しかける雄に対して二人は警戒しまくって後ろに下がっている。

特に翠香の方は既に涙目だ。

「翠香、蒼香、そう怖がらずとも良いぞ。雄は妾の元で隠密をしてくれておる。人を驚かす事が趣味の困った奴じゃが基本的には無害じゃ。ただの変な男と思えば良いぞよ」

「ああ、基本的に変人だが人格だけは確かだ」

「美羽も泉も何気にひどい事いつてねえ？」

「気のせいだ」「気のせいじゃ」

「おい、俺に目を合わせろよ!？」

大げさに反応する雄とそれに応じる俺達を見ていて最初は呆然としていた翠香と蒼香だったがその様子が可笑しかったのかやがて笑いだした。

「ぶっ、あはははは！」

「きやははは、わ、笑いが止まらねーです」

いつのまにか堅苦しい空気は吹き飛んでしまったようだ。

雄はこの辺り結構気を使ってくれるんだよな……。

二人の笑いが納まった頃俺達は改めて顔を合わせた。

「さて、翠香、蒼香、改めて歓迎するのじゃ。これからよろしく頼むのじゃ」

「うん、いちからこそ」

「よろしく願いますよ」

笑顔で握手する美羽達を俺と雄は少し離れて見ていた。

「なんとか治まったな」

「ああ」

美羽も最近年齢が近い女の子が傍にいなかったからな……。

正直あの二人が来てくれて良かった。

正直いくら俺がいても相談しにくい事もあるだろうし……。

微笑ましく俺が様子を見ていると雄が俺の事をじつと眺めているのに気が付いた。

なんだか視線に呆れが混じっている気がする。

「何かあるのか？」

「いや、お前あの光景見て何か感じねえのか？」

感じる？

一体何を？

「いや、美羽も俺に相談しにくいこともあるだろうし……同性で年の近い奴がいる事はいい事だろ？」

「……お前……本当に鈍いな……」

呆れたように雄が呟くが俺には何のことだが良く分からない。

まあこいつなら本当に問題になるようなら止めるだろうし大丈夫だろう。

こうして蒼香と翠香を仲間に加えた俺達は洛陽を後にして荊州へと向かったのだった。

第4話 王器（後書き）

なんだか美羽様が原作の影がほとんど無いキャラに。
誰だろコレ？

以下オリジナルの登場人物について。

？燕

別名張燕ともいう。

史実において黄巾党の乱に便乗して黒山賊という集団を率いて暴れた山賊。

その後曹操に帰順した。

その名の通り、迅速な用兵を得意とした事から飛燕と呼ばれていた。

今作では主人公の友人のポジ。
モデルは某華撃団の月組の人。

沮授

史実では袁紹に仕えた軍師でその才は諸葛亮にも匹敵すると言われる。前半は活躍して袁紹を河北の覇者にしたものの冷遇され、遠ざけられた。

モデルは薔薇姉妹の四女。

田豊

沮授と同じく袁紹に仕えたが冷遇された人。曹操が袁紹と対峙するにあたって最も警戒したと言われているが、諫言を聞き入れられず牢に入れられた。

モデルは薔薇姉妹の三女。

第5話 初陣1（前書き）

何か最近ノリがいいです。

その分美羽様の暴走度もアップしておりますが。

気付いたら日別ランキング4位に・・・。

別の作品だと殆どランクインしていないのに・・・。

第5話 初陣1

SIDE 樂就

荊州に赴任する美羽に従って洛陽を出立した俺達だが旅程は順調だった。

俺達が出発する一月前に洛陽から冀州へ発った袁紹は派手好きで金ピカな鎧を身につけた兵士を大勢引き連れ多くの私財を見た目美しい白馬に曳かれた豪華な馬車に載せて行列を作り、その話は洛陽中で話題になった。

それに対して俺達はかなり地味だ。

元々俺達は資金にそこまで余裕があるわけではない。

なので引き連れる人員も必要最小限に絞っている。

具体的には俺、美羽、雄、翠香、蒼香、張勳に加えて少人数の家人と世話役の女官が数人、それと護衛と運送役を兼ねた兵士が三百人位。

兵士達は金ピカの鎧などではなく、柿色の鎧に統一している。

地味ではあるが装備自体は一流のものだ。

持っていく私財も最小限にしてあるので荷物の殆どは兵糧になっている。

本当なら荷物は出来る限り少なくしたいので途中寄る予定の町で補給する手配をしたかったのだが、事前の調査でどの町もあまり食糧に余裕がないようだったのでこればかりは兵糧を多めに用意する他はなかった。

馬や馬車は軍用のものを使っているので耐久性が高く、今のところ問題は起きていない。

唯一起きた問題と言えば当初野営する時に天幕の準備等に手間取った事くらいだが、これも兵の中に何人か古株で遠征を経験した者がいた為にその兵士達に指導役を頼んだ御蔭で今では手慣れたものになってきている。

その際に兵士達の中心となった李豊と梁綱という人物を美羽と相談の上で抜擢することにした。

二人とも歴戦の兵といった風格を持っていて百人程度の兵の指揮なら問題なく行えそうなので二人には百人ずつの兵の指揮を委ねた。

そして美羽は兵士達に守られた一番大きな馬車に乗っている・・・ということになっている。

「うむ、風が気持ち良いのじゃ」

溜め息を吐きつつ横を見た俺の視線の先にいるのはご機嫌な顔で馬に乗っている美羽。

連れている兵士と同じ柿色の兵装に身を包んだ今の美羽は事情を知らないものから見たら俺に従っている副官にしか見えないだろう。

洛陽を出た当初は美羽は馬車に乗っていたのだが、馬車から見る風景が退屈に感じた事と何かと馬車を訪ねてくる張勳が煩わしく思った美羽の希望で今の美羽は一介の兵士に化けている。

この事を知っているのは俺、雄、翠香、蒼香、李豊殿、梁綱殿と女官の一人だけで他の者には美羽が体調を崩して馬車に閉じこもっている事になっている。

ちなみに女官は美羽の身代わりとして馬車の中にいたりする。

美羽の好奇心から起こった事態ではあるが、賊に襲われた時真っ先に狙われるのは馬車であろう事を考えると美羽の安全上悪い事ではない。

「それにしても美羽様は中々馬術が上手いです。今まで乗る事が多かったですか？」

俺から見ても美羽の馬の乗りこなしは中々のもので、それに感心したらしい翠香が感嘆の声をあげる。

「ん？妾は最初泉と一緒に馬に乗っておったのじゃが一人で乗りたくなつての。練習したのじゃが中々上手く乗れなかつたのじゃ。そうしたら泉がこの鐙を作ってくれての、これを使ったら馬に乗るのが大分楽になつたのじゃ」

「確かにこの鐙というのは凄いよ。僕もあまり乗馬が得意じゃないけど凄く乗りやすい。これは僕達の凄い武器になるよ」

「まあ美羽が初めて馬に乗った時馬の腹に足が届かなかつたからな。それを何とかする為に考えたんだ」

美羽の話に感心する蒼香に俺は適当な話をする。

この時代の馬具には鐙が無く、騎乗者は足で馬の胴を締め付けていた。

そのため足が短いとそれだけで乗馬には不利になる。

美羽が上手く馬に乗れなかったのは足が馬の腹に届かなかった為でそれに気付いた俺は鐙の存在を思い出したのだ。

無論これは他の人に話せる知識ではないので単に思いついた事になっているが。

「ふえ〜、泉はスゲーですねえ」

「本当に泉って博識だよな、いろんな書物の話とか知ってるし」

「ふふ、当然なのじゃ 泉は妾の一の『けらい』じゃからの」

翠香と蒼香から尊敬の籠った視線が俺に向けられるが何だかいたたまれない気持ちになる。

俺が何とかこの時代で才を示していられるのは前世の知識の上乗せがあるからに過ぎない。

おそらく純粋な才能では後世に名前を残している翠香と蒼香の方が上の筈なのだ。

だが俺もこの時代で無為に生きてきたわけじゃない。

袁家に身を寄せてから磨いてきた学問と武芸はおれの身体にしっかりと身に付いている。

俺は俺の出来る事をして美羽を支えていけばいいのだ。

そう思いを確認して俺は後ろで聞こえる美羽達の会話に耳を傾けつつ馬を進めた。

異変が起きたのは司隸州から出て荊州に入った頃だ。

「あれは……雄の先遣隊か？」

前方から近づいてくる人影に気付いたのは集団の先頭を進んでいた俺だった。

近づいてきた影は馬に乗った兵であり、その兵は黒い旗をさしていた。

それは雄の率いる偵察・諜報部隊の隊員の証だ。

隠密部隊を指揮している雄はこの旅でも偵察を引き受けていて先行隊を率いていた。

これまで道中を安全に進めたのも雄率いる先行隊の働きが大きい。
その先行隊が走ってきたということはこの先で何か起きたということだろう。

「……何があつたのじゃ？」

俺の咳きを聞いて前方に気付いた美羽達も会話を止め、近づいてくる兵士に注目する。

「全軍止まれ！」

俺が号令を掛けると進んでいた隊列が前進を止めた。

少しして俺達に合流した兵士は素早く下馬するとそのまま跪く。

「報告します！この先にある村が賊に襲われております！賊の数は四百人程！対して村は腕の立つ者3人が中心となり抵抗しております！？燕隊長は暫く様子を見るとのことです！」

兵士の報告にその場を緊張感が覆った。

四百人……賊としては中々の規模だ。

雄の先行隊は20人程の筈だから雄が様子見を決めたのは隊を率いるものとして正しい判断だろう。

俺は美羽に視線を向ける。

「ここは既に荊州、即ち妾が治める土地じゃ。その民が賊に襲われ

ておるのじゃ。見過ごす事なぞ出来んの」

美羽の言葉に俺、翠香、蒼香がすぐさま頷いた。

「賊の数は四百、こちらは三百だが荷駄もある。ここに半数を残して半数で村の救援の行くべきだと思うが……」

「賛成だね。だけどこちらは歩兵も多い。ここは騎馬隊を先行させて村の救援を急ぐべきじゃないかな？」

「騎馬隊は全部でも百人程しかいねーです。それだと少し不安が残るですよ。ここは騎馬隊が先行した後で歩兵二百の内半分を誰かが歩兵を纏めて後詰にするべきです。荷駄を守るには歩兵が百もいれば十分ですよ」

すぐさま各々が考えを述べて意見を統一していく。

「それなら俺が騎馬兵全てを纏めて先行しよう。雄と合流すれば少し賊の数が多くても大丈夫だろう。その後で李豊殿に騎馬兵を除いた李豊隊の歩兵と俺の隊の歩兵の半分を率いて来てもらう。この兵は梁綱殿に任せる。それと翠香には俺と一緒に付いてきて貰う。蒼香はこの場に残ってくれ」

翠香と蒼香の意見も入れて俺が案を纏める。

美羽の方を向くと美羽は首を縦に振った。

「それで良いのじゃ。泉、民を守るのじゃー！」

「了解！」

「美羽！？何でお前がついて来てるんだ！？」

何故か美羽が俺と一緒に馬を並べてついてきていたのだ。

守るべき大将が俺と一緒に賊に突撃してどうするよ？

思わず怒鳴り声を上げた俺を美羽は睨むように見返した。

「妾の民が襲われているのじゃぞ！？それを黙って見過ごす事なぞ出来ぬ！」

「だからって……お前が前に出たら元も子のないだろうが！」

「もう妾はあの時のような事は嫌なのじゃ！妾だって戦えるのじゃ！泉だけに手を汚させるようなことなぞ出来ぬ！……それに泉は必ず妾を守ってくれるのである？」

……それを言うか、美羽？

そんな事言われたら……俺は従うしかないだろうが！！

「ちい、分かったよ！！だけど絶対俺から離れるんじゃねえぞ！？」

「分かったのじゃ」

無理矢理自分の感情を納得させた俺は前に向き直る。

全く誰が美羽をこんなじゃじゃ馬に育てたんだか……って俺か。

これで美羽を守れなかったら羽羽様にも申し訳できないぞ……。

「美羽様に愛されてるですね、泉？」

後ろから翠香の声が聞こえたが俺は聞こえないふりをした。

第5話 初陣1（後書き）

・・・もはや美羽がもう完全なオリジナルキャラと化しました。

批判等はしつかりと受け止めますので何かありましたら感想のほうへどうぞ。

以下オリジナル武将説明

李豊

史実では袁術が曹操と戦った時に袁術の命で曹操軍を止める為の捨て石にされたものの楽就・梁綱と共に最後まで戦った武将。
今作では登場したものの基本モブキャラ扱い。

梁綱

史実では袁術が曹操と戦った時に袁術の命で曹操軍を止める為の捨て石にされたものの楽就・李豊と共に最後まで戦った武将。
今作では李豊と同じくモブキャラ。

第6話 初陣2（前書き）

あ…ありのまま 今起こった事を話すぜ！

『日刊ランキングで4位に入って感激したと思ったら次の瞬間には2位になっていた』

な…何を言っているのかわからなーと思うがおれも何が起きたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

というわけで投稿します。

今作者的に今までからしてみたらあり得ない程の速度で執筆中です。

第6話 初陣2

S I D E ????

「ハアアアアツ!!」

雄叫びを上げながら両手に持った槍を振り回す度に賊が2、3人ずつ倒れていく。

既に門が破られた後で私自身が先頭にたって戦い始めてから半刻程が経っただろうか。

ずっと双槍を振り回し続けてきたせいで私の腕の感覚はもう殆ど残っていない。

正直に言っただけを抜いた瞬間に今にも槍を落としてしまいそうだ。

私の周りに見えるのは私が斃した賊の死体と私を遠巻きに囲んでいる賊達の姿。

賊達と渡り合っているのは私一人しかいない。

全く……本当に私はツキがないな……。

私は冀州の下級官吏の子としてこの世に生を受けた。

私の家は代々冀州の地方官吏を務めてきた家柄だったが、世が乱れるに従って役人の間では賄賂・売官が横行して真面目な人間が多かった私の一族は次第に没落していった。

そんな家に生まれた私は世の役に立つ為に幼い頃から武と知を磨き続けていたのだが、師から一人前として認められた時に私は師から己を為すべき事を探す為に旅に出る事を勧められた。

師の勧めは尤もであると感じたし、私自身見聞を広げたかった事もあつて私は旅に出た。

腕には自信があつた私は用心棒や商人の護衛、地方の軍の客将等をして路銀を稼ぎながら旅をしていたのだが、途中立ち寄った町で漢の名族である袁家の当主が私の故郷である冀州の太守になるという話を聞いた。

私の故郷にそんな名声高い人物が来ると知った私は是非その噂の袁家の当主殿に会つてみたいと思つて我が故郷へと向かつたのだが……
…実際の袁家の当主、袁本初殿は酷いものであつた。

私は袁本初殿が洛陽から冀州へと向かう道中に立ち寄った町で袁本初殿の一行に追いつく事が出来たのだが……。

袁本初殿の行列は良く言えば豪華絢爛、率直に言つてしまえば成金趣味の権化のようなものだった。

いくらなんでも馬車から鎧まで全て金ピカはないだろう。

その金で一体どれ程の民を救えると思つているのか。

さらに袁本初殿は町で物資の補給をしておられたが、今の世はただでさえ物が不足している。

そこで袁本初殿の一行のような大集団が物を求めればその町はたちまち成りゆかなくなってしまう。

正直その時点で既に気落ちしてしまった私だがそれでも一縷の望みをかけて袁本初殿に客将として仕官を希望してみた。

だが帰ってきた答えは『下働きとしてなら喜んで雇ってあげますわ』というふざけたもの。

仕官を希望してきた者がいるというのに実力どころか顔さえ見ようとせず下働きとして雇おうとする。

対応に出た顔良という者は私を引き止めてくれたが、これが名門・袁家の当主かと失望した私はその場を後にした。

だがそれはそこまで悪い事では無かった。

袁本初殿に失望し、荷物を纏める為に宿に戻った私は同じく袁本初殿に失望したという真里……徐元直という少女に出会った。

真里は博識でしかも中々腕も立ち、話が弾んだ。

意気投合した私と真里は仕える主を求めて共に旅をする事にした。

荊州に真里の世話になった方がいるらしく、その方はかなり学識に優れた人物らしい。

その方ならもしかすると立派な人物をご存知かもしれないということとで私と真里はその方に会うべく荊州へと向かった。

隊商の護衛をして路銀を稼ぎつつ荊州に向かった私達だがその途中で同じく隊商の護衛をしていた華漣……紀義伯と知り合った。

その護衛が前の町で解散となつて私達はその町から荊州に向かう事にしたのだが、そこで華漣が荊州に入つてすぐの場所にあるという故郷の村に寄つていく事を勧めてきた。

路銀は節約するに越した事はなく、野宿も出来るだけ避けたい私達としてはその提案は渡りに船であり私と真里はその好意に甘えることにした。

そして華漣の家で一泊したのだが……今日になつてこの村を賊が襲つてきた。

襲つてきた賊は約千人程。

華漣は私達に早く逃げるように言ってきたが、こちらとしても一晩の恩があるし友を見捨てる事も出来ない。

私達も華漣とともに村を守る為に戦う事を決めた。

真理の立てた策によつて近くの町に使いを出し、その救援が来るまで私達が時間を稼ぐ事になつたのだが……。

元々この村は農村故に戦える者が少ない。

農具を武器として手にとつた村人達も負傷してこの場から下がり、この場で戦っているのは私一人だ。

真里の発案によつて戦えない村人が私の後ろから石を投げて擁護し

てくれているが戦いが始まった当初は効果があったそれも時とともに村人の体力が尽き、投石がまばらになってしまっている。

おそらく村のもう一つに入口を守っている真里と華漣も私と同じような状況だろう。

こちらに来た賊5百人のうち半数以上は倒したが……頼みの綱である援軍は全く来ない。

考えないようにしているが……おそらく町の県令は援軍を出す事を拒んだのだろう。

それでも援軍を信じて戦い続けてきたが……最早限界だ。

すまない、星。

お前との誓いは守る事が出来なさそうだ……。

しかし武人として私にも矜持がある。

賊の頭を道連れにしてやろうと私が覚悟を決めて最後の突撃をしようとした時……奇跡は起きた。

「村を助けるぞ!!全軍突撃!!」

「オオオオオツ!!!」

村全体に響き渡るような大声が響き、それに続いて雄叫びが上がる。

「くそ、新手だ!」

「いつの間に来やがったんだ!？」

目の前の賊達に動揺が走り、私に対する包囲が崩れる。

そして賊たちの隙間から見えた牙門旗の字は……『樂』と『袁』!

私は……助かったのか?

S I D E E N D

第6話 初陣2（後書き）

誰の思考なのかわからないまま次回に続きます。

次回では明らかになりますけど。

一体誰でしょうね？

あと昨日今日と投稿間隔が短かったのは作者が休日だったためです。

明日以降は更新速度がガクッと落ちますのでご了承ください。

第7話 初陣3（前書き）

ついに日刊ランキング1位！

皆様の応援に大感謝です。

思わず一気に書いていた小説を仕上げてしまいました！

今までで一番のボリュームです！

第7話 初陣3

SIDE 樂就

美羽、翠香を含めた俺が率いる騎馬隊は先行隊隊員の先導によって村の近くに到着した。

「よお、早かったな……って姫さんまで来たのか!？」

「ああ、仕方なくな……。それより状況は？」

先行隊と共に待っていた雄は美羽を見て驚いたようだが俺は先を促す。

本当ならグチの一つでも言いたいところだが……時間が無いからな。

こいつの事だからただ様子を見ていた筈がない。

下調べ位はしているだろう。

「正直ギリギリだ。すぐにでも動かないと間に合わないな」

雄は冗談は言っても嘘はつかない。

雄がギリギリと言うなら真実時間が無いのだろう。

俺が顔を顰めると傍にいる美羽と翠香も難しい顔をする。

「村の入り口は二か所。最初襲ってきた賊の数は千人位だったよう

だが、今はかなり減ってそれぞれに大体二百人位の賊が押し寄せている。それで村の状況なんだが……村を守っているのは3人だ」

「……3人!?」じゃと!?!」ですか!?!」

いくら相手が賊とはいえ3人だけで襲ってきた奴らを千人を半数以上で討ち減らした上に今も村を守り続けているって……どんな豪傑だ?

まさか張飛とかが居るんじゃないだろうか?

俺と同じように驚いた美羽と翠香も目を見開いている。

「驚くのは無理もないと思うが事実だ。最初の頃は村人が何人が一緒に戦っていたんだが負傷して下がっちゃった。それで今は1人と2人に分かれて村の入り口を守っている。村人が後ろから石を投げていることもあってそれで何とか持っている状態だ」

説明を終えた雄は『どうする?』といった視線を俺に向けてくる。

村に戦力が残っているなら挟撃して殲滅したいところだが……その余裕はないだろうな。

それなら殲滅は諦めて戦っている奴を救出する方向で動いた方がいい。

それ程の武勇を持っているのなら是非会ってみたい。

となると……。

「時間差攻撃だな」「二段階攻撃しかねーです」

俺の言葉が翠香の言葉と重なる。

思わず顔を上げた俺は思わず翠香と目が合った。

どうやら考えている事は同じらしい。

美羽は俺達の言葉を聞いて少し考え込んでいたがすぐにハッと目を見開いた。

「そうか！我らで賊を挟み撃ちにするのじゃな!？」

俺達の言葉の意味を美羽はしっかりと汲み取ったらしい。

「ああ、幸い賊は俺達に気付いていないようだからな。騎馬隊で一気に脇腹について混乱させたところで止めを刺す」

「あと一方を開け解けば賊は潰走して逃げるですよ。少しこっちの数が少ねーですが奇襲すれば大丈夫です」

これで作戦は決まった。

後はどちらから助けるかだが……。

「当たり前の話だが2人で守っている方はまだ少し持つぜ？」

雄を見やると欲しかった答えが返ってきた。

なら決まりだな。

「まず俺が樂就隊の騎馬隊を率いて突撃する。李豊隊の騎馬隊は翠香、任せていいか？」

「任せるですよ！」

俺の質問に翠香は勢いよく頷く。

それを見た俺は話を続けた。

「70もいればこちらは十分だ。雄は先行隊に梁綱隊の騎馬隊を加えてもう一方の援護に向かってくれ。こちらが片付き次第応援に向かうから戦っている二人を救出するだけでいい。あと先行隊の一人を伝令に出してもうすぐ来る李豊殿に逃げてきた賊を出来る限り掃討するように伝えて欲しい」

「ああ、分かった」

これで準備は整った。

後は実行に移すだけ……って、うん？

「のう泉、妾はどうするのじゃ？」

裾を引っ張られたので振り返ると美羽が俺を見上げながら俺の裾を掴んでいた。

いつもはしっかりしてるくせに時折こっぴど子供っぽい仕草を見せることが美羽はよくある。

「美羽は俺と一緒にいるんだろ？」

「分かったのじゃ」

本音を言うなら美羽を最前線に出したくはないんだがそれで美羽が納得する筈がない。

それならむしろ俺の近くにいてもらった方がいい。

まあ賊程度なら美羽でも大丈夫だとは思うがな。

「さて……それでは行くぞ!!」

「「「オオオオオつ!!!」」」

今ここに袁術軍の初陣が始まった。

俺は自分の獲物を手にして騎馬隊の先頭に立つ。

俺の武器は双雑刀。

柄の両方に日本刀のような刃をつけた特注品の武器。

青竜刀のように重さで叩き切るのではなく鋭く切り裂く事に特化している。

俺が美羽の教育係を任された時に羽羽様から頂いた逸品だ。

柄には鉄が通っていて普通に考えたら振り回すのは難しいような代物だが、この世界に生まれてからというものの俺の力はかなり上がっていて今では問題無く扱える。

横を見ると俺から少し下がった位置で美羽が自分の得物を構えていた。

美羽の武器はレイピアに似た刺突に特化した武器で一撃の重さはないが、それを手数で補いつつ一撃必殺を狙うのが美羽の戦い方だ。

集団戦にはあまり向かない事が難点だが……俺が注意していれば大丈夫だろう。

そうしている間に賊との距離もかなり縮まってきた。

賊達の何人かが俺達に気付いて騒ぎ始めたようだ。

そろそろ頃合いか……。

「牙門旗を掲げろ！」

俺の指示で『袁』と『楽』の二つの牙門旗が翻る。

いざという時の為に用意しておいたものだが……用意しておいて良かった。

俺はもう一度美羽の方へ振り返る。

「行くぞ、美羽。……俺から離れるなよ？」

「う、うむ。泉こそやられるではないぞ？」

多少緊張しているようだが……目はしっかりしている。

……大丈夫だな。

美羽の様子を確認した俺は大きく息を吸い込んだ。

「村を助けるぞ！！全軍突撃！！」

「「「オオオオオツ！！！！」」」

俺は号令と共に騎馬隊は雄叫びを上げて賊の集団に突入していく。

「ダアツ！！」

「ウギヤ……！！」

先頭で賊の集団に飛び込んだ俺は双薙刀を縦横無尽に振り回す。

狙いは賊の首で俺が双薙刀を振るう度に賊の首が二つ、三つと跳ぶ。

「ヤアツ！！」

「ゲエツ！？」

横目でちらりと見ると俺の直ぐ後ろでは美羽が片手でもった細剣で賊の首を貫いている。

興奮で恐怖が吹き飛んでいるようで美羽から恐れへの感情は見られない。

俺が率いる騎馬隊は40騎だが兵たちは雄叫びを上げながら次々と賊を葬っている。

「オオオオツ!!!」

少しして俺達と賊を挟んで反対側でも雄叫びと賊の悲鳴が上がった。俺達に気が向いた賊の隙を突く最高のタイミングで翠香が兵を運用してくれたようだ。

「くそ!向こうからも!」

「一体どれだけいるんだよ!!!」

「駄目だ!俺は逃げるぞ!」

「あつ!テメエ!」

なまじ賊の数が多いだけに相手は俺たちの数を把握しきれていない。挟撃されたことで混乱状態に叩き落とされた賊達の中から脱走者が始まる。

一方に逃げ道があると敵からは最後まで抵抗するという選択肢が消える。

完全に包囲しなかったのはその為だ。

しかも今回は時間との戦いだからな。

「てめえら！俺を置いて逃げるんじゃない！」

得物を振るいながら潰走していく賊の集団を眺めていると一際大きな男が怒鳴っているのが目に付いた。

もしかすると……あれが頭か？

ここで討っておきたいところだが……こちらには美羽がいる。

俺が少し迷ったその瞬間俺の脇を馬が駆け抜けていく。

……って美羽！？

恐らく戦場の空気に吞まれて興奮状態になったのであろう美羽が一直線に賊の頭に向けて馬を進めていく。

「くそつ、間に合え！！」

俺は慌てて馬の腹の蹴りを入れて美羽の後を追った。

こんなところで美羽を死なせるわけにはいかない！

「賊め！覚悟するのじゃ！」

俺より早く賊の頭の元へたどり着いた美羽が細剣を突き出す。

「……ッ！このクソガキイイツ！！！」

「あつ！！！？？」

美羽の細剣は狙いが逸れて賊の頭の肩に突き刺さったが、頭に血が上ったらしい賊の頭はそれに構わず伸ばされた美羽の腕をつかみ取り美羽を馬上から引き摺り落とした。

「死にや「お前がな！！」「！？」

そのまま地面に転がった美羽にとどめをさそうと剣を振りかざした賊の頭だが間一髪間に合った俺はその首を一振りで斬り飛ばす。

首から上を無くした身体はその場で崩れ落ちた。

「か、頭がやられた！？」

「もう終わりだ！！！」

頭が死んだ事で周りの賊が騒ぐがそんな事は俺には気にならない。

それより美羽が優先だ。

「あ、ああ……」

美羽は迫った死の恐怖にその場で呆然とへたり込んでいた。

とりあえず見たところ落馬による怪我は無さそうだ……良かった。

「大丈夫か、美羽？」

「あ、ああ……い、泉!？」

下馬しながら俺が声をかけると我に返つたらしい美羽が立ち上がるなり俺に抱きついてきた。

「うわっ!？」

「う、うう……こ、怖かったのじゃ〜!！」

「はあ、戦場の空気に呑まれたのは分かるが無茶するな……。思わず冷や汗掻いたぞ」

泣きじゃくる美羽の背中をなでつつも俺は油断せずに周囲の様子を伺う。

俺が賊の頭を討った事で僅かに抵抗していた賊達も逃げ出し始めていた。

後は李豊隊に任せれば十分だろう。

村を守って戦っていた奴は気になるが……それより残りの賊に対処した方がいいな。

「美羽、ちょっと大人しくしてるよ？」

「うう、ふ、ふえ、い、泉!？」

俺は泣きじゃくる美羽を抱きかかえると俺の馬に乗せ、俺もそのまま馬に乗った。

「賊の追撃は必要ない！すぐにもう片方の援軍に回るぞ！無事な者は集まれ！」

幸い騎馬隊の被害は殆ど無かったようで次々と俺の周りに騎馬兵が集まってくる。

ところどころに傷を負っている奴はいるが重傷と言える程の奴はいない。

「さあ！味方の援軍に向かうぞ！もう一働き頑張ってくれ！」

「「「オウツ！！」「」」

まだ兵の士気が十分にある事を確認した俺はそのまま兵を率いて雄の方の援軍に向かう。

俺らが頭を含めた賊の集団の片方を敗走させた事はもう伝わっていたようで、なんとか踏ん張ってくれていた雄の部隊と合流した俺達が混乱状態の賊達を潰すには大した時間はかからなかった。

流石に美羽を乗せたまま戦うわけにはいかないなので俺は後方で指揮を行うに留まったが。

戦というものは実際に行うよりもその前後に行わなければいけない

事の方が遙かに多い。

味方の被害の状況の確認に功績の確認、被害者についてはその者に対する対処をしなければいけないし功績を上げた者には褒賞を考えなければいけない。

更には敵味方構わずその死体の処理を行わなければいけないし、鹵獲品や降伏した者に対する処理もある。

軍を率いる者はそういった細々とした処理を行えなければ務まらないのだ。

何処その太守が戦うしか能のない者を將に据えたと聞いた事もあるがそんなものは正気の沙汰ではない。

そして賊を倒し終えた俺達にもそういった仕事如山積みになっていくわけだが……。

俺は待機している蒼香達への連絡や今後の行動について最低限の指示をした後でその場を翠香と雄に任せて美羽を探している。

戦を終えた後美羽はいつの間にか姿を消していた。

その理由は大体俺には想像がつく。

まだ村の周囲に賊がいる可能性は美羽も理解している筈なので村の近くに美羽はいる筈だ。

「……………いた」

俺が見つけた美羽は村から少し離れた所に生えている木の元で……。

「うう、うう、お、おえええ……」

胃の中のものを吐き出していた。

美羽は今日が初陣で初めて人の命を自らの手で奪ったのだ。

それも何人も自らの剣で貫いて。

これは初めて戦場に出たら殆どの者が経験する事だ。

俺は戦に出たわけではないがかつて賊を手にかけた事があり、その後には盛大に吐いた。

美羽は戦の最中には興奮状態にあったものの興奮が冷めた事で賊を殺した時の事を思い出したのだろう。

つらいかもしれないが……これは美羽がこの先生きていく為にも自ら乗り越えなくてはいけない事だ。

下の者の痛みや辛さを知らない者に人を率いる事など出来る筈がないのだから。

俺は黙って美羽に近づいて用意しておいた手拭いと水の入った竹筒を差し出す。

「……」

美羽は俺に気付いて一瞬身体を震わせたものの黙って差し出された

手拭いと竹筒を受け取るとそれで涙と汗、それに賊を殺した際の返り血と吐瀉物で汚れた顔を拭い、竹筒の水で口を洗い流した。

その後暫くお互い黙っていたが先に口を開いたのは美羽だった。

「よく妾がここにおると分かったの……」

「何年一緒にいるかと思っっているんだ？美羽の事なら大体分かるぞ。それに俺も経験した事だからな」

俺は努めて淡々と告げる。

ここで下手に慰めても決して美羽の為にはならない。

「……そう言えばそうじゃったの」

「何、美羽は大分マシな方さ。俺が初めて人を斬った時は小便を漏らしたぞ」

「何じゃと？それは初耳じゃぞ？」

「誰にも言っていないからな」

「プッ！」

少しおどけたような俺の態度に美羽はようやく笑った。

手に持った竹筒から一口水を飲んだ美羽は汚れた手拭いと竹筒を俺に手渡す。

「妾は初めて人を殺した……。相手を殺した事は後悔しておらぬよ？殺さねば妾が殺されておったからの。じゃが……。頭によぎるのじや。妾が殺したのは確かに賊じゃが奴にも家族がおったかもしれぬ、愛したものがおったやもしれぬ……。と」

「……………」

「無論相手は賊じゃ。今までに奴らは己の為に民の命や財を奪ってきたかもしれぬ。……。じゃが賊とて好きで賊になったものが全てというわけではないじやろう。褒められた手段ではないが生きるのに必死で賊となつた者も多い筈じゃ。それでは奴らを賊と成したのは誰じゃ？政をしつかりと行わなかつた者達ではないかえ？妾は……政を司る袁家の身でありながら……。それを気にせず都でのんびりと暮しておつた。妾は……。自分が情けなくて堪らぬ！それにこの戦で妾の兵も何人が死んだのじや……。戦には勝つたが……。妾はそれを喜ぶ事は出来ぬ！妾は……。戦もそれを防げぬ妾自身も嫌いじゃ！」

最後は叫ぶように言い切つた美羽はそのまま俯くとまた泣き出してしまった。

正直言つて俺は驚いた。

美羽が聡い事は前々から分かっていたが……。美羽は俺の想像以上に成長している。

……。いや、この戦が美羽を成長させたのだろう。

これが並の人物だったら『賊から民を守れてよかつたためたしめでたし』で終わってしまっただろう。

だが美羽はこの経験を大きな糧とした。

美羽の器は……俺の予想以上に大きかったのかもしれない。

だが美羽がどうあろうと俺がする事は決まっている。

「俺は美羽の背負っているものの重さは分からないけどな。お前の隣りに立ってお前が倒れそうになったら支えて踏ん張ってやるくらいは出来るつもりだぞ？責任感が大きいのは結構だが、一人で全部しよいこもうとするんじゃないやねえぞ。美羽はまだ若いんだし出来ないうようなら出来るようになればいいんだ。そうやって俺と勉強してきただろうが。それに悔しいなら美羽が作ればいいんだよ、そんな事が起こらない世をな。俺はそれにどこまでもついていってやるつもりだぞ。あとそこで見てるあいつらも同じはずだぜ？」

我ながら臭いセリフだとは思うものの心底から感じた事なので遠慮なく言い切った俺は後ろを指差す。

俺は途中から気配を感じていたが、そこにはいつの間にか雄に蒼香、翠香に李豊殿と梁綱殿、それに数名の兵士と何故か美羽の身代わりをしていた女官が立っていた。

「姫さん、俺も泉と同じだ。姫さんにならついていくぜ？」

「僕も同じだよ」

「翠香も同じですよ」

「僕もですぞ」

「拙者も」

「俺達だつて！」

「わ、私もです！」

「な、何じゃ！皆して妾の事を見ておつたのか！？」

俺との会話を見られていた事に気付いた美羽は一気に顔を赤くする。

その美羽の様子に見守っていた全員が笑った。

さて、いい雰囲気にもなった事だしいい加減そろそろこの場を切り上げないとな。

村の被害の事もあるし……戦っていた奴らの事もある。

「さ、こうして皆の意見も固まったことだし……そろそろ村に行こうぜ？やる事も一杯あるし、死んだ奴を弔ってやらないとな。辛気臭いのも死んだ奴に失礼だ。幸い少し余裕はあるし……村も巻き込んでささやかな宴うたげでも開こう」

「お、いいねえ！」

俺の提案に雄が食いつき次々と賛成の声が上がった。

「うむ……確かに泉の言う通りじゃな！」

その様子に美羽もようやくいつもの笑顔を見せる。

うん、やっぱり美羽は笑っている顔が一番いい。

こうして俺達袁術軍の初陣は終わった。

美羽が初陣を終えたこの日は俺達にとって忘れられない日となった。

後から思えばこの日から俺達、袁術軍は生まれたのかもしれぬ。

それはそうと美羽と話している時に雄達以外の視線を感じた気がする。

殺気が感じられなかったから放っておいたのだが……あれは一体何だったのだろうか？

第7話 初陣3（後書き）

さて……少々くさいとは思いましたが思い切って載せました。

批判等ありましたら感想の方へどうぞ。

そして最近なんだか主人公がオカン化してきた気がしてきた。

第8話 邂逅（前書き）

何故か筆が恐ろしく絶好調。

こうなれば行けるところまで突っ走ってみます。

第8話 邂逅

SIDE 張？

絶体絶命の危機にあつた私を助けてくれた騎馬の集団は目の前にいた賊達を瞬く間に潰走させると私が声を掛ける間もなく去ってしまった。

指揮官らしき男が『もう片方の援軍に行く』と言っていたから恐らく真里や華漣が戦っている筈の村の入り口の方へ向かったのだろう。

……そうだ！真里に華漣！

命が助かった事で安心してしまった私は共にむらを守る為に戦っていた友達の事を思い出す。

もはやこの心配はもうないだろう。

「……っ！」

長い間戦い続けた私の身体には無数の切り傷があり、疲労も重なつて今にも倒れそうな程だったがそれでも私は槍を杖にして痛む身体を押しながら村の中をもう一つの門に向かう。

普通に歩くよりも時間をかけながら私がもう一つの門の近くまでたどり着いた時には既に決着は着いていた。

門の周りには賊の死体が倒れているだけで動いているのは柿色の鎧を身につけた兵士達だけだ。

「……真里！華漣！」

その兵士達に混じって覚えのある姿を見つけた私は出せる限りの声を上げた。

向こうも私の姿に気付いたようで二人は私に走り寄ってきた。

駆け寄ってきたのは短くした薄茶色の髪が印象的な真里と赤色のクセツ毛とそばかすが印象的な華漣。

共に私の心配していた戦友だ。

「李雪はん！無事だったんやね！？」

「李雪姉無事なの！？」

二人とも所々に怪我は負っているが私と同様に大きな怪我はないようだ。

その事実には私は一気に安心する。

「ああ、何とかね。二人も大丈夫そうだな」

「うん、正直言うと少し危なかったんやけど妙な男の人がうちらを助けてくれたんや」

「その後すぐに兵隊さんが来てくれて賊をやっつけてくれたの」

「どうやら二人もあの騎馬の集団に助けられたらしい。」

「そうか……。本当に援軍が来てくれて助かったな」

援軍に一縷の望みを賭けて戦っていた私達が今こうして話しているのは奇跡に近い。

……ん？

まて、何かがおかしいぞ？

「李雪はんも気付いたんやね？」

今回の援軍について何か引っかかるものを感じた私と同様に真里も何か異変を感じていたようだ。

「ああ、確かこの村から一番近い町まではどう急いでも半日は掛かる。私達が賊に気付いて使者を出したのは今日の朝方だ。援軍が来るにはどうも早すぎる」

そう、私を感じた違和感は援軍が来た状況だった。

太陽が既に傾いていることから確かに今は援軍を求める使者を出してから半日以上経ってはいる。

だが援軍を求められたからと言ってすぐ援軍が出せる訳は無し、しかも援軍がこの村まで来る時間の事を考えると余りにも援軍が来るのが早すぎるのだ。

予想以上に早く村の門を破られてしまった私達としては助かったわけだが。

「そうなんや。それに今華漣ちゃんにも聞いたんやけど……この近くの町に『楽』と『袁』の旗を掲げる武將はどこにもおらへんそや」

「何だつて!？」

近くの町に入る筈のない武装した集団……それならば私達を助けてくれたあの部隊はこの軍勢なんだ？

浮かんだ疑問に頭を悩ませる私と真里。

そんな時に答えを出したのはそれまで口を挟まなかった華漣だった。

「あの、さつき真里姉に話そうとしたんだけど……最近南陽の町に新しい太守様が来ることになったって聞いたことがあるの」

「南陽の町に新しい太守？」

思わぬところから出た答えに私と真里は顔を上げ、同時に華漣の顔を見つめた。

私達に同時に視線を受けた華漣が一瞬ビクツとするが今は何よりその情報が欲しい。

「華漣ちゃん、何かその新しい太守さんについて他に話し聞いておったりせん？」

「え、え、うん……」

真里の質問に華漣は少し考え込んだもののやがてポンツと手を叩いた。

「……そうだ！確か新しい太守様は都の偉い一族の人で確か……袁公路様だつて聞いた事があるよ！」

その華漣の話聞いた私は一瞬言葉の意味が理解出来ず……理解した瞬間こみ上げてきた笑いを抑える事が出来なかった。

「は、ははははっ！これは一体どういう巡り合わせだ！？」

そう、これは一体何の巡り合わせだろうか？

我が故郷に来た袁家の当主・袁本初殿に軽くあしらわれて失望した私と同じ袁家の者に助けられるとは。

「ホンマや。こんなけつたいな話もようあつたもんやで」

私と同じく因縁を感じたらしい真里も何やら複雑そうな顔をしている。

星よ、私は旅に出て良かったぞ。

本当に世の中は妙な事に満ち溢れているのだからな。

「ねえ、真里姉も李雪姉もどうしたの？」

一人事情が飲み込めない華漣が私達を見て不思議そうな顔をしている。

そういえば華漣には袁本初殿との事を話していなかったな。

私が改めて袁家と私達との因縁の話をするとう華漣も納得した顔をした。

「へえ……こんな偶然もあるんだねえ」

偶然……そう、本当に偶然だ。

袁家の当主に軽く扱われて袁家に失望した私達が旅の途中立ち寄った村を賊から守って絶体絶命になっている時にこの近くに来た袁家の者に助けられる。

ここまで奇妙な縁があるのだ、袁家に一度は失望した私だがその袁公路殿とやらに会ってみるのも良いかもしれない。

どのみち助けられた事については礼を言わねばならんのだ。

「なあ、真里。その袁公路殿とやらに会いに行ってみないか？どのみち助けられた事についての礼もせねばならんし」

「うん、そうやね。ウチも少し興味が湧いたわ。是非会いに行ってみよか？」

「あ、あたしも行く。村を助けて頂いたんだからお礼を言わないと！」

私の提案に真里も同意し、更に華漣も同行することになった。

私達は袁公路殿に面会を申し込もうとしたのだが肝心の袁公路殿はいなかった。

更に騎馬兵の指揮を執っていた奇妙な武器を持った男性の将も見当たらない。

賊の死体の片付けをしていた兵士に聞いたところ樂守路殿と言らしいその将は兵達に指示を出した後で何処かへ行ってしまったらしい。

どうするべきか困ってしまった私達だったが、その時私は尿意を感じる。

そう言えば朝から戦続きで用を足していなかったな……。

ここからならどこぞの家で借りるよりも近くの森で用を足してしまった方が早い。

二人にそれを伝えると二人も同じく尿意を感じていたようで揃って森に用を足しに行く事になった。

それは偶然だった。

森で用を終えた私達が村に戻ろうとすると森をすぐ出た所で血塗れになった鎧を着てはいるが、綺麗な金の髪を肩で切り揃えどことなく高貴な雰囲気を感じている小柄な女の子が吐いていた。

私も他の二人も似たような経験があったので事情を悟った私達は静かにその場を去ろうとしたのだが、吐いていた女の子に寄ってきた男を見て動きを止めてしまった。

身長6尺を軽く超えているだろう大柄な体躯に鋭い目つき、銀色とも灰色とも見える髪を短く刈り込んだいかにも精悍そうな印象を受けるあの男は……間違いなく兵の指揮を執っていた楽守路殿だ。

そういえば今まで気が付かなかったがあの少女は楽守路殿と共に賊を倒していた娘に違いない。

探していた楽就殿を目にして中々その場を離れづらくなってしまった私達は図らずもその二人のやり取りの一部始終を見てしまう事になったのだが……。

「まさか……あの娘が袁公路殿とは……」

なまじ袁本初殿を知ってしまっただけに同じ袁家の者が自ら先頭に立って村に救援に駆けつけてくれた事が信じられない。

いや……確かにそれも驚いたがそれ以上に驚いたのは……！

「……あんな太守様に会ったのは初めてや」

「すごく暖かそうだね……」

袁公路殿から感じたのは眩しくなる程明るい輝き。

純粹な優しさと民の上に立つ者としての気高さと責任感……少し甘い部分もあるかもしれないが、周囲の者の進言を素直に聞き入れる素直さを持っている。

その皆の心を優しく癒して守るような輝きは……まさしく王器！

それを感じとった瞬間私の心に定まったものがあつた。

我が終生に渡って槍を捧げるべき主、ついに見つけたり！！

袁公路殿を中心に楽守路殿達がその場を去るのを見届けた私はその場で立ち上がった。

私に続いて真里と華漣も立ち上がる。

「李雪はん」

「李雪姉」

呼びかけてきた二人を見ると二人ともその目に今までになかったような輝きを灯している事に気付く。

「どうやら考えは皆同じようだな」

私の言葉に二人とも静かに頷く。

「さて、それでは行こうか。……我らの主となる方の元へ」

先ずは隠れてやり取りを見てしまった事を詫びなければならない。

だが村へ戻る私の足取りは身体に溜まっている筈の疲れを感じない程に軽かった。

第8話 邂逅（後書き）

投稿始めて1週間も経っていないのに10万PVを今にも突破しそうな勢いで伸びています。

皆様の応援に大感謝です。

そして今回主人公と美羽の容姿の描写が。

美羽は原作より少し身長高い事に加えてスタイルが良くなっています。

主人公の容姿については戦国無双3の加藤清正を想像して下さい。

以下オリジナルの登場人物について2

張？

魏の五大將軍の一人で諸葛亮が恐れた武将。

最初は韓複に仕えたが後に袁紹に仕え、官渡の戦い後曹操に仕えた。ちなみに吉川作品で三回死んでいる。

モデルは錬金術師工房3作目の女騎士。

ただかなり武人風にアレンジしてますが。

徐庶

劉備の最初の軍師で劉備に諸葛亮を紹介した。
軍師だが剣の腕も立ち、そのあたり呂蒙に似ている。
母を人質にされて曹操に下る。

モデルは砲撃魔法少女の親友の狸娘。

関西弁の軍師っていなくね？と思ったのがきっかけ。

紀霊

史実では袁術に仕えた武将で関羽と互角に打ち合った経歴を持つ。
家臣に見放された袁術に最後まで付き従った忠義の人でもある。

モデルは最近飛躍が激しすぎる魔法教師のステルス少女。
理由は地味な子が欲しかったから。

第9話 酒宴（前書き）

少し投稿が遅れました。

理由は最初に書き上がった話がどうにも出来が悪く、作者が納得がいかず一から書き直した為です。

その分質は上がったと思います。

何かランキング上位に入ってからというもののPVが一日3万アクセスを軽く超えています。

何コレ怖い。

皆様の応援に感謝です。

第9話 酒宴

SIDE 樂就

嬉しい事に新しく3人の武将が美羽に仕えることになった。

村に戻った俺達は賊に襲われた村の村長の感激しまくった挨拶を受けた後で山積みになった戦後処理に当たっていた。

雄は念のために偵察部隊を率いて村の周囲の偵察に出て、蒼香と翠香、それに李豊殿や梁綱殿は戦の後始末と今夜村民も交えて行う事にした宴うたげの準備に当たる。

そして俺と美羽が次々と上がってくる報告に対する処理を行っているところを例の村を守る為に戦っていた3人が訪ねてきたのだ。

いかにも武人といった印象を受けるキリツとした目つきが特徴的な長いストレートの黒髪の女性に短くした薄茶色の髪が印象的な少女と赤色のクセツ毛とそばかすが特徴的でどこか地味な少女の三人組はそれぞれ張？、徐庶、紀霊と名乗った。

張？に徐庶に紀霊……皆三国志に出てくる名の知れた武将と軍師だ。あれだけの働きをしたのだからもしかしたら名の知れた武将かもしれないとは思っていたが……ここまで有名な武将が出てくると思わなかった。

3人とも戦いで負傷したのだろう、顔には傷を手当てした跡があったものの会いに来る前に衣服を整えたようで、血に汚れた服ではな

く清潔な服を身に纏っていた。

太守である美羽に面会するにあたって武器を身に付けずに会いに来たことから彼女達が礼節をしつかりと弁えている人物であることが伺える。

張？達は名を名乗った後に助けられた事についての礼を述べ、そして謝ってきた。

どうやら美羽が吐いていた時に感じた妙な視線の正体は彼女達だったらしい。

彼女達はたまたま森で用を足していたそうなのだが、その時に一連のやり取りを覗き見てしまったそうだ。

張？達はそれを誠意を込めて詫びた後に仕官を希望してきた。

あの時のやり取りで美羽に王器を感じ取ったらしい。

覗き見をしていたというのは頂けないが偶然の要素が強そうだしそれは咎める程の事でもない。

結果として考えたらそれがあつたからこそ張？達はこうして自ら美羽に仕官をしてきたのだからこちらとしては悪いどころかむしろ良い結果と言える。

美羽もあのやり取りを見られていた事については恥ずかしがったもののそれを怒るなんて小さな器はしていない。

しっかりとそれを仕える前に告白して素直に詫びてきた事は好感を

持てたし、礼節を弁えて面会に來ただけに張？達に対する印象は良い。

俺達は張？達を喜んで迎え入れることにした。

それというのも現在俺達の陣営には兵の指揮を執れる者や腕の立つ者が少ない……いや、少なすぎる。

これから先の事を考えれば有能な奴はどれ程いても困る事は無い。

腕の立つ者がいるならこちらから出向いても積極的に迎えるべきだ
戦の処理が一段落ついたらこちらから会いに行くつもりだったので
手間が省けたと言える。

仕官するにあたって俺と美羽は彼女達から真名を預けられた。

張？が李雪、徐庶が真里、紀霊が華漣という真名だそうだ。

俺と美羽も交換で真名を預け、その時に村人を交えて行う予定の宴
に誘った。

李雪達は恐縮していたが、李雪達こそこの村を守った功労者である。

それに加えて今後李雪達が俺達の陣営の中枢を担う事になる事は間違いないだろう。

それなら早めに蒼香達と馴染んでもらった方がいいし、宴うたげというの
は交流を深めるにはうってつけの場なのだ。

そう、俺はこの時新しい仲間が増えた事にらしくもなく浮かれていた。

その宴である災難が起きる事となる事を知らずに……。

宴^{うたげ}は俺達の戦後処理や準備に時間が掛かる事もあって夜に開かれた。

幸い食糧には余裕がかなりあるので領民の慰撫という意味も込めて俺らが食糧を提供するつもりだったのだが村民達がそれだと気が済まないと主張したことで結局俺達と村で折半して出し合う事となる。

村に酒は無かったのだが、俺達がそこまで多くは用意出来ないとはいえ酒を振る舞う事にしたために宴^{うたげ}の会場は村民と兵士達の笑い声で中々の活況に満ちていた。

その村中が活気と笑い声に包まれている中で俺は村の端で一人干し肉を嚙りながら酒を嘗める。

雄は村の女の子をナンパしており、華漣と真里と李雪は華漣の両親らしき人達を交えて酒を呑んでいた。

蒼香と翠香は酒にあまり強くないらしく既に寝てしまっている。

美羽はと言えば村人達と混じって談笑しているようだ。

最初は美羽を高い身分にある太守という事で遠巻きにしていた村人だったが酒が入るにつれてその警戒が緩み、美羽の明るさと天性の人を惹き付ける魅力によって美羽と打ち解けていた。

美羽の側に張勳が纏わりついている事が少し気になるが……まあいいだろう。

「守路殿」

後ろから呼びかけられて振り向くと俺の後ろに李豊殿が立っていた。

李豊殿は初老の身体中に幾つもの古傷があるいかにも質実剛健な軍人といった印象の男だ。

李豊殿の真名は堅優というのだが彼は真名で呼ばれるよりも名で呼ばれる事を好む。

それは固葉という真名を持つ梁綱殿も同じで俺は彼らと真名は交換しているものの彼らを名で呼び、李豊殿達は俺を字で呼んでいる。

「李豊殿ですか。見張り役、ご苦労様でした」

俺は傍らに置いてあった空の杯を取るとそれに酒を注いで李豊殿に手渡す。

俺は李豊殿に隊を率いて村の周囲の警戒をして貰っていた。

いくら宴と言ってもその最中に賊に襲われてはひとたまりもない。

俺与李豊殿、梁綱殿の部隊で交代制で見回りを担当する事を決め、今は李豊隊と交代して梁綱隊が見回りをしている筈だ。

俺があまり酒を呑まないようにしているのはそのためだったりする。全員が気を抜くわけにはいかないのだ。

「儂に敬語は入りませぬとあれ程申し上げているでしょうに……」

「いえ、李豊殿の方が年上ですし俺はお世話になっている身ですから」

李豊殿は酒杯を受け取りつつ苦笑するが俺は本当に李豊殿達には世話になっっている。

俺は鍛錬と努力の結果知識と武力はあるものの軍隊における経験というものが圧倒的に不足している。

軍隊生活が長く、戦場の古強者である李豊殿達に学ぶものは本当に多い。

今日の戦いでも俺が曲がりなりにも部隊の指揮を執れたのは李豊殿達に経験を聞いていた事が大きい。

李豊殿達も何かと話を聞きに行く俺に対して親切に教えてくれている。

役職上俺の方が立場は上であるが李豊殿達にはいくら敬意を払っても足りるものではない。

「全く……守路殿も意固地ですのう」

李豊殿は杯を傾けて酒をいかにも美味そうに呑む。

俺は今呑んでいる酒について薄いしそこまで美味しいとは感じないが、この食糧難の時代普通の平民にとって酒は本当にご馳走なのだろう。

美羽の領地が安定してきたら酒造りに手を出してみるのもいいかもしれないな。

俺と李豊殿はしばらくの間お互いに杯を交わしながら特に軍事について話し合っていたのだが少しして俺達のところに仕官したばかりである李雪と真里がやってきた。

「泉殿、李豊殿、ここをよろしいでしょうか」

新しく加わった3人と俺達の軍の主だった面々との顔合わせは既に済んでいるので李豊殿と李雪達も一応面識がある。

俺自身もこの世界の張子である李雪や徐庶である真里に興味もある事だし別に構わないだろう。

俺と李豊殿がそろって頷くと李雪と真里は俺達の隣に腰を下ろした。

あと少ししたら俺が梁綱殿と交代で見回りに行く番だが少しくらい

なら大丈夫だ。

「お二人揃って一体何を話されていたので？」

「ああ、李豊殿に戦場での話を伺っていた。李豊殿達の話は為になるからな・・・李雪と真里も呑むか？」

俺は李雪の話に応じつつ傍らに置いてあつた酒壺を掲げる。

「あ、おおきに……。しかし泉様も熱心やなあ、李雪はんの話やと昼間はごっつい武と見事な指揮を執られたそうやないですか」

尊敬の籠った瞳で俺を見る真里の姿に思わず俺は苦笑する。

李雪もそれに頷いておりどうやら真里と同じ思いを抱いているらしい。

俺も随分と過大に評価されたものだ。

「何か可笑しいところがありましたでしょうか？」

「いや、随分と俺も買収されたものだと思ってな。実を言うと俺は戦で兵の指揮をしたのは今日が初めて……つまり今日が初陣ってことだ。それに俺は本来武官じゃない」

「は？」

俺の言葉に李雪はポカンとした顔をする。

いかにも麗人といった印象を受ける李雪がこういう顔をするの普段

との落差があるだけに中々面白い。

「単純な武だけで言えば多分俺より李雪の方が強いと思うぞ？そもそも李雪と真里はここでの俺の役職を何だと思っているんだ？」

俺は本来どちらかと言えば文寄りの人間だ。

袁家に迎え入れられてから武も鍛えていて袁紹に仕えている顔良や文醜には大抵勝っていたが、1人で200人の賊を相手にして村を守りきった李雪に勝てるとは到底思えない。

逆に俺から問いかけられた質問に二人はしばし考え込む。

「……美羽様から戦の采配を預かる將軍ではないのでしょうか？」

「うーん、美羽様の軍師やないのかなあ？」

まあそれが一般的に俺を見た時の答えだろうな。

「どちらも外れだ。俺は美羽の教育係兼守役だよ。ただ今のところ俺しかいないから指揮官をやってるようなもんだ。そもそもうちに役職なんてものはまだ無いしな」

「「はあ!？」」

ああ、やっぱり知らなかったか。

そもそも俺達は美羽が太守を任された土地に向かう途中であって兵について元々袁家で雇っていただけの私兵だ。

今ある役割は仮のものに過ぎず、美羽が太守として赴任してからそれぞれ役職を割り当ててやる事になるだろう。

俺がこの集団の状況を説明すると李雪と真里も納得出来たようだった。

「成程……。泉殿は洛陽におられた頃から美羽様にお仕えしていた訳ですか……。しかし泉殿は美羽様の守役にありながら何故兵法といい武といいそう熱心に磨かれるのでしょうか？」

ただ純粋な好奇心をその目に湛えつつ李雪は俺を見つめる。

口には出さないものの真里も興味津々といった顔をしており、話を聞きたいようだ。

俺が自分を磨く理由……。か。

そんな高尚なもんでもないんだがな……。

「……。俺は元浮浪児だ。親に捨てられて洛陽の薄暗い路地裏でゴミを漁って生きていた。正直生きてる希望なんか無かったよ。だがな、偶然出会った美羽は無邪気に俺に手を差し伸べてきてくれたんだ。信じられるか？ 袁家のお姫様がゴミを漁って生きてきた薄汚れたガキにだぞ？ 親にさえ捨てられて名前さえ無かった俺を美羽が救ってくれたんだ。美羽は小さかったし覚えてるかどうかわからないけどな。……。その日から俺は美羽の『けらい』になる事を決めた。俺には頭とこの身体以外何も無い。そんな俺を慕って頼ってくれる美羽を守り、支える為になる事なら……。俺は何だってやってやるさ」

普段なら俺はあまり話すつもりは無く煙に巻いただろうが今日に限

つては酒も入っているせいか気が付いたら本音をぶちまけていた。チビチビとはいえ李豊殿と酒を呑んでいるうちに結構酔いが回ってしまっただらしい。

言ってしまった後でその場の空気が沈んでしまった事に俺は気付いた。

聞いた張？も予想外に俺の話が重たかったためか沈黙してしまっている。

李豊殿も聞いていた筈だが、李豊殿は杯を傾けるばかりで何も言わなかった。

「すまん、暗い話を聞かせてしまったな。酒の席で済まなかった……」

「……いえ泉殿、こちらこそ興味本位でそれほど重い事をお聞きしてしまい誠に申し訳ありませんでした」

「うん、興味本位で突っ込んでいい話やない。すんまへん」

俺が詫びると二人も頭を下げてくる。

「いや、別にいい。俺が勝手に話した事だから……。ただ李豊殿も李雪も真里もこの事を他人に……特に美羽には話さないでくれると助かる。美羽は既に袁家という重荷に加えて太守という重荷まで背負っている……。今はこれ以上あいつに余分な重荷を背負わせたくはないんだ」

美羽を支えて守るといふのは俺のエゴにしか過ぎない。

そんな俺の勝手な思いを美羽に押しつける気はない。

「わかりました。この張儀、我が師と槍に誓っても決して他言は致しませぬ」

「うちも絶対に他の人によう話しまへん」

「はて、先程守路殿は何か話しましたかのう？最近年のせいか耳が遠く感じましてなあ」

若い李雪と真里は真剣な顔で誓い、李豊殿は聞かなかつた事にしてくれたようだ。

「そうしてくれると助かる。さて、そろそろ梁綱殿が戻ってくる頃だな……」

話を切り上げる為にも見張りを交代する為には俺は立ち上がるつもり……！？

「いゝずゝみ〜！！」

後ろから覆い被さってきた何かに押しつぶされた。

この声は……！

「み、美羽！？」

いつの間にか俺の後ろにいた美羽が俺に抱きつくように覆い被さつ

ている。

しかも美羽の顔は紅く、酒の匂いが漂っている。

誰だ美羽に酒を吞ませやがったのは！

「いゝずゝみゝ、わらわにないしょでほかのものとなにをはなしておったのじゃゝ?!?!??」

肝心の内容は聞かれてはいないようだったが、ある意味一番まずい会話を聞かれてしまったようだ。

「いや、美羽、少し落ち着け!?!」

「いずみはわらわのものなのじゃゝ。ほかのものとべたべたするではないゝ?!?!」

俺は何とか宥めようとするものの美羽は酔って完全に目が据わっており全く効果がない。

しかも美羽は酔うことからむ癖があるようで俺に絡みまくってくる。

顔が近い、近い!?!

「李雪、真里!?!」

助けを求めて思わず李雪達の方を見やるも……。

「おやおや、美羽様は泉殿にご執心のようだ。主の願いを我ら臣下が邪魔するわけにはいかないな。真里、私達は退散することとしよ

うか？」

「そつやな李雪はん、うちも馬に蹴られとうないし……」

俺の目の前で二人は見事な阿吽の呼吸で立ち去ってしまった。

それならばと思い振り向いて李豊殿を見やるも……。

「さて、守路殿は手を離せぬようじゃし、酔い覚ましに樂就殿の代わりに見回りにいくとするかのう」

李豊殿は俺など目に入らないといった様子で立ち上がってしまう。

他の人に立ち去られた俺は一人ポツンと取り残される形になってしまった。

「一体俺にどうしろって言うんだ……」

暴れ疲れたのか俺の膝の上で抱かれる形で眠ってしまった美羽を抱えつつ俺は途方に暮れるのだった。

美羽に酒を吞ませた奴さつさと出てこい……！

第9話 酒宴（後書き）

主人公の思いを表してみました。

主人公の忠誠心はメーターを完全に振り切れています。

そしてチヨイ役で出した筈の李豊爺さんがなぜだかおいしい立ち位置に（笑）

第10話 嫉妬（前書き）

砂糖警報絶賛発令中。

タグで予め注意はしていた。
だから後はやるだけだ。

ノリのむくままに暴走して書いてしまった。
後悔はしていない。

今回はそれを頭に置いた上でお読み下さい。

酒に酔っていたとはいえ何てことをしてしまったのじゃ〜!!??

妾は昨日宴が始まってから最初は翠香や蒼香とともに色々な人と話しておったのじゃ。

妾に新しく仕えることとなった李雪や真里、華漣の事も良く知りたかったからの。

李雪達は最初は妾に恐縮しておったが話すうちに打ち解けてきて、これから仲良くなれそうな予感がしたのじゃ。

そうして話しておるうちに酒を呑んでおった翠香と蒼香はいつのまにか酔いつぶれてしもつた。

妾は洛陽におった頃から泉が作ってくれておった水飴という物を使った、冷やし飴という飲み物を飲んでおったのから酔いはしなかったのじゃが……。

そつえば妾は小さい頃は蜂蜜が大好物で蜂蜜を使った蜂蜜水が大好きじゃつたの。

じゃが泉と共に町や村を回るうちに蜂蜜がかなり高いものであると知つたのじゃ。

普通の民には手が届きもしない代物じゃ。

民が食べる物にさえ苦しんでおるといふのに妾の我が儘でそんな高い物を大量に食べる事など出来ぬ。

そう泉に話したら泉は『今よりも安く蜂蜜を大量に作る方法に心当たりはあるけど今は出来そうにない』と嬉しさと申し訳なさが混ざったような顔で言っておつたのは今でもよく覚えておる。

その泉が妾の為に、しばらく後で作ってくれたのが水飴じゃ。

泉は料理が好きで時々妾が食べた事のない珍しいものを作ってくれおる。

水飴は米や芋、麦の芽を使って作るらしく、蜂蜜のように香り高いわけではないのじゃが独特の風味があつて、作る材料によって随分味が異なる水飴に妾は夢中になつたのじゃ。

水飴を水やお湯で溶いて果物の汁やショウガを加えたものが冷やし飴で、妾は今ではこれが蜂蜜水よりも好きなのじゃ。

美味しい事もあるのじゃが何よりも泉が妾の為に作ってくれたといふのが嬉しいのじゃ。

昨日の宴でも酒を呑めぬ村の子ども相手に配つたところ大好評だったの。

その宴で翠香と蒼香が寝てしもうた後も妾は村の民と楽しく話しておつたのじゃが、翠香と蒼香がいなくなつた後で張勳が妾の側におるようになった。

何かと妾の世話を焼こうとする張勳は正直煩わしかったのじゃ。

妾は気兼ねなく他の者と話したいというのに。

どうも張勳からは泉の前に妾に勉強を教えておった者達と似たような感じがしおる。

ただ無碍にして妾が宴の空気を壊すわけにはいかぬので、張勳を無視して妾は村の者と話しておったのじゃがそんな妾の目にある光景が映ったのじゃ。

泉は宴の最中も村の周囲を見張る役につくことになっておったから妾と別行動をとっておったのじゃがその泉が村の隅で李雪や真里と何か話しておった。

今から考えるとおそらく泉は先に妾に仕えておった者として、新しく仕える事となった李雪達と話しておったと分かるのじゃが……その時の妾は泉が何を李雪達と話しておるのか気になって仕方が無かったのじゃ。

思わず何やら胸がムカムカしてしもうた妾は、手に持っておった冷やし飴を一気に飲み干してしもうた。

それでも胸のむかつきは治まらず、妾は新しい飲み物を飲もうと思つたのじゃが……そこに張勳が飲み物の入った杯を差し出してきたのじゃ。

張勳は妾の世話をしたつもりだったのじやろうが……張勳は妾の呑んでおつたものが冷やし飴とは知らずに酒を手渡してきおつた。

そして怒っておつた妾はそれを酒とは知らずに一気に飲んでしまっ

たのじゃ。

慣れぬ酒にすぐに酔ってしもつた妾は感情の赴くままに泉の方へ向かったのじゃが……。

近づいた泉は何やら真里と李雪と約束しておつた。

泉が他の者と何やら知らない約束をしている。

それが分かった瞬間妾は一気に身体が熱くなってしもつた。

そして感情の赴くままに何やら泉に叫んでそのまま覆い被さって……
…最後は泉の膝の上で……！

うう、は、恥ずかしくて堪らぬのじゃ~~~~~!!!!

昨日の事を鮮明に思い出してしもつた妾は思わず寝台の上で悶える。

そうしたら妾が暴れた事で寝ておつた泉が目を覚ましてしもつた。

「……ん？美羽、起きたのか？」

泉が起きた事に気付いた妾は慌てて居住まいを正す。

「う、うむ、おはようなのじゃ、泉」

「ああ、おはよう、美羽。今日は朝飯を住ませて村に挨拶をしたらすぐ出発だぞ。村長に挨拶するのに代え玉を立てるわけにはいかな
いから今日は我慢しろよ？じゃあ、俺は色々と準備するから……」

あわてて答える妾を余所に泉は立ち上がると、それだけいいおいてさっさと妾の天幕から出て行ってしまった。

妾はほっと安心するとともに、暴れたためにこれだけ妾の服が乱れておるといふのに殆ど泉がそれを気にせぬ事を不満に思う。

妾の母上は妾が生まれてすぐに亡くなってしまったと妾は父上に聞いた。

父上は妾に優しくかったのじゃがお仕事が忙しく家に殆どおらぬ。

妾は洛陽の屋敷で家人達に囲まれて育ったのじゃが、誰もが妾の顔色を伺うばかりで何やら気持ちが悪かったのじゃ。

誰も妾自身を見ようとはせぬ。

そんな折りに洛陽に散歩に出た時妾が迷子になり出会ったのが泉じやった。

ぶつきらばつに話す泉の言葉は何やら妾には気持ちよく感じられたのじゃ。

父上以外で初めて妾自身に向かって話してくれる泉を妾は屋敷に連れ帰った……いや、正確には泉が妾を屋敷に送り届けたのじゃが。

妾は父上に泉と一緒にいたい事をお願いして父上も泉の事を気に入り、少し会えなくなってもうた時もあったがそれ以来泉は常に妾の側におった。

父上が亡くなる少し前から泉は妾の先生にもなった。

妾は常に妾自身の事を見て案じてくれる泉が大好きじゃ。

もし泉がおらなかつたら今の妾はおらんじゃろう。

泉は妾に厳しく、そして優しい。

じゃが泉は妾を大切に思ってくれておるが、どうもそれは泉の主としてのように感じるのじゃ。

妾は泉に主・袁公路としてだけではなく、一人の女としての袁公路としても見て欲しいと思う。

妾の身体は確かに李雪達や麗羽姉様と較べたら未熟じゃが……これでも胸は膨らんできておる。

何年後かにはわらわも立派な女の身体おんなになっておる筈なのじゃ！

なのに一向に泉は妾を一人の女として見てくれん。

妾は泉について……ただそれだけが不満なのじゃ

……いつか泉が妾を一人の女として愛してくれる日は来るのじゃろうか？

第10話 嫉妬（後書き）

というわけで糖分100%の話でした。

ニヤニヤしながら読んで頂けたら幸いです。

ずっと書きたくても中々書けなかった初の美羽視点の話です。

そして発明第一号は水飴。

原作で風が飴を食べていたからどうしようか迷ったのですが登場させました。

服がアレだったり眼鏡が普通にあったりという恋姫の中で普通に突っ込みたかったのが風のキャンディです。

蜂蜜がかなり高価なのにそもそも砂糖さえあまりない状態のキャンディってどれだけ高価？

あと水飴って調べてみると意外と簡単に作れるんですよ。

そしてコストは酒と同じかむしろそれより安いくらいです。

甘味が少ない時代では蜂蜜の養蜂以上にチートです。

後冷やし飴は関西の方では今でも普通に飲まれているみたいですね。

作者は関東在住なので正確には分かりませんが。

第11話 暗雲(前書き)

今回は新章の導入部で少し短めです。

第11話 暗雲

SIDE 樂就

「……というわけだ」

「一応予想はしていたが……ここまで悪い方に的中すると頭が痛くなるな」

雄の調査報告を南陽の政庁の一角にある部屋で受けた俺は思わず目を押しさえた。

賊に襲われた村を出立した俺達はその後は特に問題も無く旅を終え、美羽の任地である荊州の南陽に到着した。

しかし南陽に到着した俺達を待ち受けていたのは難題ばかりだった。

まず南陽の先任の太守は売官によって地位を得た人物で南陽の町で民に重税を課し、取り巻きの連中と好き放題やっていたために南陽の町は酷く寂れていた。

人々には活気がなく、町のおちらこちらにはボロボロになった服を着た人間がたむろっている。

この町を立て直すだけでもかなりの大仕事だ。

治安もクソもあったもんじゃなく、まるであの洛陽の路地裏を彷彿させるような光景で気分が悪い。

町の治安に関しては連れて来ていた信頼出来る兵300人を李雪と華漣に預けて町の警備に回し、元からいた町の兵士に加えて町に屯っていた破落戸コロッキを金で雇って梁綱殿と李豊殿が兵として調練することで何とか対処している。

だがそれ以上に問題となったのは政務の方だ。

俺達には町を統治するためのノウハウが欠けている。

俺は前世では役所に勤め、この世界でも政治について学んでいる為にある程度の知識はあるものの、実際の統治のシステムとは大分差がある。

洛陽で朝廷に勤めていた経験がある翠香と蒼香にしても新米の下級官吏であり、町の統治システムに精通しているわけでない。

また南陽に残っていた地方官吏達は上から言われた事を素直にやるだけの人間しかない。

そうでないとな前の太守の下では生き残れなかったのだろう。

前任の太守が悪政を行っていた為に気骨ある役人は殆どが自ら下野しており、残っていた役人も前太守に罷免されていた。

今は俺、蒼香、翠香、真里が毎日知恵を出し合って竹簡と格闘しながらなんとか毎日政務を回している状況だ。

もしも蒼香や翠香、それに李雪、真里、華漣が仕官してくれていなかったらと思うと背筋が冷える。

正直町の統治にある程度精通している人間が欲しいところだ。

これだけでも頭が痛い所だが、更に悪い事に美羽が太守として荊州に赴任する事が決まった時に、俺が危惧した予測が当たってしまった。

俺達が洛陽に到着した時、南陽の町には自称袁家の親族やら自称袁家に縁ある豪族やらが待ち構えていたのだ。

奴らは美羽に群がって甘い汁を吸おうと今も続々と南陽に集まってきている。

なまじ兵力を持つ豪族達であるだけに下手に対処する事は出来ず、御蔭で美羽は南陽についてからというもの奴らの対応に追われていて政務もままならない。

そこに来て受けたのが雄の報告だ。

雄には南陽に着いてから特に孫家と荊州の状況について調べて貰っていた。

洛陽でも調べたがそこまで詳しい事は分からなかったのだ。

「孫家は頼りにならず、しかも荊州こしゅうでは評判が悪い……か」

「ああ、先代の孫堅が海賊退治で功績を挙げていたから揚州の民の間では人気はあるが、この荊州での評判は悪いな」

先代孫堅が死んだ後の孫家の弱体化は俺の予想以上に激しかったよ
うだ。

孫堅の3人の娘の内末っ子の孫尚香は幼いものの孫策と孫権は既に初陣を済ませており、周瑜、黄蓋、韓当に程普と将の数こそは揃っているが、率いる兵は三千程にまで落ちているらしい。

それも問題だが、それ以上に問題なのは孫家の風評だ。

雄の調べによると孫家の先代である孫堅は地方の役人だったのだが、海賊を中心とした賊退治で功績を挙げていたようだ。

賊退治をしていた孫堅は次第に軍事力を強めていたのだが、軍事には大量の金が掛かる。

その費用を補う為に孫堅は揚州の呉郡を中心に軍閥として勢力を広げていた。

このあたりは俺の知っている歴史と同じだが問題はその後だ。

ある程度揚州で地盤を広げた孫堅は次に荊州に目をつけたのだ。

この荊州の州牧である劉表は善政を敷いている事で有名で民に慕われ、その領地は豊かだ。

その荊州の土地を狙った孫堅であったが、攻められた以上劉表も当然抵抗する。

劉表は配下である黄祖に応戦を命じた。

そして孫堅は黄祖の罠に掛って討ち取られ、孫家は荊州から撤退したのだが、この結果善政を敷いていた劉表を攻めた事で荊州におけ

る孫家の評判はガタ落ちした。

これで終わればいいのだが、どうも雄の調査によると孫家では当主となった孫策を筆頭として皆孫堅を討ち取った劉表と黄祖を恨んでいるらしい。

親を討ち取られた事に怒る事自体は理解出来るが、傍から見てもこの場合非は孫家の方にある。

そして困った事に孫家は孫堅のかたきを討つことを周囲に表明してしまっている。

皇族であり正式な州牧でしかも善政を敷いている劉表を討つと態々宣言するとは一体何を考えているのだろうか？

既に揚州の民にはこの話は広がっており、荊州の民にも伝わり始めているようだ。

正直これは拙い。

荊州に来るまで俺は孫家を支援することで孫家と良好な関係を築いて同盟を結び、孫家の力を借りて美羽に群がるであろう親族達を排除し、その間にしっかりとした地盤を確保するつもりだった。

だが現実の問題として孫家にはそれ程の力が残っていないし、この状況で孫家と結べばこの荊州において美羽の評判は一気に下落して勢力を築くどころでは無くなってしまふ。

いや……これはむしろ……

暫くして俺の頭にはある考えが浮かんでいた。

「雄、皆に会議室に集まるように伝えてくれ。少し話し合いたい事がある」

「了解、伝えるのはいつもの奴らでいいんだな？」

「ああ、頼む」

俺は雄が部屋から出ていくのを見送ると席を立ち、戸棚の巻物を漁り始めた。

俺達にとって今後を切り開く切り札となりうるものを探す為に。

第11話 暗雲（後書き）

史実だったら孫堅が劉表と戦ったのは反董卓連合以降で群雄割拠の時代ですがこのタイミングだと正式な州牧の劉表と戦ってしまうことになります。

あと今回のテーマは『仕事した事のない奴がいきなり太守任されても出来るわけないだろ』という話です。

第12話 才能（前書き）

え〜と…すみません！

第12話の出来がどうしても納得がいかないのでもう一度書き直して改めて投稿し直しました！

作者から見たら前の文に比べて納得のいく出来になった筈です。

第12話 才能

S I D E 沮授

雄さんに『会議室に集まって欲しい』って言われた時には驚いたよ。僕も含めて皆慣れない政務に一杯一杯で『何でこんなに忙しい時に！？』って思ったからね。

でも会議室で泉の話聞いた時にそんな考えは全部吹き飛んでしまったんだ。

彼が示したのは今僕達が置かれている状況を打破する為の策。

劉景升殿を頼って政務に通じた人を何人か貸してもらおう。

だけどそれで南陽の町を立て直そうとしても今美羽様に群がっている親族や豪族達は邪魔をする事は目に見えている。

彼らにとって美羽様は傀儡かいらいである方が都合がいいからね。

だから美羽様には寿春に移ってもらって彼らの注目を引きつけてもらい、その間に南陽を立て直して力を溜めて地盤を固める。

そして地盤が固まったら寿春に集まる豪族や親族達を一気に制圧する。

確かに言われてみたらこれしかないって思えるような策だ。

泉は最初は江南の孫家の力を借りるつもりだったらしい。

でも雄の調査報告を聞いてそれを断念してこの策に至ったみたいだ。

確かに皇族の一員で荊州の州牧、しかも善政を行っていると名高い劉景升殿に刃向かう事を宣言している孫家と結ぶなんて狂気の沙汰だよ。

そんな事をしたら僕達は一気に荊州での支持を失って地盤どころの話ではなくなってしまうからね。

泉は『孫家については取りあえず寿春で一度保護し、ある程度まで力を回復させる。そして肅清後に劉景升殿に復讐する事を諦めるか否か孫家に選択させる。諦めるのならばこちらは孫家と同盟を結びの復興を支援するが、諦めないというのならばその時は孫家には潰れて貰う』って言っていた。

確かに揚州は問題だらけの土地。

元々人口が少ない割には広くて、しかも豪族が各地に割拠していて支配しようと思ったら長い年月と手間がかかるのは目に見えている。

そんな土地に手を出すよりはそちらは孫家に任せ、こっちは荊州で勢力を築いてしまった方がいい。

泉の言う事は理に叶っている。

泉の計画を聞いた時驚いて感嘆すると共に悔しかった。

僕達が南陽で置かれている状況の中でこれを打破する方法について考えなかつたわけじゃない。

実際に美羽様に豪族達の注意を惹きつけてもらってその間に僕達が力を蓄える事は考えていたよ。

劉景升殿を頼る事も考えたけど僕には縁もゆかりもない劉景升殿から助力を引き出す方法を思いつく事が出来なかつた。

でも泉はそれを用意して提示してきた。

泉が交渉材料として提示してきたものは3つ。

一つは誰でも思いつくもので、二つ目はそれを発見した泉にしか提示出来ないもの。

だけど三つ目は違う。

あれは普通の人には考え付かないような発想だよ。

僕はそれを目にした時思わず目を見開いてしまった程驚いた。

あまりにも斬新すぎる発想、あれは夢と言ってもいいものだ。

恐らく劉景升殿はあの提案に飛びつく筈だ。

『八顧』に名前を連ねる程の儒学者で荊州のあちらこちらに学校を作って学問を奨励している劉景升殿があれに飛びつかない筈が無い。

多分泉には僕達には見えない世界が見えている。

僕は自分がその世界を見る事が出来ない事が凄く悔しい。

僕は軍師としての自分の力にそれなりの自負は持っているつもりだ。

僕と翠香に並ぶ程の才を持つ人に出会った事は極わずかしかないなかった。

でも泉の才は確実に僕や翠香の上を行っている。

本当に悔しくて泉の策を美羽様に仕える軍師全員……泉、僕、翠香、真里で詰めている時に思わずボヤいてしまったんだ。

『泉の才が羨ましい』って。

思わず『しまった！』って思ったけど泉は苦笑するばかりだった。

『俺からしてみたらお前らの才能の方が羨ましいぞ』

最初は何を言っているんだろうと思ったけど……彼が息抜きにやろうと言いだした机上演習《将棋のようなもの》でその意味が理解出来た。

軍師……軍を司る者という本来の意味での言葉からすれば彼の才は平凡だった。

良く言えば基本に忠実、悪く言えば定石通りにしか行動しない。

時折奇抜な戦略や戦術を見せはするもののそれも僕の知らないような定石に従ったものだと分かる。

だから先の行動が読みやすいし、突発的な事に弱い。

非常に慎重だから崩しにくいけど、奇手を使えば何とか崩す事が出来る。

僕達3人が泉と戦ったところ3人とも圧勝とは言えないが泉に勝つ事が出来た。

『これで分かったら？俺は軍事的な才能はあまりないんだよ。あくまで学問で身につけただけであって才によるものなんかじゃない。才能からみたら蒼香達の方が圧倒的に上だ』

啞然としてしまった僕達の他所に泉は休憩時間は終わりとはばかりに道具を片づける。

『正直俺はお前らが美羽に仕官してくれて嬉しいんだよ。俺だけだと軍事面で不安だったからな、だから今こうやって俺の計画を埋めて貰ってるだろ？俺だけじゃここまで詰めるなんて無理だった』

そして片付けを終えた彼は僕らに頭を下げてきた。

『頼む、これからも美羽を支えてやってくれ。俺はしばらく無理だからな』

泉が頭を下げる事に驚くとともに、どういつ事なのか疑問に思ったけどそれはすぐ氷解した。

泉は美羽に付いていかずに南陽に残るつもりらしい。

確かに彼はこの陣営で美羽様の次に地位に就いている事は間違いないし、内政手腕も僕達の中では一番高いから正しい事ではあると思う。

でも美羽様と泉の誰も入り込めないような関係の深さを考えると泉の言葉は俄かには信じ難かった。

『美羽は俺に頼り過ぎているんだ。今はいいがもしも俺がいなくなったら美羽は崩れちまうかもしれない。美羽には俺以外の奴に頼る事も覚えて欲しいんだよ』

笑いながら言った彼の言葉を聞いた時、僕は泉の才に嫉妬していた自分が情けなくなった。

泉にとって自分の地位なんてものは二の次なんだ。

泉は純粹に美羽様の事だけを考えて行動している。

彼は大人だ。

自分の才を誇る事などせずに、逆に僕達に気を使ってくれている。

僕は子どもだったんだ。

結局僕の泉への感情は無い物ねだりに過ぎなかった。

僕が美羽様の軍師なら僕は僕の得意とするところで美羽様を支えればいいんだから。

こんな基本的で大事な事を忘れるなんて僕はどうかしていた。

本当に泉にはいくら感謝しても足りないな。

「蒼香、どうしたですか!？」

思考に耽っていた僕は翠香の声に顔を上げる。

僕の前では翠香と真里が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

「いや、何でもないよ。さあ、仕事を続けよう」

「そっか、じゃあもう一度詳細を詰めるで」

真里の言葉に従って僕は泉の計画の補完作業に戻った。

「ねえ、どうせなら奴らを油断させるために美羽様には莫迦のフリをしてもらったらどうかかな？」

「名案ですう。それにどうせならあの張勳の奴も利用してやるですう。あいつなら美羽様の相方に最適じゃねーですか？」

僕達は意見を出し合って策を練り上げていく。

泉は今劉景升殿と交渉する為に美羽様と一緒に襄陽に出向いている。

帰ってきて驚くなよ、泉。

美羽様の為にこの策を完璧な策に見せてやるから。

第12話 才能（後書き）

どうしても前に投稿した12話を読み直した時に読みにくさを感じてしまいました。

なにやら作者のテンションが低かった為に11話からシリアスというよりも話が暗いように感じてしまう文になってしまっており、思い切って改訂いたしました。

初の蒼香視点の話です。

作者は沮授の才って諸葛亮に匹敵したと思ってます。

第13話 劉表（前書き）

何とか調子が戻ってきました。

今回は結構ボリュームがあります。

本日のテーマは甘甘後にジジイです。

第13話 劉表

SIDE 袁術

「うっ、緊張するのじゃ〜……」

「美羽、緊張するのは分かるがそこまで気負うなよ……」

妾と泉は名目上の妾の上司で、荊州州牧である劉景升殿がおる襄陽の城におる。

泉が提案した策を実行する事になった妾達は皆でその準備に取り掛かったのじゃ。

妾の仕事は太守就任の挨拶という名目でこうして劉景升殿を訪ねて妾達に力を貸してくれるように交渉する事なのじゃ。

泉から教えて貰ったのじゃが、劉景升殿は温厚な州牧として有名じやが州牧として就任した頃に近辺の豪族達を集めて大肅清を行ったらしいのう。

そのおかげで豪族達は劉景升殿の事を酷く恐れておって、妾が襄陽に来る時何時もは群がってくる豪族達が誰一人ついてこなかったのじゃ。

あ奴らから解放された事は嬉しいのじゃが……妾はそんな豪族共を恐れさせる劉景升殿を相手にこれから戦わねばならぬ。

妾を信じて仕えてくれた蒼香達や、今も辛い暮らしをさせてしまつておる民の為にも妾は頑張らねばならぬのじゃが……やはり怖いものは怖いのじゃ。

今こうして劉景升殿に取次いで貰えるまで待つておる間のも身体が固まつてしまつておる。

こんな状態で妾は劉景升殿と渡り合えるのじゃろつか？

「ハア……まあ仕方ないか」

泉に声を掛けて貰つても妾の身体の震えは一向に止まらぬ事を妾な情けなく思つておると横から泉の溜め息が聞こえおつた。

妾は泉に情けないと思われてしまったのかの！？

これでもし泉が妾に愛想を尽かしてしまつたとしたら……！

うわ〜ん、嫌なのじゃ〜！！

泉、妾を捨てないでたもれ〜！！

「!?!」

思考がどんどん嫌な方向に進み、思わず泣きそうになつてしまつた妾の頭に何かが触れる感触があつたのじゃ。

懐かしいこの感触。

横を向かんでも分かる。

頭に感じるこの温かい感触は泉の手じゃ。

妾が小さい頃、妾が泣いてしもうた時泉はよくこうして妾を慰めてくれておった。

確か妾が子ども扱いされるのを嫌がってから泉はしなくなったのじゃが……。

じゃが今はこの泉の掌の感触が心地良い。

妾の固まった身体が柔らかくなつていくのを感じるのじゃ。

そうじゃ、妾は何を考えておったのじゃ。

泉が妾を捨てる筈がない。

泉はずっとこうして妾の側にいて妾を支えてくれておるのじゃから。

……そうじゃ、妾は妾がここにおる理由。

ずっと泉と一緒にいたい。

妾の『けらい』である泉にふさわしい主になりたい。

それが昔からの妾の変わらぬ思いじゃ。

妾の為に泉が考えてくれおった策。

その成否は妾の交渉にかかっておる。

ならば妾は泉の主として必ずこの交渉を成功させるのじゃ！

そう思うと妾の身体に何か力が湧いてきおった。

いつの間にか身体の震えも止まっておる。

これなら……妾は頑張れるのじゃ！

そう思った瞬間扉が開いて案内の侍従が入ってきおった。

「南陽太守・袁公路様、我が主・劉景升様がお会いになられます。どうぞお入り下さい」

「了解したのじゃ」

さあ、行くとするか……！！

S I D E 袁術 E N D

S I D E 劉表

「荊州州牧・劉景升様にはお初にお目には掛かります。妾は此度南陽の太守の職を預かる事となった、姓を袁、名を術、字を公路と申します。今日は州牧たる劉州牧様に太守就任の挨拶に参りました」

ほう、見事な口上じゃな。

玉座に座る儂の前ではまだ幼い金色の小娘とその従者らしい灰色の髪の大柄な青年が見事な礼をとっておる。

南陽の太守となった袁家の小娘が挨拶に来たと聞いた時は驚いたものじゃが……これは良い意味で予想と外れたものじゃの。

あの腐りきつた洛陽で栄華を誇る袁家の小娘というなら傲慢で鼻持ちならぬ輩かと思っておったんじゃが…。

いや、そのような奴ならばそもそも儂のところに挨拶に自体来る筈がないの。

……袁周陽め、後継ぎはしっかり育てておったか。

「丁寧な挨拶痛み入る。袁太守、よくぞ参られた。儂が荊州州牧、姓が劉、名が表、字が景升じゃ。面を上げられよ」

「はっ」

儂が挨拶に応じると袁術は顔を上げる。

ほう……いやいや、面構えもなかなかのものをしておるの。

自らが背負う重責をしかと受け止めておる者の目じゃ。

これは小娘などと呼ぶのは失礼じゃったの。

あの莫迦息子共には是非とも見習わせたい程じゃ。

ふむ、となると控えておる従者の方も気になるの。

「控えておる方も顔を上げよ、名をなんと申す？」

「はっ！袁公路様が配下にて姓を樂、名を就、字を守路と申します」

ふむ、なるほどいかにも精悍な顔立ちをしておる。

腕も立ちそうじゃが知にも長けていそうな顔じゃ。

そして何よりこ奴身体中から忠の気が滲み出ておる。

これ程の者が従つとなればやはり袁公路、中々の者と見るべきじゃの。

「ふむ、中々有望な若者じゃな。さて袁太守、今日は儂に何用かな？」

「……何故妾が用があつて劉州牧様を訪ねたとお分かりに？」

いきなりの儂の言葉に袁術は少し驚いているようじゃが、そう驚くような事ではない。

嘆かわしい事じゃが、今の世で新しい太守が態々州牧に挨拶に来る

などあまりない事じゃ。

何か目的があつて儂に会いに来たと見るのが当然の事。

「何、ただの老人の勘じゃよ」

反応に出してしまうあたりまだまだ袁術も青いのう……いや、年齢を考えれば当たり前か。

「……ご明察恐れ入ります。妾は此度参上したのは、恐れながら劉州牧様にお願ひしたき儀があつての事です」

中々素直じゃな、この潔さは中々好ましいの。

……どれ、その潔さに免じてじっくりと話を聞いてやるうとするか。

「ほう、儂に願ひがあるとは……どのような用件かのう？」

本当ならもう少し駆け引きをして心の読み合いをるところじゃが流石にこの娘にそれを求めるは酷じゃ。

どれ程の願ひでこの娘が何処まで考えておるか、それだけ測るとするかの。

「はい。実は恥ずかしながら妾の下には政務に慣れた者がおらず、南陽の統治に難儀している次第。そこで劉州牧様には何人か政務に長けた方をお貸し願ひたいのです」

袁術は素直に困った内容を明かしてこちらに協力を求めてきおつた。

成程、確かに南陽はあの腐れ太守が治めておつたから荒れているじやろうし役人も残つておらんじやろう。

儂も何とかしたかつたのじゃが…あの江東の虎、孫堅が攻めてきて以来荊州は南部を中心に幾度も豪族の反乱や侵攻を受けておつた為に手が回せんかつた。

この件は荊州州牧たる儂にも原因があるのう。

じゃが…

「済まぬが人手が足りぬのは何処の郡も同じじゃ。袁太守だけを特別に扱うわけにはいかぬのう……」

そう、この荊州は何処の郡も揚州や益州、さらには河北から流れてきた民の受け入れや賊への対応に追われておる。

要請されたからと言っても袁術の土地だけ特別に扱うわけにはいかないのじゃ。

しかし少し袁術の様子がおかしいの。

儂が色良い返事を出しておらぬのにあまり落胆した様子がないわい。

……これは既に儂が最初から色良い返事をよこさぬ事は考えておつたな。

袁術がただ甘い考えをしているという事は無さそうじゃ。

「確かにそうでしょう。しかし妾の治める南陽は漢中、洛陽、さら

には豫州と接する要衝。荊州北部の要衝たる南陽が落ち着く事は荊州南部に問題を抱える劉州牧様にとっても好ましいことでは？」

堂々と言い切る袁術の顔には特に驕ったところは見えぬ。

これは脅しているわけではなくただ利を解いておるな。

甘いいう、このような交渉では時には脅しも重要じゃぞ？

しかし袁術の言っておる事も事実じゃ。

荊州の南部には未だ混乱の火種が残っておる。

儂が南陽の太守が不正をしておるのに手が出せなかったのは下手に反乱を起こされて前後に敵を抱える事は出来なかったからじゃかな。

「確かにそうじゃ。じゃがそれでは袁太守に力を貸す理由にならぬの。」

そう、袁術の説く利だけでは理由としてはちと弱い。

要衝というのなら長江が流れておる江夏郡や南群も変わらん。

むしろ長江は水運の要であり、江賊の活動が激しい今はより気を抜けぬ重要な土地となっておる。

袁術の言つ利は決して南陽だけには当てはまらぬ。

じゃが儂がそれを否定したというに袁術の顔は曇っておらん。

これはまだ何か儂を説得する為の材料があるという事かの。

儂が袁術を興味深く見ておると公路は後ろを振り返り、配下の樂就から何かを受け取りおった。

あれは……書物と小さな箱かの？

「そうですね。妾は此度の願いを叶えて頂いた暁にはこの品を献上する予定だったのですが……」

む、対価を用意してきおったか。

ありきたりな手ではあるといってもその内容に興味を惹かれるのは事実じゃ。

それに袁術が一体何を用意してきたのか気にもなるしの。

「ほう、それはなんじゃな？」

「気になりますか？」

む……しまったのう。

儂から質問した事で儂がその品に興味がある事を知られてしまったか。

これで主導権は袁術に握られてしまったのう。

しかし儂の好奇心が刺激されるのも事実じゃ。

「こやつ儂が学者であるという点を見事に突いてきおった。

ここは認めるしかないの。」

「ふむ、確かに気になるの。」

儂が降参の意を示すと袁術は箱の蓋を開ける。

その中に入っておったのは…木彫りの魚？

「それは木を彫った魚かの？」

確かに良く出来てはおるが……木製の魚等持ってきてどうするんじや？

儂は思わず顔を顰めてしもうたが、袁術は何故か笑っておる。

「これは指南魚といって水に浮かべると必ず頭が南を示す道具です。」

今こ奴は何と言いおった？

水に浮かべると方位を示す道具じゃと？

袁術が言った言葉の意味を儂が理解するまでには幾分と時間が掛った。

「な、なんじゃとおおお！！？？」

思わず叫び声を上げてしもうた儂に袁術や家臣達が驚いておるがそ

れどころではない！

日の位置によって方位を占う方法はあるが、水に浮かべるだけで方位が分かる道具等というものは聞いた覚えが無い！

少しでも旅をした者や軍に携わる者ならその有用性を理解できるじやろつ。

それ程方位というのは旅や軍事において重要なものなのじゃから。

「良樹（？越の真名）！水を入れた桶を持ってくるのじゃ！」

「は、はいっ！！」

儂が慌てて良樹に命じると良樹に指示を受けた侍従がしばらくしてから水を入れた桶を持ってくる。

その桶に袁術が箱から取り出した木の魚を浮かべる。

水に浮かべられた木の魚は水の上で回り始め少し揺れた後でピタリと止まる。

この部屋の方位について儂はしっかりと把握してある。

木の魚の頭が向いておる方向は……間違いない南じゃ！

儂が思わず啞然としながら公路を見やると袁術はいかにも『してやったり』というような満面の笑みを浮かべて儂を見ておった。

そして袁術はさらなる追い打ちを掛けてくる。

「ご理解頂けたようで何より。それでこの書物にはこの指南魚の製法が書かれているのですが……」

儂は椅子から滑り落ちる事を辛うじて防いだ。

この指南魚の製法!?

それがどのような意味を持つか分かっておるのか!?

……いや、分かっておるのじゃろうな。

だからこそそれを示したのじゃろう。

全く……老人を驚かせるではないわ!

……これは儂の負けじゃな。

このようなものを示されたら協力しない手は無いわい。

「分かった。袁太守の願いを聞き届けよう。…じゃが一つ教えて欲しい。これを考案したのは誰じゃ?」

儂は降参することにしたが、これ程のものを一体誰が考えたのか知りたい。

儂の質問に袁術は浮かべておった笑みを更に深めおる。

「ここに控えている楽守路が」

袁術にしめされた青年…樂守路はその声に従って頭を下げおった。

袁術の反応を見れば分かる。

袁術はこの男を余程に信頼しておるのじゃろつ。

その顔はまるで自分の事を褒められたかのような顔をしておる。

いや…この顔は…！

成程のう、つまりはそついう事が。

若い、若いのう！

見ていて微笑ましくなるわ！

普通これ程までに出来た配下を持てばその主は部下を疑うものじゃが、この主従は信じられぬ程深い信頼で結ばれておる！

「はっはっはっはっは！！！！」

思わずいきなり笑いだしてしもうた儂を他の者が訝しげな顔で見ることがそれも気にならぬ。

ここ最近頭の痛い事ばかりじゃったが…：…久しぶりに良いものを見せて貰ったわい！

「ふう、少し笑い過ぎたかの。さて、袁太守。ここまでの物を贈られてはこちらもただ協力するだけでは気が済まぬ。何か他に願いはあるかの？」

「それでは一つ見て頂きたいものが」

いつになく良い気分となった儂はもう少し衰術：いや、公路殿に協力したくなつた。

その誘いに公路殿はもう一つ書物を取り出すと儂に渡してくる。

「ふむ、どれどれ…」

渡された書物を読み進める儂だったが、読み進めるうちに身体が震えてきおつた。

「こ、これは…！」

思わず顔を上げて公路殿を見やるも彼女は笑顔を浮かべたままじゃ。

儂は身体中の血が久しぶりに滾ってくるのを感じる。

『大学設立の計画』

書物に書かれておつたのは南陽に大学を作る事についての計画じゃつた。

その大学では授業料を取らずに入学資格さえ満たせば身分を問わずだれでも学ぶ事が出来る。

そしてその内容は兵法・医学・薬学・経済学・地学・建築・鍛冶・農業技術等の多岐に渡つておる。

その目的は将来の国を担う人材の育成と各学問や技術水準の向上。
更にその運営資金についてのやりくりについてまでもが考慮されて
おる！

儂とて学者の端くれじゃ。

学問を広めたいと思い、荊州に学問を根付かせようと努力もして
おる。

この計画はまさに儂にとっても夢のような計画じゃ！

一体誰がこのような物を…！

呆然としながら公路殿に目をむけるがその公路殿は脇の樂就を誇ら
しげに見ておる。

これもあの男か…！！

「…どうしてこれを儂に？」

色々と言いたい事はあるのじゃがそれらを無理矢理呑みこんでそれ
だけを訪ねる。

そして公路殿は樂就を示しおった。

「樂守路、発言を許す。答えよ」

儂が公路殿の意図に気付いて声を掛けると樂就は顔を上げる。

「はっ！劉州牧様は学問を奨励なさり、その為には荊州には様々な才ある人々が集っております。袁公路様の下この計画を行う為には是非とも彼らの協力を頂けるように劉州牧様にご助力をお願いしたいのです！」

守路は見事に堂々とした口調で言い切りおった。

成程、確かに儂の領内には水鏡女学院の司馬徽のような知ある者が集まっておる。

じゃが恐らくこやつがこれを儂に示すように公路殿に献策したはそれだけではあるまい。

これ程のものを見せられたら儂は公路殿に必ずや助力する事をこ奴は分かっておった筈じゃ。

現に今儂は完全に公路殿に味方するつもりになっておるからな。

それを見越しておったか、楽守路。

それにしても指南魚といい、この計画といい…凄まじい程の才を持つ楽就じゃがその才の全てを公路殿に捧げておる。

そして公路殿もそれ程の才を持つ楽就を信頼し、それに応えておる。

…見事な主従じゃ。

既に漢王朝には陰りが見えておる。

やがて世は乱世となるじゃろう。

そしてその乱世に代わるような次の時代を切り開くは…もしかしたらこやつらかもしれぬ。

儂は…もしかしたら時代に巡り合えたのかもしれないな。

どうせ老い先短い命じゃ。

将来有望な若い者達の背中を押すも一興じゃろう。

その為に…もう一つだけ確かめておかねばなるまいの。

「袁太守、何故これを最初から儂に見せなかつたのじゃ？」

そう、この計画書はまさに儂にとっては夢のような計画じゃ。

これわ最初から示しておれば儂は間違いなく協力を約束したじやろう。

しかし公路殿はこれを見せずに交渉が成立した後で見せた。

その真意を問いたださねばならぬ。

「楽守路とも相談したのですが、これを最初から見せれば恐らく劉州牧様は妾達に協力してくれたことかと思えます。しかしこれは妾達にとって私情の事。劉州牧様に直接の利は無く、州牧たる劉州牧様に私情で政を行うように道を誤らせてしまいます。そのようなものを進んで出すわけには参りません。…無論此度の交渉が難しくなつた時は用いるつもりでしたが」

「…見事な心意気じゃ」

上に立つ者としては甘いじゃろうが筋道が通つておる。

上に立つ者が筋を通せばそれは人の信に繋がる。

そしていざという時にはその手を使う事を覚悟もしておる。

公路殿の英傑たる者としての力は弱いかもしれん。

じゃがその代わり素晴らしい程に英君たる器を持つておる。

英傑は乱世を治める器じゃが、それが良き治世となるとは限らぬ。

良き治世を作り、国を発展させるは英傑ではなく英君じゃ。

この先公路殿が英傑たる者と相對した時、危うくなる事があるやもしれぬ。

じゃがその時はこの樂就や他の家臣達が親身となって公路殿を支える事じゃろう。

……儂は公路殿の築く未来が見てみたい。

この先公路殿が結果を示したのならば…我が命運、公路殿に賭けてみよう。

その後僕は公路殿に計画への全面協力を約束し、後日政務に通じた者達を派遣する事を約束して公路殿達を見送った。

僕は公路殿らを見送った後脇に控えておった良樹を振り返る。

「良樹」

「はっ」

「確か紫苑が町を離れたがっておったの」

「はい」

「紫苑を呼ぶのじゃ。使いを走らせよ」

「御意に」

紫苑は僕の配下でも優秀な者じゃ、死んだ夫で太守じゃった韓玄の補佐をしておったから政務にも長けておる。

あ奴も古い先短い僕に仕え続けるよりも公路殿に仕えた方が良からう。

公路殿、楽就、お主達の朗報を期待して待つておるぞ！

第13話 劉表（後書き）

何か甘い話書いているほうが格段に調子がいいです。
というか何気に連載開始からほぼ連日更新：自分でも驚いていたり
します。

後劉表との会話の中で美羽の口調に違和感を感じるかもしれません。

でも小学生でも丁寧語くらい使い分ける事って出来ますよね。

特に恋姫の時代は礼儀が重んじられた筈ですし、上流階級の間が
それを学んでいない筈がありません。

なので今回は敬語を話す美羽様にしてみました。

あとちょっとした解説を。

指南魚

中国で発明された羅針盤の先駆けのようなもの。

作者は日本の忍者が使った方位磁石からこれを思い付きました。

学校計画

すみません。

七色の色の国の物語のパクリです。

作者は恋姫の話を書くにあたって結構あのお話を参考にしています。同じ中華風作品なんで結構楽なんです。

劉表

引きこもりだの目立たないだの言われているがその実多分三国志の中でも一番の政治力チートだと作者は思っています。

豪族入り乱れてた荊州を統一してしかも発展させている人。

尤もそのおかげで荊州は魏呉蜀から狙われ、食い物にされてしまったのはなんとも言えないですが。

まさに餅を食われたという状態です。

この話では設定上お爺さん設定。

第14話 指切（前書き）

ええ…糖度が依然と過去最高値を記録中です。

ブラックコーヒーをご用意の上でお読み下さい。

第14話 指切

SIDE 黄忠

あの人亡くなってから1年。

璃々を育てながらあの人を愛した町を守り続けていたけど、あの人との思い出が残るこの町で暮らすのは辛い。

そう思っただけか智遥様（劉表の真名）に配置換えを嘆願していたわ。

智遥様は私を慰撫するばかりだったのだけれど、その智遥様からつい先日呼び出しを受けた。

急な呼び出しに何事かと思ったのだけれど…。

智遥様の用とは私に新しく南陽の太守となった袁公路さんの手伝いに行っただけのこと。

少し前に赴任したばかりで政務が滞っている公路さんが智遥様を訪ねて頼んできたらしいわね。

智遥様が言うには公路さんは優れた君主の器で配下の楽守路という人物も傑物だということ。

その上で智遥様は『もしお主が公路殿を君主の器と見たならばお主は公路殿に仕えよ』とまで言ってきたわ。

あの智遥様があそこまで認める袁公路という人物に私は興味を覚えた。

あの町を離れる事が出来る事もあって私は智遥様の願いを二つ返事で引き受けたわ。

そして私はあの町に戻って準備を整えた後で幼い璃々を連れて智遥様が派遣した他の文官と一緒に南陽の町を訪れたのだけれど……。

「良く来たのじゃ！妾がこの南陽の太守の袁公路なのじゃ！」

「さすがお嬢様！州牧の劉表さんが派遣してくれた人達にその偉そうな態度、無礼過ぎます。よっ、この礼儀知らず、凄いぞ〜！」

「わはは、そうじゃ、妾は凄いのじゃ！もっと妾を誉めてたも〜！」

何なのかしら、これは。

到着の挨拶に來た私達を出迎えたのは玉座に座って高笑いを上げている女の子とそれを囁し立てる少女。

傍らに控える少女は張勳というらしいわ。

部屋には豪華で明らかに高いと分かる服を着た者達が並んでいるし。

智遥様から聞いていた人となりとは全く真逆の姿。

どう見ても公路さんは名君の器どころか典型的な暗君にしか見えな

い。

「あの、失礼ながら楽守路殿はいらっしゃるでしょうか？」

これはどういふことなのか分からなくなってしまった私は、事前に智遥様から公路殿に仕える出来た人物として聞いていた楽守路さんという人物について尋ねてみた。

「楽就かえ？あやつは妾の生活についてあれこれ五月蠅いし生意気だったからの、他の者と纏めて牢へ入れてやったのじゃ！」

「そうそう、楽就さんとか徐庶さん達ってお嬢様に対して生意気でしたからね。」

な、何と言うことなの……！？

その答えを聞いて目の前が暗くなったように感じた私はその後の事は覚えていない。

気が付いたら私は南陽の城の一角に与えられた部屋で呆然としていたわ。

私の腕の中では璃々がすやすやと寝ている。

……なんだかとんでもない所へ来てしまったみたいね。

ここにいたら私の命どころか璃々の命さえ危ないわ。

仕事をやるだけ済ませたら早く智遥様の元で帰った方が良さそう。

そう私が考えていると部屋の扉を叩く音がした。

私が応対に出るとそこにいたのは一人の女官。

袁渙と名乗ったその女官は公路さんに私を連れてくるように言われているみたい。

璃々も一緒にいいということなので私は璃々を抱いて袁渙さんに連れられて部屋を出た。

そうして案内された部屋に入った私を待っていたのは……。

「黄漢升殿、先程は済まなかったの。無礼を詫びるのじゃ」

部屋にいたのは公路さんの他に十人程の人物。

その誰もが明らかに一廉の人物と分かるような気配を発しているわ。

そして私に向かって頭を下げている公路さんは先程と姿こそ同じだけれどまるで別人。

傲慢で無知かつ我が儘そうな気配は微塵もなく、知性と温かさ、そして気高さがその身に溢れている。

まず私に頭を下げた事からも礼節を知っていて人格が確かな事も伺えるわね。

私の目の前には間違いなく一つの郡を任された太守たる人物とそれを支える家臣達がいたわ。

そこからの話は驚きの一言だったわね。

今回の事は全て仕組まれた事。

公路さんを取り囲む難事を打破する為の策。

そのために公路さんは暗君を演じ、本当に信頼している家臣達を注目が集まらないように遠ざける。

言つと簡単に思えるかもしれないけど……この策の為に不名誉や陰口を甘んじて受ける事になる公路さんや家臣の方達の覚悟は凄いとしか言いようがないわね。

そして公路さん達は私にここまで話した上で協力を頼んできたわ。

初対面の私に何でここまで明かせるのか不思議だったんだけど……理由を聞いて納得出来たわ。

今は不在らしいけど家臣に臧覇さんという人がいて公路さん達は予め私の事は調べてあった。

そして今日の挨拶の時の私の態度で私なら大丈夫だろうと判断したとの事。

私は少し考えた後でここで客将としてお世話になる事を決めたとわ。

智遥様に言われたこともあるけど、この公路さんがこの先どう成長するか楽しみだし、家臣の人達も中々面白い人が多そうだわ。

政務に協力しながらこの先彼女達がどうするのか見極めてからでも

遅くはない。

本当に公路さんが智遙様が言うような人物と分かったならその時は……。

S I D E 黄忠 E N D

S I D E 樂就

美羽が劉表との交渉を無事成功させた後で俺達が南陽に戻った時、残っていた蒼香達によって俺の考えを元にした計画は出来上がっていた。

俺では無理だと確信出来る程に細かく練られている計画は見事に一言に尽き、蒼香達が流石に歴史に名を残した軍師である事を実感させられた。

そして俺達は戻ってすぐに策を実行に移した。

まず今回劉表に挨拶に向かった時に俺が美羽の機嫌を損ねた事を理由として俺を牢に入れ、それを諫めたということで蒼香、翠香、真里、李雪も同罪として牢に入れられる。

無論本当に牢に入っているわけではなく、牢に仕立てられた棟は執務室兼居住区になっていて俺らはその中で仕事をしているだけだ。

部屋の出入りをするのは女官の一人で袁渙という人物と事情を知っている信頼できる兵士数人だけだ。

袁渙は字を曜卿と言って美羽とは遠縁にあたる人なのだが、昔羽羽様に世話になつた事が縁で美羽に仕えている人だ。

袁家の一族ではあるが信頼出来る人で、声が美羽と非常に似ているので美羽の影武者を務めてもらつた事もある。

また町の治安や兵士については華漣、梁綱殿、李豊殿に任せている。

そして美羽はまさに我が儘な子どもといった性格をした暗君を演じている。

俺がかつてから警戒していた張勳を側に付けたことでその演技はかなりのものらしい。

事情を知らずに道化を演じる事となる張勳については多少思うところがあるが、元から美羽にとって害となりそうだっただけに同情はしない。

そうして豪族達が美羽を甘く見るようになった頃に劉表から文官達が派遣されてきた。

驚くべき事にその中に黄忠が混じっていた。

黄漢升…後に『老黄忠』として有名になり、蜀の五虎將軍に名を連ねる人物だ。

だがこの世界での黄忠は赤子を連れた妙齡の未亡人だった。

もはやこの世界の三国志に人物について驚かなくなっていました俺だが……まさか赤子連れとは思わなかった。

雄の調査からも優れた人物である事は分かっているので俺達は彼女を引き込む事に決め、色々あったものの彼女も客将として仕えることを納得してくれた。

これで準備は整った……そう思っていたんだが……。

「うっ……」

「美羽、頼む、分かってくれ」

今俺の前では美羽が涙目になって俯いている。

理由は計画の詳細だ。

計画を実行するには美羽が寿春に行っている間に南陽を統治して力を蓄える者が必要になってくる。

その人員について俺は美羽に知らせていなかったのだ。

計画では張勳を別にして寿春には美羽・蒼香・翠香・華漣が赴き、南陽には俺・李雪・真里・梁綱殿・李豊殿・袁渙が残る事になっている。

これで客将となった黄忠が南陽に加わり、両方の連絡役として雄が動く予定だ。

正直短い期間で力を蓄えるのは大変な事になる。

それを補うのが俺が持っている様々な前世の知識だ。

既に俺の中では原案が何個もあり、それを実行に移す為にも俺はこちらに残って指揮を執る必要がある。

また俺と美羽が別れる理由は他にもある。

美羽は現在あまりにも俺を頼り過ぎているのだ。

長い間側にいたのが俺だけなので仕方が無い面もあるが、それでは美羽の将来に不安が残る。

俺は美羽を支え続けるつもりだが、もしも俺に何かあった時美羽が俺に頼り切りの状況では支えを失った美羽がどうなってしまうか分からない。

古来から力を持った人物がその支えとなった人を失ったのと同時に崩れてしまった例は数多い。

例えば栄華を誇った平氏は平清盛の後継者だった平重盛を失った後陰りを見せているし、豊臣秀吉は補佐役の弟である豊臣秀長を失ってから暴走を始めている。

俺は美羽にはそんな末路を迎えて欲しくない。

美羽にはもっと俺以外の奴を頼る事も覚えて欲しいのだ。

そう言う意味では今回はその好機なのだ。

そして俺は美羽に俺が南陽に残る事を伝えたんだが……

それを聞いた途端に美羽が涙目になってしまった訳だ。

美羽は聡い。

頭の中では俺が残る事の意味について理解はしている筈だ。

ただ頭で理解は出来ても感情が邪魔をしているんだろう。

「美羽、俺がここに残らないと計画が進まない。分かってくれ」

「うう……」

俺は辛抱強く説得を続けるが、いつもなら聞き分けがいい美羽も今回ばかりはぐずるばかりだった。

いい加減どうしたものかと俺が途方に暮れそうになった時、それまで泣いていた美羽が顔を上げた。

「分かっておる、分かっておるのじゃ。それが必要な事だという事はの……。じゃが妾は泉と離れる事が不安でたまらないのじゃ……」

正直な所俺も美羽と離れる事が不安なのは変わらない。

寿春は美羽にとって敵だらけの場所だ。

そんな場所に美羽を放り込まなければならぬと思うと胸が張り裂けそうになる。

「じゃが、妾がここで計画を駄目にする訳にはいかぬの……泉、妾は泉が必ずや妾を迎えに来ると信じて良いのじゃな？」

思い詰めたような瞳で俺を見つめる美羽。

その視線に俺は力強く頷いた。

「1年だ。1年経つたら必ず美羽を迎えに行く。それまで……俺を、俺らを信じて待っていてくれ」

正直1年というのはかなり厳しい時間だが、美羽の為ならば俺はやり遂げるつもりだ。

「……分かった、約束じゃぞ？妾は必ず泉が妾を迎えに来てくれると信じておるからな？」

「ああ、約束は必ず守る」

俺の言葉に安心したのか美羽はようやく掴んでいた俺の袖を放した。

そして美羽は右手に小指を立てて手を俺の方へ向ける。

昔俺が遊びで教えていたあれ覚えていたのか：

美羽の仕草の意味を理解した俺は自分も右手の小指を立てて美羽の手と絡める。

指切りを終えると俺と美羽は互いに目を合わせて笑った。

「泉、行ってくるのじゃ」

「ああ、必ず迎えに行く」

最後に笑みを浮かべながら笑うと美羽は俺の部屋を後にした。

……次に俺が美羽と会うのは1年後だ。

第14話 指切（後書き）

すみません。

今回は本当に甘いというよりもくさいです。

どれぐらいかと言うと目を回すような魔法を使う漫画に出てくるふんどし履いた妖精が飛び出てくるレベルです。

何でしょうかこの桃色空間は。

第15話 弟子（前書き）

しばらくNAISEIの時間です。

あと今日は少し訂正に時間がかかった為に遅れました。
最初ノリだけで書いたのでやり過ぎたんで。

第15話 弟子

SIDE 樂就

美羽達は寿春へ向かって旅立っていった。

美羽が寿春に向かうに先だって、これまで先延ばしにされてきた人事も行われている。

その人事で俺を含めて牢に入れられた事になっている者は牢から出されたものの軒並み降格、もしくは冷遇されているように見えるような地位に就く事となった。

まず南陽への居残り組は美羽の意地悪によって南陽に残されるといふ形をとった上で総責任者に袁渙が就いた。

そしてその下に俺、真里、李雪、李豊殿、梁綱殿、客将として漢升殿が就く。

袁渙は牢に入れられていた訳ではないが、流石に南陽の町を治める代理が冷遇されているように見える筈がない。

美羽に気に入られていると見られている袁渙を名目上の責任者とすることで実際に南陽を預かる事となる俺から目を逸らす事が目的だ。寿春組では大將軍兼美羽の補佐役に張勳が就いた。

そして唯一華漣だけは親衛隊隊長という地位に就いたものの、蒼香と翠香は降格して中級文官となっている。

これは流石に美羽を守る者だけは信頼出来る者が就く必要があった為と仮に張勳が大暴走をしても実務の現場レベルの指揮官に蒼香と翠香が就くことで民への被害を抑えるためだ。

ちなみに雄については存在自体があまり知られていないので役職には就いていない。

雄には豪族達の所業等を洗って貰う必要がある。

いずれ来る日の為に。

南陽の政務については漢升殿を筆頭として景升殿から文官が派遣されたお陰でかなりスムーズに進むようになっていく。

彼らの指導によって元からいた官吏や俺達も大体の仕事の流れを掴む事が出来たので蒼香と翠香が抜けた穴を考慮しても能率は日々上がっていった。

一言に力を蓄えると言ってもそれは単純な力……兵力をつける事のみではない。

無論豪族達を押さえつけるためにも兵力は必要だがそれだけではいけないのだ。

戦の大勢は兵力の多寡で決まるといえるのは古来からの常識だが、それは単に兵を集めた烏合の衆では話にならない。

兵を運用するには兵を集め、訓練を課し、将を得て、兵の装備を調えなければならぬし、さらに軍事力として兵を常に養い運用する

には軍馬や輸送用の牛等も含めて莫大な金が必要となってくる。

また基本的に軍事力というものは基本として何も生み出す事がない。つまり軍事力は持っているだけで金を大量に消費するものなのだ。

政治的・経済的に見たら軍事力を多く持てばそれだけ人手が取られる為に民間の力が落ち、さらに金を消費する……つまり国力を落とす事となる。

要するに俺達がしなくてはならない事は、ある程度の軍事力を養う事が出来る程の国力を養う事というわけだ。

それでは国力とは何なのか？

色々考える事は出来ると思うが俺は国力とは資本力の事だと考えている。

土地、食糧、金、生産力……つまりはそういうものだ。

そしてこれらを充実させる一番の方法は民の力をつける事。

民が力を付ければそれは結果としてそれは美羽の力となってくる。

要は民の力の向上が当面の目標となる。

今南陽の付近でも流民が多く、賊が増えて治安が悪くなっているのは民が貧しく、収入が無いからだ。

ならばどうすれば良いか？

民に職を与え、民に生活の手段を得させればいい。

その為の雇用を俺達が生み出すのだ。

「……というわけだ」

「はあ、なるほどなあ。為になりますわ、師匠」

「うう、すみません、私には少し難しいです……」

俺は政務の傍らで今俺が主導で行っている事業の意義について説明していたのだが、聞いていた真里と芙蓉（袁渙の真名）の反応は見事に分かれた。

袁渙は落ち込んでいるが別にそれは落ち込むような事ではない。

美羽にも昔説明した事があるが、一回では理解が出来ずに何回が繰り返すことでようやく理解するに至った。

むしろ聞いただけで大部分を理解してしまっている真里の方が異常だ。

さすがに後から勉学を重ねて軍師となったと言われている徐庶、学習能力が半端ではない。

俺が政務をしている時にいきなり真里に『泉はんの弟子にして下さい！』と頭を下げられた時は驚いた。

名軍師・徐庶が俺に教えを乞うとは何事かと思っただが、真里は蒼香や翠香と一緒に仕事をして軍略や謀略では二人に敵わないと悟ったそうだ。

真里が二人に敵わなかったとしても戦場が分かれた時の事を考えれば別に大した問題ではないと思うのだが真里は違ったらしい。

詳しくは聞けなかったが、昔にも何やら自分より優れた才能を持つ奴に会った事があるらしく真里は自分の軍師としての才にコンプレックスを抱いているようだ。

そこで俺が主導で内政をしている姿を見て蒼香と翠香が軍略を担当するならば自分は政略を担当しようという考えに至っただらしい。

確かに俺は前世の知識を元に仕事をしているから真里から見たら画期的に見えないこともないことは分かる。

ただ俺が政略をするならば真里が政務の先頭に立てないのではないかともしうのだが、そこは乙女の複雑な心というものらしく、蒼香や翠香はライバルであっても俺はライバルとはならないようだ。

まあ正直俺も日常の政務に加えて新しい政策を実行する事に忙しさを感じていたし、俺と似た思考をした内政手腕を持つ者が増えれば助かる。

俺は真里に前世の知識に基づいた思考を教えることにして俺の補佐

をして貰っているのだが、それ以来真里は俺の事を師匠と呼んでいるのは少し面映ゆい。

そうして俺が真里に色々教えているところに向学心旺盛な芙蓉が加わって今に至っている。

ちなみに芙蓉とは既に真名を交換済みである。

本当ならば漢升殿にも加わってほしいところだが、客将である漢升殿に機密事項を流すわけにはいかない。

「師匠、質問なんやけどなんでまず農業力を入れないん？」

真里の質問はある意味この時代なら当然の事だろう。

基本的にこの時代の生産力と言えば農業だ。

しかし作物を育てる農業は一朝一夕に結果が出るわけではない。

無論将来的には力を入れていかなければいけないが、灌漑や開墾に掛かる時間と資金の事を考えると今は行う事が出来ない。

そういつた理由から俺は俺達が主導……つまり官営で商売をすることを決めたのだ。

最初に手掛けたのは袁家で細々と作っていた水飴の大々的な生産だ。

幼い頃美羽は蜂蜜好きだった。

しかし俺と一緒に村や町を廻り、民の暮らしを知った後は贅沢な嗜

好品である蜂蜜を余り食べないようになった。

ただ美羽が甘い物好きである事には変わりない。

そんな美羽の為に蜂蜜に代わるモノとして俺が前世で祖母によく作って貰った水飴を思い出しながら作ったのがこの水飴だ。

美羽はこの水飴を気に入ってくれていて、以前飲んでいた蜂蜜水に代わって今では冷やし飴をよく飲んでいる。

この時代甘い物はかなり貴重な品で、蜂蜜はあるにはあるが貴重な薬として使われている高価なものであり、庶民の口に入る甘い物といったら果物が精々いいところだ。

美羽から任されていた袁家の財産を投入して官営の工場を作り、南陽の町で職につけずに路頭に迷っていた者や流民を雇って生産を開始したところ、水飴は飛ぶように売れた。

冷やし飴や芋を使った大学芋もどき等の水飴をそのまま食べる以外の使用法も公開したのも爆発的に広まった原因のようだ。

洛陽や長安へ輸出しているお陰で今では需要が供給を上回っている状態となった。

フル生産体制で生産していてさらなる生産の拡大も行っている。

そのお陰で資金に余裕が出来た俺達は更に別の産業にも手を出す事が出来るようになってきている。

その一つである竹を使った紙作りも試作品は出来たのもう少しで

軌道に乗るだろう。

この世界で流通している紙よりも上質なので売れることは間違いない筈だ。

……前世では元々本が好きで、特に好きな歴史書を中心に様々な本を読み漁った事がこんなところで役に立つとは思わなかった。

だがまだまだ俺達には力が足りない。

美羽に1年と約束したからには急がなくてはならない。

後の歴史を変える事となろうとやれるだけの事は全てやってやる。

町は立ち直り始めたが、南陽のの活気を耳にした為か民の流入が増え始めている。

そろそろ農村の方の対策を取らねば食糧事情も危うくなり、そうなれば水飢の生産にも響いてくる。

兵がある程度増えてきた、開墾作業に当たらせるか。

労働力を無駄にせず済むし、農地開発にもなる。

開墾した農地は流れてきた民に貸し出せばいい。

更に戦場での土木作業の訓練にもなるから一石二鳥どころか三鳥だ。

屯田兵もいずれ考えておいた方がいいだろう。

灌漑も進めたいが、冬の農閑期の公共事業としてやった方がいいか？

この後飢饉となる事も考えられるし、救荒作物の栽培も急がなければならぬ。

蕎麦とサトイモはもう見つけている。

蕎麦は雑穀扱いされているが食べ方さえ分かればかなり広まる筈だ。

取りあえず農業に関してはそこまで後は美羽を迎えに行ってから少しずつ進めるしかないだろう。

後は……アレか。

正直今でも俺の中で迷いがあるが……。

美羽の希望は戦をなるべく起こさない事だ。

アレはその美羽の考えの対局に位置するものとなる。

だがアレの使用法はそれだけではないし、要は使い方次第だ。

アレばかりはいざ必要になった時にすぐ用意出来るわけではない。

今のうちに用意しておくべきだろう。

確か材料は人や馬の尿糞にヨモギ等の草だったな。

農業用も肥料とでもかこつけて密かに作るか。

ただこうなると流石に俺が目立ち過ぎて来るな。

既に水飴、竹の紙、指南魚と立て続けに出してしまった。

何か隠れ蓑を用意する必要があるか……。

「…匠、師匠！」

いつの間にか思考に耽ってしまっていた俺が呼ばれる声に顔を上げると目の前で真里が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「…ああ、どうしたんだ？」

「どうしたって……。それはうちの言う言葉やで。いきなり黙り込んでからに」

そういえば政務をしている途中だったか……。

「師匠も連日仕事しすぎて疲れとるのや。少し休憩でもいれまへんか？」

「あ、それなら私はお茶を用意してきます！」

流石本職の女官と言つべきか芙蓉がさつと立ちあがって部屋を出ていく。

いや、一応名目上俺の上司なのだからそれはどうかと思うんだが…
…。

「芙蓉はんも何だか相変わらずやなあ……」

俺と同じ事を真里も思ったようだ。

ただこれくらい気が抜けている方が丁度いいのかもしれないな。

1年後に美羽を万全の状態を迎え入れる為にも……今出来る事はなるべくやっておかなければな。

第15話 弟子（後書き）

内政ネタは色々考えているんですけどね。

余りやり過ぎるとストーリーをぶち壊しそうで怖いんですよ。

最後のアレについてピンと来た人はかなりのマニアです。
というかこれを自力で発見した日本人パネエ……。

第16話 雌伏（前書き）

書いてて少し酷すぎるかなとは思ってたんです。

ただ作者的には原作から考えても矛盾はしていないと思います。

そして衝撃の告白。

初期のプロットの2話目がこの話でした。

なんとというかもう長くなりすぎとかいうレベルではありません。

第16話 雌伏

SIDE 袁術

「うう、七乃あく、蜂蜜水がなくなってしまったのじゃあく!!」

「えく！お嬢様もう飲んじやったんですか？」

「しょうがないのじゃ！妾は蜂蜜水が大好きなのじゃ！七乃、妾は新しい蜂蜜水を所望するのじゃ！」

「もう、お嬢様つたら仕方がないですねえ。でももう蜂蜜の在庫が殆どありませんよ？」

「何、蜂蜜が無いのかや！？どうしてじゃ！？」

「それはお嬢様が毎日食べ続けているからですよ」

「ぬう、なら七乃！蜂蜜を手に入れてくるのじゃ！」

「はいはい 蜂蜜がどれ程高いか知らずに注文なさるお嬢様、流石ですよ、世間知らず！凄いです！！」

「わっはっは！そうである、そうである？もっと妾を誉めてたも！！」

妾が一頻り莫迦笑いをした後で張勳が部屋を出て行ったのじゃ。

妾が寿春に来てから半年が経った。

先程までの何とも莫迦らしいとしか言えぬやり取りもはや日常の事となってきたのう。

流石に慣れてきて妾の演技も段々と板についてきておる。

しかし妾が言うのもなんじゃが……典型的な暗君と佞臣の会話過ぎて些か現実味に欠けるのう。

もつとも妾は演技なんじゃが相手の張勳は本気なのが頭が痛いところじゃ。

ただそのお陰でこの光景を見ておる者達からは茶番であると疑われずに済んでおるようじゃから文句は言えんのじゃが。

欲に目が染まつておる自称親族や豪族達はともかく、あれ程泉が警戒しておった孫家の者まで簡単に騙せるとは思わなかったの。

最初は気付かれるやもしれんと覚悟しておったのじゃが、孫策や周瑜が妾を見るあの目は半分妾を侮っておる者の目じゃ。

後の半分は恨みというか憎しみじゃな。

恐らく自分達の土地とっておったこの土地を妾に奪われたと思っておるんじゃないのう。

奪うといつても、南陽もそうじゃが一応妾は漢の土地を太守として預かっておるだけで別に妾のものというわけでは無いのじゃがのう。

孫策の母の孫堅はこの辺りの役人だったらしいの。

その孫堅が曲がりなりにもこの辺りを治める事を認められておったのはこの辺りの力無い太守に代わって民と治安を守っておったからじゃ。

しかし孫策には民を守る程の力は無く、増してや孫策は官職にも就いておらん。

王朝も皇族で荊州州牧の劉景升殿に刃を向けた孫堅の娘をわざわざ太守に就けるはずがないからの。

つまり今のところ孫策がこの地を治める理由は無いのじゃ。

孫家を皇族に逆らったとして逆賊とする事も出来たそうじゃが、それで下手に混乱を起こされても叶わぬ。

そう考えた珍しく良識ある者の案によってここに近い南陽の太守となった妾が孫家の監視を含めてここの地と孫家を預かることになったわけじゃ。

……と南陽にいた頃妾に泉が説明してくれたのじゃが、この地に来てみて泉の言う通りじゃと妾は思うのじゃ。

そして事実妾達が寿春に来た頃この辺りは南陽がましに思える程荒れておった。

孫家の先代の孫堅が力でこの辺りを押さえつけておっただけにその孫堅の死とともに豪族共が暴れ出したためじゃ。

孫策達の兵は3千。

当然それを押さえつけられる筈が無く、妾達が南陽から連れてきた1万の兵をもってようやく静まったのじゃ。

今妾は莫迦のふりをしておるが、寿春の町自体は蒼香と翠香が豪族共や官吏達の暴走を抑えてくれておるお陰でむしろ前よりも復興してきておる。

その辺りの事を妾を恨んでおる孫策達は理解しておるのか？

孫策も周瑜も優れた才覚を持つ者として妾は泉から聞いておったのじゃが……これは同盟は難しいやもしれんの。

正直以前一度会った孫策の妹の孫権の方が聞き分けが良いかもしれん。

あ奴は何だか妾と似ておる気がするのじゃ。

孫策よりも孫権を相手に考えた方が良いかの？

「お嬢様〜！蜂蜜水を持ってきました〜」

「おお〜、七乃、早く渡すのじゃ〜！」

妾が表面上は蜂蜜水を待ち頬を膨らませながら考え事をしておると張勳が蜂蜜水を持って帰ってきおった。

妾はすぐさま満面の笑顔でそれを受け取り蜂蜜水に口をつける。

「ぶは〜。やはり蜂蜜水は美味なのじゃ〜！」

蜂蜜水を飲む妾の横では張勳が笑顔を浮かべて妾を見ておる。

その視線に寒気を感じるのは妾の気にせいではない筈じゃ。

まあ張勳がいかにか妾の事を思つてようと、仕事をしっかりとするなら妾は別に構わないのじゃ。

ただこ奴は前から仕事を適当にして他人に丸投げするばかりで他の時間はひたすら妾に付きまといつておつた。

泉達も言つておつたのじゃが、張勳の仕事を他人に任せる才能は凄いものじゃ。

ただその方向性が決定的に間違つておるのが問題なのじゃが。

責任ある立場に就けてみたら何か変わるやもしれんと思つておつたのじゃがのう……。

こ奴は補佐役という仕事をお付きか何かと勘違いしておるのかの？

泉も補佐役じゃが、泉は袁術という妾の存在を支えてくれておる。

もし妾が間違つた事をすれば泉は身体を張つてでも止めてくれるじやろつ。

無論泉にそのような事をさせたくはないがの。

張勳のように妾を甘やかすだけではないのじゃ。

いつか張勳が己の間違いに気付いてくれたらよいのじゃがなあ。

しかしこうして泉と離れてみると妾がいつもどれだけ泉に頼っておったのが分かるの。

あの泉の事じゃ、きっとこのままではいかんと分かっておったのじやろうな。

泉がおつたら妾は泉に頼るばかりで、他の翠香や蒼香達の事を蔑ろにするところじゃった。

翠香達は妾の事を認めて妾に仕えてくれたというに妾が翠香達を頼らんかったら本末転倒じゃ。

実際今妾は蒼香、翠香、華漣の世話になっているのだから。

じゃが妾と泉の繋がりが切れたわけではないのじゃ。

今妾が飲んでおる蜂蜜水。

この蜂蜜は泉達が南陽で新しい養蜂の方法によって作ったものじゃ。

以前よりも良質で大量に生産出来ると聞いておる。

この蜂蜜を売りに来ておる商人も妾達の息が掛かっておる者じゃ。

つまり妾は本来タダの蜂蜜水に金を払う事で寿春から南陽に資金を送っておるわけじゃ。

これは真里の策と聞いておるが、よく考えたものじゃな。

しかし昔好きじゃった蜂蜜水じゃが……今はそれ程美味しく思わぬの。

いや、むしろ苦く感じるのじゃ。

今こうして妾が蜂蜜水を飲んでおつても妾が預かる領内では民が苦しんでおる。

妾は自分が情けないのじゃ。

甘い筈の蜂蜜水が苦い……。

それでも妾に出来る事はこうして欲深い者達を惹き付けておく事くらいじゃ。

それが泉達の為になるなら妾はそれをこなすだけ。

ただ……それでも寂しい事には変わりはないがの。

じゃが妾は泉の主じゃ。

泉に出来る事はただ泉達を信じて待つ事のみ。

そして必ずや泉に妾の成長を見せつけてやるのじゃ！

S I D E 袁術 E N D

S I D E 孫策

母様の…私達の地に袁術ちゃんが来た。

袁術ちゃんが連れてくる兵1万に対して私達に従う兵は3千。

この半年で兵は5千にまで回復したけれど、私達には袁術ちゃんに従うしか残された道は無かったわ。

冥琳も祭も今は雌伏の時だという事で私達の意見は一致している。

袁術ちゃんに会ったけど袁術ちゃんはまさにお子様そのもの。

信じられないけど大將軍だというあの張勳と一緒に蜂蜜水を飲んでるばかりで民の事なんか考えていやいな。

私達孫呉の民をそんなに扱うなんて許せるものじゃないわ。

袁術ちゃんの部下の沮授と田豊って子が頑張っているお陰でひどい事にはなっていないみたいだけ。

あれ程有能なら私達が独立したら引き抜こうかしら？

あの二人にしても報いてくれない袁術ちゃんに仕えるよりは私達に
仕えた方がいいだろうしね。

後袁術ちゃんの親衛隊の紀霊っていう子も中々のものだわ。

私や祭には及ばないだろうけどこの間仕官した思春と互角くらいの
力はあるそうね。

本当に袁術ちゃんにはもったいないわ。

袁術ちゃんに従ってからというものの賊退治とかに動かされていた
私達だけど一応袁術ちゃんから報酬は渡されている。

そのお陰で兵も増えてきたし、思春や明命、穩といった新しい人材
も加わってきたわ。

本当に袁術ちゃんてば脇が甘いわよね。

待っててね、母様。

いつか必ず袁術ちゃんから私達孫呉の大地を取り戻すから。

ただ気になるのは最近感じる不安ね。

何だか少し嫌な予感がするのよ。

一体何なのかしら？

S I D E 孫策 E N D

S I D E 張勳

「ぶは〜。やはり蜂蜜水は美味なのじゃ〜！」

私の前では美味しそうに蜂蜜水を飲むお嬢様。

う〜ん、やっぱりお嬢様ってば可愛い！

洛陽でこの無邪気な笑顔に一目惚れしちゃったんですね〜。

ああ、お嬢様の笑顔をもっと見てみたい、その困った顔や歪んだ顔を見てみたいって。

上手く袁家に仕える事は出来たけど、お嬢様の教育係だった楽就さんの守りが堅いこと堅いこと。

中々お嬢様に近づけて貰えなかったんですね。

任される仕事も退屈でしかもお嬢様の側にいられないですし。

南陽に来る途中で立ち寄った村でお嬢様の酔った所を見れたのは良かったですけど。

ただ楽就さんもお嬢様を放って置いて賊退治に行くなんて何を考えているんでしょうね？

南陽に着いてからも楽就様が邪魔だったんですけど、その楽就さんがお嬢様に嫌われた時は嬉しかったですね。

お嬢様と楽就さんが劉表さんに挨拶に行ったときに楽就さんがお嬢様に無理矢理劉表様に頭を下げさせたらいいですけど、そうしたら今まで我慢していたお嬢様が爆発して帰って来るなり楽就さんを牢に入れちゃったんですから。

それを止めようとした上の人達も纏めて牢に入る事になっちゃって。

これ幸いと私がお嬢様に近づく事が出来たから別にいいんですけどね？

そしてようやく側に仕える事の出来たお嬢様が可愛いこと可愛いこと。

ふふふ、今まで楽就さんが厳しくしていた分私が目一杯甘やかしてあげますからね。

結局お嬢様が寿春に移る事になってもお嬢様の怒りは晴れなくて楽就さん達は降格の上でお留守番。

少し小うるさい田豊さんと沮授さんは一緒にこっちにきましたけど二人はもう私の部下です。

せいぜい面倒くさい事の肩代わりをして貰いましょうか。

そうしたら私はその分お嬢様の側にいられるし

そういえば孫策さんたちがやたら兵を集めてるみたいですけど……別にいいですよ。

まさか反乱なんてしないでしょ、したらたで困ったお嬢様の顔が見れていいです。

そんな事より商人の陳紀さんに新しい蜂蜜の注文をしないと！

第16話 雌伏（後書き）

今回の話は賛否両論あると思います。

何のご意見があれば真摯に受け取りますので感想の方へどうぞ。

番外編1 奇人（前書き）

ええ、すみません。

今回はギャグパートです。

今までのストーリーとは一風変わった作風になっております。

大幅に改稿しました。

番外編1 奇人

SIDE 樂就

俺が南陽の執務室でいつものように真里と政務をしていると突然外で大勢が何やら騒いでる声が聞こえた。

「……………またか」

「……………みたいやね」

もはやこの半年で聞き慣れてしまった光景に俺と真里は揃って溜め息を吐く。

もう聞いただけで大凡の原因の予想がついてしまう事が恨めしい。

「真里、ちよつと行ってくるから後は頼む」

「了解や、師匠」

真里は俺の思考法を真綿のように吸収し、今では事業等の補佐が完全に務まるようにまでなっている。

真里に後を託した俺は席から立ち上がって部屋を出た。

美羽と別れてからあと2月で1年になる。

寝る間も惜しんでいずれ来たる日の為に準備を進めてきたお陰で仕

込みは上々だ。

立ち上げた事業は大半が軌道に乗った。

雇用の増大によって民に富が回るようになり、それに従って俺達の資金も充実してきた。

領内の開発も進み、それに伴って流民の受け入れも順調に始まっている。

常備兵は既に4万を揃えた。

しかも防具や武器、それに軍馬等の備品もすっかりと揃えて訓練を課した精鋭軍だ。

普段は訓練と土木事業を交互に行っているお陰で労働力としても活用する事が出来ている。

この1年近くで文聘・陳蘭・雷薄を初めとした一軍の将とはいかないまでも一隊を率いるには十分な力を持った者を兵の中から抜擢した。

功績や能力を公正に評価する事を示したために兵の向上心は高く、民の暮らしを守る軍であるという認識を持たせている事と相まって士気の高い軍隊となっている。

既に雄を通して寿春の美羽達と一気に豪族や親族達を締め上げる為の段取りも決めてあり、その為の準備も進めている。

そう、殆どのが順調なのだ。

……今俺の頭を悩ませているこの日常となった騒動の存在以外は。
俺が政庁を出て騒ぐ声を頼りに兵舎の近くまで行くと兵舎の近くに
作られている建物から黒い煙が吹き出しており、その周りを遠巻き
にして兵が囲んでいた。

兵の中にこの半年で良く見知った顔を見つけた俺はそいつに話しか
ける。

「文仲業、大体の予想はつくが一体何があった？」

「あ、守路様。いつも通り兵の訓練をしていたらまた研究所から火
が出たんです。ただ、中に踏み込むにも……月英さんはアレですか
ら……」

いかにも生真面目そうな印象受けるこの男は文聘、字を仲業といっ
て梁綱殿が推薦した指揮官の一人だ。

文聘からの報告に俺は自分の予想が当たっていた事に頭痛を感じる。

「分かった。どうせいつもの事だ。俺が対処するが念のため消火の
用意をしておけ」

「はい！了解しました！」

俺の指示に従って兵を纏める文聘を尻目に俺は件の研究所に足を向
ける。

未だに黒い煙を吹き続けている建物の入り口の前に立った俺は大き

く息を吸い込むと……

「こら烈！！！貴様今度は何をやりやがった！！！？？」

大声とともに一気に扉を蹴破り建物に飛び込んだ。

我ながら荒っぽいとは思うがこつも毎回問題を起こされるとこちらもたまったものではない。

「はーはっはっは！！成功したぞ！！これこそまさに芸術だ！！」

建物に入った俺の目に映ったのは建物の中で勢いよく燃えさかる炎とそれを見ながら高笑いをする男の姿だった。

あれ程俺が大声を出して扉を蹴破ったというのに奴が俺に気付いている様子は全くない。

というよりもこんな室内で火が勢いよく燃えているというのに平然と高笑いを浮かべるか！！！？？

「おい烈！！お前何をしているんだ！？？」

「おお！我が友、泉君！見たまえ、ついに君が言っていた火炎瓶が完成したのだよ！」

ようやく俺に気付いたのか高笑いを浮かべていた男が俺を振り返る。

紺色の髪を無造作に伸ばし、端正な顔に無精髭を生やして白い衣を纏ったこの男は黄奇、字を月英、真名は烈といって半年前にふらりと俺達の前に現れた男だ。

黄月英と言えば三国志で諸葛孔明の妻となったと言われている女性で様々な発明をしたと言われている。

こいつは男だが発明家である事は同じだった。

荊州州牧・劉景升殿の遠縁に当たる烈は美羽が送った指南魚に好奇心を刺激されたらしく、景升殿の紹介状を持って俺に会いに来た。

俺も黄月英という名前に興味を惹かれて烈に会う事にしたのだが、今ではそれを少し後悔している。

烈はよく言えば生粋の科学者であり発明家、悪く言ってしまうえば発明バカだ。

俺から指南魚の事を根掘り葉掘り聞きだそうとした烈は、機密を他人に話すわけにはいかないと主張した俺に対して真名を差し出して仕官を希望してきた。

全く引き下がろうとしないので俺は仕方なしに烈を専属の技術職人として雇う事にしたのだが、こいつはそれをあっさりと承諾。

そして俺が養蜂の為に考えていた遠心分離器の話をするとなんを簡単に作り上げてしまったのだ。

その才能を見た俺は、指南魚等の開発以来俺に注目が集まる事を危惧していた事もあって烈を責任者にして技術研究所を設立する事にしたのだが……。

そこに誤算が生じた。

烈は研究バカであると同時に火焰マニアだったのだ。

どういう仕組みなのかは分からないが別に燃えるような仕掛けではないのにも関わらず烈の作るモノは最後には必ず火を吹き、しかも本人がそれを喜んでいる。

その為烈は必ず2日か3日に一度はこうした騒動を起こす。

烈が作った自立式猫熊人形バンタロボが研究所を飛び出して、練兵場で口と手から火を放ちながら兵達と激戦を繰り広げた事は記憶に新しい。

その時は騒ぎを聞きつけて駆けつけた俺が双薙刀で人形を一気に切り刻んだ為になんとか収まったが。

そして夕子の悪い事に烈に悪気は全く無く、烈は斬新な発想（と思われる）をする俺に敬意を払っている。

そんなどこか憎めないところがある烈を俺は無碍に扱う事も出来ず、気付いたら俺は烈に真名を許してしまっていた。

そう、烈は悪い奴ではないのだ。

ただ問題なのは……。

「笑っている場合か！！部屋に火が回っているんだぞ！？いい加減に常識を弁えろ！！」

こいつの頭から一般常識というものが悉く抜け落ちていることだ！！

「火炎瓶が完成したのは分かるが何で部屋が燃えているんだ!？」

「何を言っているのだね、泉君？完成したものは試さなくては意味がないではないか！」

怒る俺をよそに部屋で勢いよく炎が舞う中で烈は自信満々に言い切りやがった。

成る程、どうしてこうなったか理解出来た。

以前俺が少し前に話した火炎瓶の話を聞いて作ってみようと思いたったのだろう。

烈は生粋の火焰マニアだ、よく考えたら簡単に想像がつく。

そんな烈の前でうっかり火炎瓶の事を話してしまった数日前の俺を殴り飛ばしたい。

聞いただけでそれを作ってしまったる烈の才能は凄まじいし、新しい兵器が出来た事は良い事だ。

だが……！

「それを研究所内で試してんじゃねえ!!回りをよく見る!!」

外で試せば良いものを何故わざわざ室内で実験するか、この男は!？

思わず俺が烈を張り倒すと烈はようやく周囲の様子に気付く。

「む?そういえば少し暑いな。少し火力が強かったか」

「そう言う問題じゃない!!」

ここに至っても烈はピントがズレている。

少し暑いとかいう問題じゃねえよ!!

本当にこいつの相手をするのは疲れる……!!

「いいからさつさと火を消すぞ! 水は何処だ!？」

俺はもう烈を無視して火を消そうとするがその俺の目に何か嫌なものに移った。

それは燃えさかる火の近くにあつた何個かの小さな壺だった。

「……おい、烈」

「何かね、我が友、泉君」

俺はぎこちなく首を烈に向ける。

「あの燃えている火の側に置いてある小さい壺はなんだ?」

「あれかね? あれは実験で使わなかった分の壺だな」

いや、落ち着くんだ俺。

まだそうと決まった訳じゃない。

何気なく言う烈に対して俺は浮かんでくる嫌な予想を何とか押さえ込む。

「念の為に聞くが……あれは空なんだよな？」

「何を言っているのだね？私は『実験で使わなかった』と言った筈だよ？しっかりとした完成品に決まっているではないか！」

「……」

ただでさえ今の俺は美羽の為に領内を整備するのに忙しい。

それなのにこの半年問題を起こし続けているコイツの後始末をずっとし続けて。

その度に出る被害の補填に頭を悩ませてきて。

それで日々増えていく仕事に対応して。

俺頑張ったよな？

俺もうゴールしても大丈夫だよな？

目の前で胸を張る烈に対して俺の中の何かがキレた。

「この大馬鹿野郎！！！！！！」

この後の事は俺はよく覚えていない。

気付いたら俺は白目を剥いて気絶した烈を抱えて研究所の外にいた。

研究所だった建物は猛火につつまれて手を付ける間もなく消失。

文聘が兵を指揮して素早く消火したために周囲への大きな被害はなかった。

その日から丸一日医務室で寝込んでいた白衣を着た人物と被害に伴う費用に頭を抱える俺と真里を除けば。

ただこの事件が火炎瓶の威力を証明する事ともなり、袁術軍における新兵器の採用が決まった事は補足しておく。

「我が友、泉君。気が付いたら頭に大きな腫れがあつて痛いのだが、何か知らないかね？」

「知るか!!!」

番外編1 奇人（後書き）

というわけで楽就君の災難とブチキレの話です。

ギャグが苦手ながらこんな話にしてしまいました。

まあ色々とおかしくチートな恋姫の世界ですが、作者が一番チートと思うのは李典。

機械式ドリルとかどれだけチートなのかと。

しかも動力不明ですし。

アレに対抗するとしたらこちらも技術者を出すしかないわけです。

ちなみに月英のモデルは白い悪魔のマッドさんです。

第17話 志願（前書き）

6月19日 大修正をしました。

どうも出来に納得がいかなかったもので、かなり読みやすくなったとは思いますが。

第17話 志願

SIDE 樂就

美羽と約束した1年まで後1月となった。

計画の詳細は既に出来上がっており、後は実行に移すだけという状態になっている。

流石に蒼香、翠香、真里が詳細を詰めただけあり、その策は俺から見て文句のつけようがないのもだった。

だが不安がないというわけではない。

真里達には話していないが俺の中ではある事が引つかかっている。

計画の実行まであと数日となった日の夜、俺は南陽の政庁にある俺の自室でその不安について頭を悩ませていた。

「…………やはり人手不足だな」

俺の頭に浮かぶのは当日における計画の詳細。

既に何度も頭の中でシミュレーションしてみたのだが、やはり人材………将の不足が気にかかる。

俺らの現有兵力は4万。

これは南陽だけの数字で寿春にいる兵を考えればその兵力は6万を軽く超える。

ただ寿春の兵については南陽の兵に比べて錬度が低い。

親衛隊隊長である華漣は將軍というわけではないので軍全体に関する指揮権は持っていない為に華漣の指揮下にあるのは直屬兵5千のみしかない。

他の兵の指揮を担当しているのは張勲なので寿春にいる戦力は華漣の5千のみと考えていいだろう。

計画では南陽の4万の兵のうち最精鋭5千を俺が率いて華漣の5千とともに寿春を制圧。

そして2万の兵を李雪が率いて後詰となり、1万5千の兵は南陽に残って真里の指揮下で南陽の防衛に当たる事となっている。

一見すればこちらの兵力は圧倒的であり寿春を問題無く制する事が出来るように思える。

しかし孫家が絡んだ時の事を考えれば別だ。

雄の報告によれば現在孫家にいる将は孫策、孫権、周瑜、黄蓋、韓当、程普、陸遜、甘寧、周泰だという。

このうち軍師である周瑜と陸遜は除いたとしてもこちらと比べて将が多い。

計画では孫呉の軍勢は賊討伐という名目で当日は寿春から出す事になってはいるが、孫策が将全員を引き連れて賊退治に行く筈がない。

孫権が寿春の城にいる事を考えたら孫権の護衛だという甘寧は少なくとも残るであろうし、その他にも何人が将を残すだろう。

多勢に無勢という状況において計画中に奴らが動くとは考えづらいが、物事に絶対はない。

そして奴らが動き出した時の事を考えるとこちらは将の数が絶対的に足りないのだ。

豪族達を一網打尽にするには豪族達に警戒心を抱かせてはならない。

寿春の制圧を俺が率いる5千と華漣の5千で行うのは豪族達を油断させる為であるし、俺の5千についても俺が実際に寿春に引き連れていくのは2千のみだ。

残りの3千については李豊殿と梁綱殿が半数ずつ率いて既に寿春に潜伏してもらっている。

李雪が率いる2万については寿春制圧後に豪族や孫策達を威圧する為だが、万以上の兵を率いる事が出来るのは南陽では俺と漢升殿を除けば李雪しかいないので李雪は外せない。

つまり当日は俺と華漣、李豊殿、梁綱殿のみで寿春に対処しなくてはならないのだ。

美羽の護衛には雄がつく事になっているから別にしても、豪族達の

捕縛と寿春の豪族達の家の差し押さえ、町の治安維持を考えるとかなりきつい事は明白だ。

これに孫家の武将への対処が加われば手が回らなくなってしまふ。

しかも李豊殿、梁綱殿は経験こそ豊かで統率力はそれなりにあるが、武自体はそれほどではない。

この世界では将の能力が圧倒的に高く、孫家が抱える後世の名を残した将達に対処するには李豊殿達では難しいと言わざるを得ない。

やはりここはあと一人でも腕の立つ将が欲しいところだ。

そう何度も辿り着いた結論に俺が頭を悩ませている時、俺は誰かが俺の部屋に近づいてくる気配を感じ取った。

その気配の主は俺の部屋の前で立ち止まったようだ。

どうやら俺に用があるらしい。

「守路さん、少しよろしいでしょうか？」

この1年で聞きなれた穏やかな声の主は……漢升殿か。

俺は座っていた椅子から立ち上がると部屋の扉に向かって扉を開ける。

扉の外には俺の予想通り客将である漢升殿が立っていた。

「漢升殿、俺に何か御用でも？」

「はい、折り入ってお願いしたい事がありまして」

漢升殿が俺に頼みたい事？

普段控え目な漢升殿の口から出た珍しい言葉に俺は疑問を感じながらも漢升殿を部屋に入れる。

そして部屋の隅においてある応対用の座席に俺と漢升殿は向かい合って座った。

「何もご用意できずにすみません」

「いえ、突然訪問したのは私の方ですから」

漢升殿と相對した俺は漢升殿が普段と違って何か決意を込めた目をしている事に気付いた。

漢升殿は普段は穏やかで柔らかい雰囲気を身に纏っているが、今の漢升殿からはまるで戦場に臨む時のような何か張りつめたものを感じる。

漢升殿のような方がこれ程にまで真剣になるお願いとは一体何だろうか？

「それで漢升殿、私に頼み事があるというのは？」

とにかく話を切り出さなくては始まらない。

「単刀直入に申し上げます。私をこの次の寿春への遠征に加えて頂

「けませんか？お願いします」

漢升殿は静かに俺に向けて頭を下げるが、俺はなんとか顔には出さなかつたものの内心かなりの焦りを感じていた。

情報というものは何処から洩れるか分からない。

今回の計画について詳細を知っている人物は俺ら上層部の他は文聘達のような現場レベルの指揮官しかいない筈だ。

それ以外の人物には今回の出陣について大掛かりな賊の討伐として説明している。

無論客将で本来景升殿に配下である漢升殿をこちらに巻き込むわけにはいかないので漢升殿も同様だ。

それが何故漢升殿に漏れている？

誰かが漏らしたのか！？

「……一体何のことでしょうか？」

何とか動揺を抑えつつ言葉を絞り出すも、俺の声は固まっていた。

その俺の様子を見た漢升殿は穏やかな笑みを浮かべる。

「そう固まらずとも大丈夫ですわ。私は誰かからこの話を聞いたというわけではありません。賊の討伐にはは大掛かり過ぎる兵の準備、そしてここ最近の守路殿達の慌ただしさと姿を消した李豊殿達の事を考えれば自然と分かることです」

漢升殿の答えを聞いた俺は内心安堵した。

誰かから洩れたわけではなかったのか。

これがもし誰かから洩れていたとしたら最悪計画を中止しなければならなかったところだ。

漢升殿には南陽に来た時には詳細とまではいかないまでも策の事は話していた。

だからこそ漢升殿は一連の事の真相に辿りつけたのだろう。

「成程。しかし何故漢升殿はこの作戦に参加したいとお思いのなされたので？客将である漢升殿にはここまで足を踏み入れる義理はないと思うのですが」

漢升殿は客将だ。

これは俺達内部の問題であり、基本的な立場としては部外者であり漢升殿が立ち入るべき問題ではない。

漢升殿ならそれくらいの事は理解している筈なのに何故申し入れたのだろうか？

「公路さんの道を見極める為です」

「見極める？」

漢升殿の口から出た意外な言葉に俺は顔を顰めた。

見極めるとは随分と大げさな言葉だ。

まるで主を探しているかのような……まさか!?

ある可能性に思い至った俺はハツとして漢升殿の顔を見る。

「守路さんのご想像の通りです。私はここに来る時、智遥様より公路さんを見極めるように言われておりました。そして私が公路さんに主としての器を見たならばそのままお任せよ……と」

成程な、食えない爺さんだ。

あっさりと漢升殿を客将として寄こした時には驚いたが……美羽の器を測っていたのか。

多分漢升殿は本気で美羽を見極めようとしているのだろう。

今回の事態で美羽が漢升殿の目に叶えば漢升殿は迷いなく美羽を主として戴くつもりだ。

その漢升殿の判断を見て景升殿は俺達の事を判断する。

そして美羽が漢升殿の目に叶わなかった時は……。

これは博打だ。

本来美羽を支えるべき俺が判断して良いような問題ではない。

だがここを乗り越えた時に俺達が手にする事が出来るものは余りに

も大きい。

但しそれを得るには美羽が漢升殿に認められる必要がある。

美羽は果たして漢升殿の目に叶うのだろうか？

……考えるまでもないか。

美羽の事を俺自身が信じられないでどうする。

よしんばもしもの事になったとしてもその時は俺が全力で美羽を守ればいいだけの話だ。

「成程、今回の事は美羽の資質を見極めるのに最適という事ですか？」

「はい。不躓なお願いであるとは重々承知ですが、どうかお願い出来ないでしょうか？」

俺に向かって再び頭を下げる漢升殿の目は並々ならない気迫が籠っていた。

だがその姿を見るまでもなく俺の心は既に決まっている。

しかし漢升殿には悪いがこちらも一つ試させて貰うか。

「ですが漢升殿が参加なさる場合、璃々ちゃんはここに残る事となりますが？」

当然の事ではあるがまだ幼い漢升殿の娘である璃々を戦場に連れて

いくわけにはいかない。

そうである以上璃々はこちらに残る真里達が預かる事となる。

漢升殿が娘である璃々を深く愛していることは周知の事実であり、これは人質に等しい。

尤もこちらは人質として扱う気は毛頭ないが。

「見縊つて頂いては困りますわ。私は確かに璃々の母親ですが、それ以前に一人の武人です。その覚悟も無しにこれまで生きてきたわけではありません」

静かに、だが強く言い切った漢升殿の目には決然とした光が宿っている。

……これは失礼だったな。

「失礼しました。分かりました、漢升殿には我らの計画に是非加わって頂きましょう。漢升殿については俺と寿春へ同行して貰う事になりますか？」

俺が頭を下げた無礼を詫びると漢升殿はにっこりと微笑む。

「こちらこそ失礼しました。ご無理な願いを聞き届けて頂いて感謝します」

漢升殿は俺にもう一度頭を下げた後で席を立ち、俺の部屋から出て行った。

俺は漢升殿を見送ったあとで部屋の窓の前に移動する。

いきなりの漢升殿の訪問だったがこれによって得たものは大きい。

懸案事項だった将の不足も漢升殿程の武人が加わってくれば一気に解決する。

美羽、1年という約束何とか守る事が出来そうだ。

この策……絶対に成功させるぞ！！

S I D E 樂就 E N D

S I D E 周瑜

「……ぶっ」

「どうしたんだ、雪蓮？」

私が雪蓮と今揚州各所から上がってきた現在の状況についての報告を整理していると雪蓮が頬を膨らませた。

その雪蓮の表情自体はよくあるものなので大体の想像はつくのだが。

「だってさあ、少し前までは中々順調だったのに最近何だか集まりが悪いじゃない？」

口を尖らせながら雪蓮が愚痴を言うが確かに同感だ。

我らが袁術の支配下に甘んじる事になって以来密かに力を蓄えてきたが、最近になって有力な豪族達や兵の集まりが悪くなってきている。

半年程前はこの分なら直ぐ1万を超える兵が集まるかと思ったのだが、予想に反して兵の数は1万に届いていない。

いや、人数自体は集まるのだがその兵を養える程の元手が集まらないのだ。

思った以上の豪族達の動きが鈍い。

「確かにそうだが焦りは禁物だぞ、雪蓮」

「それは分かっているわよ、冥琳。でもさあ、この分だと孫呉の復興には時間がかかりそうよねえ……」

私にも焦りが無いわけではないが、軍師が焦ればそれは破滅につながる。

ここは少しずつでも地道に力を蓄える以外に道はないのだ。

幸いな事に袁術の下での私達の扱いはそれ程悪くは無い。

袁術の配下に入った事で扱き使われる事になる事を覚悟していたのだが。

賊討伐には駆り出されるが袁術から資金は出るし、賊の数が多い時には兵も貸し出される。

そのおかげで我らは着実に力をつける事が出来てはいるのだ。

雪蓮もその辺りの事は理解出来ているからこそこのように呑気な愚痴を言っているのだろう。

全く袁術が思いのほか莫迦で助かった。

「とにかく今は力を溜める事だ。そうすればいつか必ず好機は来る」

「まあ、本当に冥琳は真面目よねえ……。あ、あ、あの子達がこちについてくれればなあ……」

雪蓮は文句は言うが私だって好きで真面目になっただけではない。

赤蓮様もそうだったが孫呉には自由過ぎる奴が多すぎるんだ！

雪蓮もそうだが祭殿もいつも酒を呑んでは騒いでいる。

私ぐらい真面目にやらないと孫呉が立ち行かない。

蓮華様が真面目な事が唯一の救いだ。

それにしてもあの子達か。

確かに雪蓮の言うところは尤もだな。

袁術の家臣で田豊、沮授、紀霊の3人。

彼女達は袁術の家臣とは信じられない程優秀だ。

親衛隊隊長の紀霊は雪蓮や祭殿程でないにしても武の腕は立つし、
兵の統率も中々のもの。

沮授と田豊は位こそ高くないものの、袁術や張勳の無茶な命令を適
当に聞きつつ政を民の生活に支障が出ないように上手く切り盛りし
ている。

しかしその3人がその実問題なのだ。

3人が上手くやっているおかげで袁術は暗君だというのに民からの
不満があまり出ていない。

その為に思ったように民が孫呉を支持しないのだ。

あの3人をこちらに引き込めないかと誘いの手を伸ばしてもみたが
3人共のらりくらりと避けるばかり。

まあ今のところ袁術と我らの力の差が大きい事は確かだから理解は出来るが。

全く、袁術の事だから大して考えもせずにあの3人を役職に就けたんだろつが本当に悪運が強い…。

ん？

待て、悪運が強い？

本当に3人が今の役職に就いているのは偶々なのか？

紀霊は親衛隊隊長で將軍ではないが、親衛隊は一番近くで袁術を守る事が出来る地位だ。

田豊と沮授は位こそ高くはないが、政務の実行役と言っていい中級官吏の役職に就いている。

まるで狙ったように。

その考えに至った瞬間に私は自分の顔から血の気が引いた事を感じた。

確かに袁術は一見莫迦に見える。

この1年近くの間いつも城で練り広げられている張勳との遣り取りを誰もがそう感じるだろう。

そして袁術の周りにいるのは張勳と豪族、汚職官吏達。

だが見方を変えれば強欲な者達の注目は操りやすそうな袁術に向かっ
つていて実際の政務をする田豊達には横槍があまり入っていない！
もし……これがフリだとしたら？

いや、しかし……。

袁術は普段いつも張勳とふざけながら蜂蜜水とやらを飲むばかり。

あれは本当に演技なのか？

「……りん！冥琳てば！！！」

「ん、ああ、どうしたんだ、雪蓮？」

名を呼ばれる声に気付いて顔を上げる雪蓮が私の顔を心配そうに覗
き込んでいた。

「どうしたんだじゃないわよ。冥琳たらいきなり黙り込んでしまって
……私の話聞いてた？」

どうやら思考に集中するあまり周囲が一切見えなくなっていたよう
だ。

「いや、済まない。考え事をしていたんだ。で、話とは何だ？」

「そう、ならいいけど……。今日蓮華から聞いたんだけど近々南陽
から袁術ちゃんが呼んだ奴が来るらしいわよ？」

私が聞きなおすと雪蓮は気を取り直して話す。

蓮華様は今袁術の城に住んでいる。

近頃になって袁術が話し相手にといい名目で要求してきた為だ。

おそらく我らが力を付けてきた事を警戒した誰かが袁術に入れ知恵したのだからと思うが。

それでも雪蓮が城に行けば会えるので軟禁といったところか。

そういえば今日の昼間雪蓮は蓮華様に会いに行っていたな。

その蓮華様から聞いたというのは恐らく城内で噂されている話なのだろう。

「ほう、でその呼ばれた者とは？」

「確か……樂就っていう奴らしいわね」

が、樂就だと！？

雪蓮の口から出てきた思わぬ名に私は思わず手にしていた資料を持ったまま立ち上がってしまった。

それ程にまで樂就の持つ名は大きい。

樂就とは張勳の前に袁術の側に仕えていた者の名だ。

以前袁術の陣営でかなりの影響力を持つてはいたが、袁術が南陽にいた頃袁術の怒りをかけて牢に放り込まれた後降格されたと聞く。

その後も袁術の怒りは解けずと同じく牢に入れられていた田豊、沮授が牢を出た後寿春に来たにも関わらず楽就は南陽に残されたようだ。

南陽を今治めているのは袁術の一族で元女官の袁渙という者らしいが、恐らく南陽の町を支配しているのは楽就だ。

今南陽はかなり発展していると聞く。

私も南陽について詳しく調べようと思ったのだが、中々情報が入ってこない。

何人が間諜を送ったのだが何者かに殆どが消されている。

つまり誰かがこちらの手の者に気付いて潰している事になる。

だが元女官である袁渙に内政にしても諜報にしてもそれ程の手腕があるとは思えない。

だとすればそれを行ったのは楽就の可能性が高い。

その楽就が寿春に呼ばれた。

それが意味するところは……！！

「冥琳、その楽就っていつ奴の事何か知っているの？」

「ああ。雪蓮、楽就が寿春に来たら何か起きるぞ」

「へえ……冥琳にしては随分と言ってる事が曖昧ね？」

私の顔が真剣になっていている事を感じ取った雪蓮がそれまで纏っていた気楽な雰囲気をつ込め、伶俐な顔になる。

確かに雪蓮の言うとおりだ。

しかしそうとしか言いようがないのだ。

軍師としては失格かもしれないが、何かが起こるとしか言いようがない。

普通に考えたら袁術が生意気な部下をいたぶる為に呼びよせたというところだ。

だがもし私の推測が正しかったとしたら……。

「何かとしか言いようがない。とにかく今はなるべく多くの情報を集めるしかない」

「そう……なら明命を呼び戻さないかね」

断言する私の言葉に雪蓮は目を細めた。

即断即決出来る所は雪蓮の長所だ。

「ああ、私は穏と相談してくる」

穏ならば私が気付かない点に気付くかもしれない。

そう考えた私は穩と相談するために雪蓮の部屋を後にした。

一体何を考えている……袁術、樂就！

第17話 志願（後書き）

どうも冥琳は動かさにくいです。

第18話 役者（前書き）

段々黒くなって参りました。

美羽様が。

第18話 役者

SIDE 紀霊

普通に生きて普通に死ぬ。

私は少し前までこれが私の人生なんだって思ってた。

私が生まれたのは至って普通の農村の普通の農家。

村に普通にいるような女の子として生まれた私は容姿も普通なら性格も至って普通。

……顔のソバカスは少し気になるけどね？

そんな普通の農村の女の子として生まれ育った私は気付いたらもう普通である事が当たり前になっていたの。

少し前までそれが気になってた時期もあったけどもう慣れちゃった。

でもそんな普通の私には一つだけ特技があったんだ。

それは力が強い事。

村の大人が持ち上がられないような岩も小さい頃から私は簡単に持ち上げる事が出来た。

今私が使っている三尖刀の重さも50斤一（約11キロ）を軽く超

えていて普通の兵隊さんには使えないらしいんだ。

だからなのかな、将来の事について考えた時私はこの力を生かすっていう生き方に行き着いたんだよね。

農家の次女に生まれた私にはどこかの家に嫁入りするか、自分で生計を立てる必要があったから。

そして村にいる元兵士だったおじさんから武器に扱いを習っていた私は村を出て隊商の人とかを護衛するいわゆる用心棒の仕事をするようになったんだ。

用心棒としての私の生活はかなり順調だったんだよ？

賊が来ても何故か皆私が居る事に気付かないから。

普通に賊の頭に近づいて普通に三尖刀で倒してそれで終わり。

私がいると被害が少ないからっていうことで私は用心棒としてはそこそこ人気があったんだよね。

そんな生活に慣れてきた頃に出会ったのが真里姉と李雪姉。

同じ隊商を護衛する事になって知り合った二人とは何かと気が合ってお仕事でもよく話をするようになったの。

いろんな所を旅してきた二人の話は凄く面白かったしね。

その二人が荊州に行くっていうから途中にある私の村に誘ったんだけど……まさかそれが私の転機になるとは思わなかったな。

李雪姉と真里姉が村に泊まった後で賊が村を襲ってきて仕方が無く村を守る為に李雪姉達と一緒に戦って……危ないところを美羽様達に助けられた。

それが縁で美羽様に仕える事になったんだけど……まさか私が太守様の親衛隊隊長なんてする事になるとは思わなかったよ。

普通の村の女の子からしたら凄い出世だもん。

でもさ、人間ってあまり分を超えた事なんてするもんじゃないよね？分を超えるって事は自分が立ち入れないような世界に踏み入る事になるんだから。

今の私のように……。

「……というわけで南陽の樂就には袁太守様に刃向かう気配があるかと思われませう。是非ともここは樂就を罰するべきです！」

今私が居るのは寿春の町の城にある謁見の間。

美羽様が座る玉座の直ぐ横に立っている私の目の前には村で育った

私から見たら信じられない程豪華な服を着た人達が部屋の左右に分かれてずらっと並んでいる。

そして美羽様の前で跪いているのは同じように豪華な服を身に纏った太った男の人。

確か韓胤さんとかいう名の人だったっけ？

それでその韓胤さんは泉様が美羽様に謀反を企んでいるって進言しているところ。

なんていうか……事情を知っている私から見たら韓胤さんは滑稽という以外何でもない。

あの泉様が美羽様に謀反するなんて絶対にありえないし。

多分これって讒言っていうやつなんだろうね。

そして韓胤さんの進言？を聞いた美羽様は横の張勳さんに顔を向けた。

「七乃お、それでこやつは一体何を言っておるのじゃ？」

「えつとお、つまり樂就さんがお嬢様に逆らおうとしているからやつつけちゃいましてことですね」

「何じゃと！？樂就め、許せんじゃ！」

なんとというか本当に美羽様って演技が上手いよね。

私は事情を知っているけど他の人が見たら絶対にこれが演技だなんて信じられないもん。

お馬鹿にしか見えない美羽様が実は頭がいいだなんて思わないよね。

「その通りです！すぐさま楽就に罰を！」

「そのような不屈き者許しておくべきではございません！」

美羽様が泉様について怒ったふりをした後で部屋に響くのは賛成の嵐。

皆美羽様の身を案じてとか、泉様の謀反を怒ってとか考えているわけじゃないことは私にも分かる。

だって皆目が欲でギラついているもん。

こんな大人にはなりたくないよね。

「お待ち下さい！」

賛成の声が響く中で出てきたのは蒼香さんと翠香さん。

二人共私はおろか美羽様より小さいけど凄く頭が良くて美羽様が信頼してる軍師さんなんだよね。

私も二人に勉強を教えて貰っていてお世話になってるの。

「まだ楽守路殿が謀反を企んでいるという証拠はありません！」

「そうですね！ここは楽守路殿を呼びよせ、真実を確認するべきですよ！」

蒼香さん達の口から出たのは泉様を擁護する言葉。

ただど何かがおかしいんだよね…。

その二人が反対の意見を表明すると同時に広間には怒号が響く。

「黙れ中級官吏風情が！」

「小娘共は引っ込んでおれ！」

激しく蒼香さん達を責めるのは太ったオジサン達。

そんな事言ったら官吏でもないのにここにいるオジサン達はどんなるんだらう？

たちまちの内に謁見の間は騒がしくなった。

もう收拾がつかなくなったかと思った時に張勲さんが私に目を向けてきた。

はあ、仕方が無いなあ……。

「静まれ！太守様の御前である！」

私が大声を上げると広間が一瞬で静まった。

もうこれにも慣れてきた気がする。

元から声は大きい方だったけど最近前よりも声が響くようになったなあ…。

「はいはい、皆さんそれぐらいにして下さいね〜、で、お嬢様どうしますか？」

他の人が静まった事を確認して話を進める張勲さん。

この人こういうところは有能なんだよね。

で、美羽様はと言えば……

「うむ、良く分からぬがとにかく楽就を呼びよせるのじゃ！」

「……とお嬢様は仰せですのでとりあえず楽就さんと呼ぶっていうことでいいですね？」

相も変わらずお馬鹿のふり。

張勲さんが纏めると賛成していた人達は不承不承といったかんじで頷く。

これで泉様を寿春に呼ぶ事が決まったんだけど……なんだかこれって話が出来過ぎてないかな？

ついこの間泉様から全部の準備が整ったっていう連絡があったばかりだし。

もしかしてこれって……？

少し私が考え込んでいると美羽様がいかにもさりげなくといった感じで張勳さんを見やった。

「うゝむ、じゃがあの樂就の奴をただ呼ぶというのも癪じゃのう。七乃お、何か樂就の奴を懲らしめる手はないかのお？」

この言葉を聞いた私はピンときた。

ああ、またいつものアレが始まるんだって。

「樂就さんへの嫌がらせですかぁ？もう、お嬢様ったら意地悪なんですからぁ」

「妾はあの樂就の奴が嫌いなのだじゃ！いつもグダグダと妾に文句を言っていて煩いのじゃ！」

「確かに樂就さんは煩いですから邪魔ですよねえ。今回もお嬢様が仲間外れにしたというのに南陽で色々とやっていますし……」

「ん、仲間外れ？七乃、それじゃ！樂就を呼んで仲間外れにしてやるのじゃ！樂就が来たら大きな宴を城で開いてそこに樂就を呼ばないでやるのじゃ！」

「もう、お嬢様ったらこういう事には頭が回るんですから その小者ぶり、流石です！よ、この小悪党！大人げないぞ！！」

「ははは！そうである、そうである！？もつと妾を褒めてたも！七乃、そうと決まれば早速準備をするのじゃ！来れるものは全員呼ぶのじゃ！それと蜂蜜もたっぷりと用意するのじゃ！」

なんていうか美羽様本当にノリノリだよね。

美羽様は演技してるっていうのにこれに本気で合わせている張勳さんも大概だけど。

しかも何だか最近だんだんと出来が良くなってきてる気がするし。

でも張勳さん気付いてるのかな？

張勳さんが美羽様を煽ってるように返している言葉を言っている時に美羽様の顔が僅かに固まってることに。

あれ絶対に美羽様怒っているよね？

私が美羽様から目を離して部屋を見渡すと殆どの人がまたかという目をしている。

その目に浮かんでいるのは明らかに美羽様に対する嘲りだ。

それに対して翠香さん達はと言えば……笑っている！？

あの二人が悪だくみが成功したような笑みを浮かべているってことは……！

これってもしかして全部最初から仕組まれていたの！？

ん？でも韓胤さんは本気で言っていたっばいよね？

……あれ？もしかして韓胤さんって……讒言をするように仕向けら

れていた!?

と言う事は美羽様も最初から全部了承済み!?

私は思わず美羽様の方を見る。

相変わらず高笑いを上げている美羽様は何も変な様子はないけど・
・!?

み、見た、見ちゃった!

今一瞬だったけど美羽様は確かに何か企みが成功したような目をしてた!

これ全部最初から話が出来てたんだ!

つまりこの部屋にいる人達は私も含めて全員が美羽様達によって知らないうちに操られてたってこと!?

それに気付いた瞬間に私は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

確かに私は隠し事が苦手ですぐ顔に出ちゃうから私には秘密だったのはわかるけど…。

すると私の異変に気付いた翠香さんが刺すような視線を私に送ってくる。

これってそのままじっとしているって事だよね?

私は何とか表情を隠しながらじっと立つ。

うう、こ、怖いよ。

お母さん、何時の間に私はこんな魑魅魍魎が跋扈するような世界に迷いこんじゃったんでしょうか？

誰か普通な私の苦勞が分かってくれる人がいないかなあ……。

S I D E 紀靈 E N D

S I D E とある幽州の太守

「ハックションッ！」

うう、なんだろ？

何か急にくしゃみが……。

誰か私の事を噂でもしてるのかなあ？

でも誰かが噂にしてくれるぐらいならその人うちに来てくれないかな。

本当に人が足りなさすぎるよ。

うちで使える人材って身内の越と範ぐらいしかいないってどうなんだろ？

でもうちの隣りには麗羽がいるし……わざわざ幽州の片田舎になんか来るような人はいないよなあ。

はあ、仕事頑張るしかないか……。

第18話 役者（後書き）

というわけで美羽様陣営の小市民こと紀霊さんの話。

まあ何だか某肉の加工品と仲が良くなりそうな人です。

ただこの人実は最強ステルス能力装備していたりして実は普通じゃなかったりするんですけど（笑）

第19話 酒肉（前書き）

何だか流石に分かりやす過ぎましたね。

というわけで寿春編です。

第19話 酒肉

S I D E

韓胤 かんいん

儂が今おるのは寿春にある袁家の莫迦娘の城。

この城では今日で三日目となる宴が開かれておるところじゃ。

今この城は儂が今まで見てきた中でも最も華やいだ場所となっている。

城の広間に用意されておるのは大量の料理と酒と女。

用意された酒や料理はかなり上等なもので、舞っておる女や楽士も中々の上玉ばかり。

一昨日、昨日と同じ光景じゃが特に今日は何やら料理や酒が殊更に美味く感じて儂はつい自然と箸が進んでしまっておる。

だがそれは他の者も同じようじゃ。

これ程のものを三日分も用意できるとは流石は腐っても袁家と言ったところか。

宴の会場では儂以外にも多くの者があの莫迦娘に招かれ酒や食事を手にしておる。

招かれておるのは南陽や汝南、寿春辺りで力を持っておる者らばかり。

りじゃ。

今はそれぞれ酒を共に交わしておるが、その実お互いにかに相手を出し抜こうか考えているのだ。

儂も少し前まではあ奴らの中に一人であった。

しかし今は違う！

何せ儂には前途洋々たる道が既に開けておるのじゃからな！

儂は内心笑みを浮かべつつ手に持った杯を傾けるが……この酒の何とも美味しいことよ！

それにしてもくくく、上手くいったわい！

1年前新しく来る太守が袁家のまだ小さい小娘と聞いた時には儂は『しめた！』と思った。

いくら名門・袁家の者とは言ってもまだ幼い世間知らずの小娘。

そんな子どもを都合の良いように操るなど簡単なことだからな。

しかし聞いた通り南陽に來た袁家の娘は確かに幼かったがその側にはあの憎き樂就の若造がおった。

莫迦娘の守役だったあの男は儂を含めた者達が莫迦娘を操ろうとしても何かと邪魔をしておったものじゃ。

その樂就が莫迦娘の怒りを買って牢に入れられ、その後南陽に取り

閻象と名乗ったそ奴は儂にこう告げてきおった。

『南陽の太守代理を務めているのは袁渙ですが、南陽を栄えさせて実権を握っているのは樂就という者のようです。樂就は賊に対処する為に兵を集めているとのこと。樂就はかつて袁太守様の怒りを買って牢に入れられた事があります。そこで『樂就が袁太守様を恨んで反乱を起こそうとしている』と韓胤様が袁太守様に告げれば樂就は罰せられるでしょう。そして樂就の謀反を知らせたという功を盾にすれば韓胤様がその後釜に座る事が出来ます』と。

閻象は儂にこの策を提案した上で『成功した暁には是非御取立ての程を』と言いおった。

どうやら閻象は下級官吏でこのままでは出世出来ないと思って儂を頼る事にしたようだ。

この閻象の策を使えば儂はあの小賢しい樂就を蹴落とし、豊かな南陽の町の利を得る事が出来る。

思わぬ名案に儂は歓喜したものだ。

それに閻象にしてもこれ程知恵の回る者なら抱きこんで置いて損はない。

儂は閻象に将来について約束した後早速のこと莫迦娘にその事を告げた。

他の奴らも追従したが、提案したのが儂という事実に変わりはない。

あの生意気な小娘共のせいで楽就を直ぐに処罰するとまではいかなかったのは残念だったがな。

だがその楽就の処分にしてもこのまま行われる事になるだろう。

上級官吏に金は握らせたし、儂自身も今日までの宴の中で莫迦娘に色々と楽就についてある事無い事吹き込んでおいたからな。

あのいつも莫迦娘の側にいる張勳という小娘も何故か楽就に対して悪感情があるようで同調してくれおった事もあつて今では莫迦娘も処罰に傾いておるようだ。

そしてここ最近儂以外の者も利を得ようと莫迦娘に群がっておつたが名さえ覚えられておらん有様だ。

あの莫迦娘の頭なら仕方が無いというものだが、そこへ行くと儂は既に名を覚えて貰つておる。

もはや儂の将来の栄華は決まつたかのようなものだ。

その証拠に金の匂いに敏感な商人共や官吏共、さらには力の小さい豪族共が儂にすり寄つてきている。

こうして儂に頭を下げてくる奴らを見ていると何とも堪らん。

そしてこれから儂の下には莫大な富が入ってくる。

その事を想像しただけでもはや笑いが止まらんわ！

「韓胤様、何やら機嫌が良いですな」

儂がこれから先の事を思い浮かべてほくそ笑みながら料理をつまみ、酒を呑んでいると白い妙な服を着た若い茶色の髪の男が近づいてきおった。

名を確か山雄とか言ったな。

そう言えば確かこやつが最初に儂におべっかを使ってきた事がきっかけとなって儂の回りに人がすり寄り始めたのだった。

「おお、山雄か。何やら酒が妙に美味くてな」

「そうでしょう。何せ祝いの酒ですからな、我らの良き船出の……」

ふん、こ奴妙に上手い事を言いおる。

だが悪い気はせぬ。

船出の祝いか、まさしくその通りだ。

儂は宝の山がある南陽に向けて旅立つのだから！

「貴様面白い事を言うではないか。どうだ、儂とともにこないか？」

こついう上手い事を言う奴がそばにいても悪い気分ではない。

儂が誘ってやると山雄は満更でもなさそうな顔をしておったわ。

「いやはや、それは光栄な事で……おや、太守様がいらしたようですよっ。」

山雄の言葉に儂が後ろを振り向くと確かにあの莫迦娘が張勳と一緒に入ってきおった。

何やらいつも連れておる親衛隊の大きい武器を構えた女が見当たらぬが……まあどうでもよい。

明日には樂就が到着すると聞く。

三日間に渡って続けられたこの宴ももう今日で終わりとなる。

そして明日からは儂の天下だ！

そう思うとこの宴もまさに儂の為に開かれているように思えるな。

南陽での金に囲まれた日々のはたけだ。

最後の仕上げとばかりに今日の宴ではせいぜいあの莫迦娘のご機嫌を取ってやるとするか！

む、そう言えばさっきまで横に山雄がおった筈だがいつの間にかいなくなっておるな。

まあそんなことどうでもよいわ！

儂が気を取り直して莫迦娘を見やると莫迦娘は何やら玉座には座らずに立っておった。

何やら挨拶でもするようだ。

あの莫迦娘の事だ、一体どんな挨拶をする事やら。

「皆の者！昨日、一昨日に引き続きよくぞ妾の為に集まってくれたのじゃ！」

莫迦娘の声は思いのほかしっかりとしている。

何かあの莫迦娘にしては思ったよりもまとまどな……？

まああの莫迦娘にもこれくらいの事は出来るか。

「あの不届き者の楽就もついにこの寿春に来ることとなっておる！この宴も今日が最後となったのじゃ！皆の者も是非最後まで楽しんで欲しいのじゃ！」

莫迦娘の挨拶が続くがあの莫迦娘め、ついに楽就の処罰を決めたようじゃな！

それは即ち儂の栄華が近くなったという事。

これまで苦勞した甲斐があったというものじゃ！

それにしても何やら眠くなってきたな。

まあもう若くはないし、2日も夜遅くまで宴が続けば当たり前前じゃが。

しかし一見挨拶が終わったかのように思えた莫迦娘は未だに立ったままにいる。

む？莫迦娘はまだ何か言う事があるようだな。

「最後に妾から皆の者に願いがあるのじゃ！皆の者、妾の願いを聞いてくれぬか？」

莫迦娘に願い？

どうせ大した事ではないだろう。

だが宴も最後だ。

聞くぐらいしてやっても良かろう。

儂を含めた殆どの者が莫迦娘の願いとは何か注目しておると何やら莫迦娘は満面の笑顔を浮かべおった。

「皆の者は今まで民から搾り取った甘い汁を十分に吸ってきたである？そのまさしく命を吸われた民の為に覚悟を決めてくりやれ？」

「「「「「は！？」「」「」「」

宴の場に似合わぬ声が一斉に響いた。

儂は今小娘が何を言ったのか全く理解出来なかった。

今小娘は満面の笑顔で何と言った？

「夢の日々は今日をもって終わりなのじゃ！泉！！」

儂が何やらもやが掛ったように上手く頭が働かない状態で莫迦娘を

うように身体が動かない。

ぼんやりとする頭を振り払いながら回りを見ると儂と同じように動きが緩いものばかりだ。

も、もしや盛りおつたか!?

思考がはつきりしないがそれでも儂はあの莫迦娘に騙されていた事に気付く。

「おの…れ、袁…術…め…!」

儂は恨みの声を上げるも急に瞼が重くなる。

謀られた…!

その思いを最後に儂の意識は闇へと落ちたのだった。

第19話 酒肉（後書き）

さて、使ったものの内容については文中にもつつすらと匂わせてあります……。。

ヒントは華陀です。

第20話 制圧（前書き）

遅れに遅れて投稿です。

前回から兆候はあったのですが予想通りのスランプに入りました。

第20話 制圧

SIDE 樂就

今回の俺達の計画は『敵を集めて油断させた上で一網打尽にする』
ということに尽きた。

豪族というのは政治を行う上でも邪魔となる存在だ。

どうせ豪族達を排除するのならば一気にまとめてやってしまった方が都合がいい。

俺達はまず南陽が豊かになっているという話を豪族達の耳に入るように流した。

その上で寿春で見つけてこちら側に引き入れた閻象が適当な豪族に俺を排除すれば南陽の利権を手に入れられると入れ知恵させる。

この思惑は上手く当たって豪族は直ぐに美羽に俺の讒言をしたようだ。

そして豪族の讒言を美羽が聞き入れたふりをして莫迦を装い宴を開くと同時に豪族達の間にも同じ利権の話をした。

前世の世界においてもそうであったようにこの世界で宴というのは政治の場だ。

俺達の予想通り、強欲に目が眩んだ豪族達は美羽の覚えを良くしようとして我先にと宴に参加してきた。

だが利に聡い豪族達であるが奴らは同時に害にも聡い。

宴には出るものの豪族達が警戒を解かない事は充分に考えられたので俺達は宴を3日開く事を決めていた。

何故なら最初は警戒していた豪族達も一日目、二日目と何も起きなければ豪華な酒食と華やかな雰囲気誘われて油断してくるだろうと考えたからだ。

そして最後の3日目に豪族達が油断したところで俺達は酒と料理に薬を盛った。

俺達が奴らに盛ったのはいわゆるところの麻酔だ。

ただし前世の医療で使っていたような物ではない。

今回使った物は文字通り『酔わせる麻』……前世で俺が生きていた国なら普通の奴は持っているだけでお縄になる事確実な代物だ。

当初は酒で酔わせるだけの予定だったのだが、それに不安を感じた俺が逸話で華陀が使ったとされる麻酔を思い立ったのだ。

そこで俺が薬学の知識も持っているという烈に相談したところ、烈は麻酔の調合法について知っていた。

そして烈が五斗米道ゴッドウェイドなる医療集団が使っているという麻酔を用意し

てくれたのだが……それは原料から考えてもあの白い粉としか見えないものだった。

だが麻酔である事には変わりがないので俺は民間での扱いに注意する事を心に決めた上でこれを用いたのだ。

そして豪族達が麻酔入りの酒や料理を警戒せずに口にして意識が朦朧となったところを華漣の手引きで密かに寿春に入っていた俺達が一気に襲撃するに至った。

「はあ……」

思わず俺の口から溜め息が漏れた。

俺は今宴の会場だった広間で捕縛した豪族達の身元を確認しているところだ。

麻酔を盛られた豪族達の殆どは眠ったまま縄に縛られて床に転がされていて、確認が終えた者から兵によって牢へと運ばれている。

ただ豪族達については大した抵抗もなく捕縛することは出来たが、流石に兵が乱入した会場は無事というわけにはいかず辺りには宴の

残骸が散らばってしまっている。

さっさと片付けてしまいたいところではあるが、現在の状況確認の方が優先である以上仕方が無いだろう。

また広間には寿春に治安維持や豪族達の家の制圧を担当している蒼香達からの伝令が次々と入ってきている。

その伝令によれば蒼香達の方も上手く事が運んだようだ。

豪族達の家族や私兵は大方捕らえることが出来、寿春の町にも大した混乱は起きていないらしい。

事が順調に進んでいて何よりといったところだ。

だが計画が順調に進んでいるのと裏腹に俺の気分は晴れない。

そしてその原因は今俺の左腕にかかっている重みにあった。

「なあ、美羽？」

「何じゃ、泉？」

俺は一向に解決しない現状の問題に対処する為に意を決して左腕に感じる重み《・・・》に声を掛けた。

そして返ってくるのは何やら懐かしいような甘えた声。

普通の奴なら声だけで癒されるかもしれないが、生憎と今の俺はそれどころではない。

「いつまで俺にしがみついているんだ？」

「ようやく久しぶりに泉に会えたのじゃ！もう少しこのままにさせるのじゃ！」

豪族達の捕縛が全て終わった後からというものの美羽は俺の左腕にしがみついた状態が続いている。

決して嫌というわけではないのだが回りの奴らの視線が痛い。

豪族達の監視をしている漢升殿は若い子どものおままごとを見るかのような微笑ましい表情で俺らの事を見ているし、部屋を片付けてる兵士達は怪訝な顔をして俺達を見る。

そして事情を知っている古参の兵士に耳打ちされた後は何やら面白いものを見たようにこちらを見ている。

俺がそいつらを睨み付けると顔を逸らせるものの、その態度は内心笑っていることが明白だ。

少し離れたところにいた筈の張勳は何やら呆然としていたが、何時の間にもやら姿を消してしまっていた。

そして更に問題なのが左腕に感じる柔らかい感触だ。

李雪達と出会ったあの村で感じた時のものよりも若干大きさが増している気がする。

俺とて男だ、人間としての欲は普通にある。

今は理性を保つことに成功しているがこの拷問が続けばそれがいつまで持つか分かったものではない。

周囲に視線で助けを求めても誰もが目を逸らすか微笑むばかりで助けてくれやしない。

あの雄に至ってはさっさと何処かへ退散してしまった。

仕事というのは分かるが、あれは分かかって逃げたに違いない。

更に困った事に美羽は胸と右手で俺の左腕をがっしりとホールドしながらも左手に持った書類を読んでいる。

つまり仕事をしているので文句をつけにくいのだ。

だからここは俺自身で何とかするしかないのだが……。

「美羽、一応ここは人前だから……」

「妾は別にもう構わないのじゃ！約束ぎりぎりまで妾を待たせおつて！！それとも泉は妾にこうされるのがいやなのかや？」

少し不安を浮かばせた瞳で美羽は上目遣いで俺を見る。

美羽が確信犯であり、この仕草がいつの間にも身に付けたのか分からない程の演技力によるものである事は俺には分かる。

だが演技の中に美羽の本音とも言える感情が交じっていることも美羽と付き合いの長い俺には分かかってしまっていた。

この状態の美羽を振り払う事など俺には到底出来そうにない。

「いや、別にそうでもない……」

「なら良いである」

俺が白旗を掲げると美羽は嬉しげに更に左腕を強く掴む。

「はあ……」

もはやあきらめの境地に至った俺は再び溜め息を吐きながら何やら更に強く感じるようになった柔らかいモノの感触を何とか無視してこれからの事について考えることにした。

実際妙に気にかかる事があるのだ。

「……これは絶対一波乱起きるよな」

俺が今右手に持っているのは実際に宴に来た奴らの一覧表だ。

豪族達の捕縛が終わった後に閻象という文官から手渡されたものなのだが、これに書かれた豪族達の数自体が予想よりも少ない。

荊州や汝南の勢力を持つ豪族は大体を抑える事が出来たのだが、揚州において力を持つ豪族があまり宴に来ていない。

元々俺達の目的は南陽に群がる豪族達を排除することだったから別に大勢に影響があるわけでは無い。

しかしその豪族達の共通点が揚州：特に廬江郡や呉郡を中心とした者であるという点が俺の頭に引っかけた。

その俺の頭に浮かぶのはある大軍師と呼ばれた人物の名前。

美周郎こと周公瑾。

いや、ここでは女性だから美周嬢か。

あの名軍師がいて小霸王こと孫策が率いる孫家がただで終わる筈がない。

やはり周瑜が動いていると見るべきだろう。

俺達の動きに気付いたのだろうが、俺達は孫家が動き出すかもしれない事は既に想定して手も打っている。

孫家がこれからどう動く事となるか分からないが……美羽に害をなすようならただ叩きつぶすのみ。

俺は例え歴史上の英雄を殺すことになろうとも躊躇わないぞ。

孫家と対峙する事となるか否か。

あとは……美羽と孫権次第だ。

第21話 孫権1（前書き）

今回短めです。

スランプだったのは前の話だけで視点を切り替えたなら調子が戻ってきました。

第21話 孫権1

SIDE 孫権

「思春。やはり何があつたか掴めないの？」

「はっ、蓮華様。兵士は黙秘して何も答えませんでした。城の侍女にも聞いてみたのですが、要領を得ていません。大してお役に立てず、申し訳ございません」

私の部屋に戻ってきた思春は心底辛そうな顔をして私に頭を下げた。思春ならもしやと思つて部屋から送り出したけど、思春も大した情報を掴む事は出来なかつたようね。

「仕方が無いわ、思春。こんな状況だもの」

私は思春を労るも声はやや震えており、自分の中の不安が隠せていない事が自分でも良く分かる。

それを思春も感じ取ってしまったようで思春はますます辛そうな顔をした。

こんな時にこそ主である私がしっかりとしなくてはいけないというのに、思春に負担をかけてしまう私の弱さが情けない。

私が今いるのは袁術の城の一角にある私の庵。

人質の話が袁術から来た時、孫呉の…姉様の為になるのなら私は

城に上がった。

いつか孫呉の地を取り戻す時が来た日の為にと己を鍛えつつこれまで人質生活を送っていた私だったけど、少し前に異変が起きた。

急に城の奥が騒がしくなったのだ。

この数日あの袁術が下らない宴を開いているとは聞いていたがそれとどうも様子が違う。

この庵に聞こえてくるものは兵士の雄叫びと何かが暴れる音。

それらの音を聞いた瞬間に私は先日姉様が賊退治に出発する前に私に話した言葉を思い出した。

『もしかしたら私が留守の間になんか起きるかもしれないわ。蓮華、その時は私達の事とかは気にしないで貴女の思ったように行動しなさい。くれぐれも無理はするんじゃないわよ?』

恐らく姉様は何かが起こるかもしれない事を薄々感じていたに違いない。

それで姉様は人質となっている私の身を心配してくれたのだろう。

それから私と思春は様子を見る為に庵を出たのだが、直ぐに柿色の鎧の兵士達に取り囲まれてしまった。

私に庵に戻るように告げる兵士達は良く訓練されているようで思春でも突破できそうにない。

それに柿色の鎧は袁術軍の色だ。

動いているのが袁術の関係者ならここで私が脱走してしまえば孫呉の…姉様の立場が悪くなってしまう。

そう考えた私は思春と大人しく庵に戻った。

暫くすると聞こえていた騒ぎは治まったが、それでも私の不安は募るばかりだ。

そこで私を心配してくれた思春が何とか事情を聞き出せないかと庵を出て行ったのだけど…それも叶わなかったようね。

私はこれから先一体どうなるんだろう？

一体今何が起きているのかも分からずに私が途方に暮れていた時、部屋の壁に掛けられた一本の剣が私の目に入った。

亡くなった母様から初陣の祝いにと贈られた剣。

姉様が持っている南海霸王程ではないけどそれでも名剣であるところから一品だ。

そうよ、私とて『江東の虎』と呼ばれた母様の娘。

このまま憂き目に遭うよりも孫呉の者として恥ずかしくない最期を……！

そう考えた私がフラリと座っていた椅子から立ち上がった時、庵の戸を叩く音がした。

その音によつて思考が負の方向へと進んでいた私はハツとして我に返った。

いけない、私は一体何を考えていたの!?

頭を振りつつ私は思春と目を合わせる。

それだけで私の意を汲み取った思春が戸を叩いた人物の応対に出た。

「何用か？」

「妾は袁公路じゃ！孫仲謀殿と話しがしたいのじゃが取り次ぎを頼めるかえ？」

「「は!?!」」

戸の外から聞こえた言葉に思わず私と思春は揃って呆然としてしまった。

あの袁術が私に面会を希望している!?

しかも自分で私の庵まで来て!?

本当に袁術なのかと疑ってしまった私だったが、確かに聞こえてきた声は聞き覚えのある声に違いない。

「れ、蓮華様、ど、どう致しますか？」

冷静な思春も思わぬ事態に動揺しているようで声が震えてしまつて

いる。

だが私は思春が動揺したところを初めて見た為に思春でも動揺はするのかもしれないと思つたと逆に気持ちが悪く落ちて着いてきた。

袁術に何かがあつたのかは分からないけどどうして私を訪ねてきた以上にか用があるのだろうか。

袁術は我ら孫呉の地を奪つた憎き敵だが、わざわざ訪ねてきた相手を追い払うのも気が進まない。

何より私は今袁術が私と何を話に来たのか興味がある。

「思春、袁術に会うわ。戸を開けて頂戴」

「はっ！」

思春が戸を開けると確かに庵の前には袁術がいて、その隣には私が初めて見る大柄な灰色の髪の男が立っていた。

袁術の隣にいるのが張勳ではない事に私は違和感を感じつつも庵を出る。

外に出ると先程まで庵の周りにいた筈の兵士の姿は消えており、本当に袁術と男だけで私と話をするつもりのようなのだ。

「仲謀殿が出てきたということは話に応じてくれるのかや？」

「…あ、ああ、話に応じてよう」

…誰だ、これは？

私が出てきた事を見て笑顔を浮かべてきた袁術は私の知る袁術とは全くの別人としか思えない。

私を知っている袁術は莫迦でまさにお子様といった印象の奴だった筈だが……今の袁術は何やら人を引き込むような魅力を身に纏っていて姉様に近いような雰囲気さえ感じる。

私は多少の混乱しつつも袁術達を庵の中へと招いた。

第21話 孫権1（後書き）

何だか最近樂就の出番が少ないような気がします。

ただこのシーンの中心はあくまで美羽と孫権なんで。

樂就君は寿春編以降の活躍ですね……。

第22話 孫権2（前書き）

説得編前半戦です。

少し長くなったんで前後に分けました。

第22話 孫権2

SIDE 孫権

私に話があると訪ねてきた袁術を私は庵に招き入れた。

そして今私は袁術と机を挟んで相對している。

椅子に座っているのは私と袁術だけで、思春と袁術の供の男はそれぞれ私と袁術の後ろに立っていた。

「妾の話に応じてくれる事に改めて礼を申すのじゃ、仲謀殿」

「……ただ話を聞くだけだ。話に応じてと決めただけではない」

笑顔で私に軽く頭を下げてきた袁術に私はぶっきらぼうに返す。

礼を持って接してきた相手に対して相当に無礼な事をしているという自覚はあるが、相手が我ら孫呉の地を奪った袁術であるだけにどうしてもきつく当たってしまう。

しかし袁術は私の態度を全く気にした様子がなく笑顔を浮かべたまままだ。

やはり私が知っている袁術と何かが決定的に違つとしか思えない。

一体袁術に何が起きたのだろうか？

「そう言えば仲謀殿達は泉に会うのは初めてじゃったの」

袁術に対する疑問に戸惑う私を余所に袁術は後ろに立っている男に目をやった。

袁術の意を汲み取ったらしい男はその場で拱手の礼をする。

「孫仲謀殿にはお初にお目には掛かかります。私は袁公路が配下にて姓を樂、名を就、字を守路と申します」

男が名乗った名に私は驚いて目を見開いた。

樂就……確か欲に塗れた豪族による讒言を信じた袁術によって寿春じゆんに召喚された者の名だ。

南陽を発展させた能吏らしく、それほど民に尽くしている者を讒言によって咎めようとする袁術に私は呆れたものだが……その樂就が何故袁術と共にいる!?

樂就を真名で呼んでいる事からも袁術は樂就を信頼している事が分かる。

そして袁術が樂就を見る目は姉様が冥琳を見る目と同じだ。

それ程信じている家臣を南陽に取り残してさらには罪人として呼び寄せるなど……ま、まさか!?

「!」

私は思わず口から飛び出しそうになった声を必死で押さえ込む。

そう、そう考えると全ての辻褃が合う！

袁術は樂就を遠ざけてなんかいなかった！

むしろ袁術と樂就は繋がっていて私を含めた周囲を欺いていたんだ！

だとしたら今私の前にいるのが本来の袁術で、今までの莫迦な袁術は偽りの姿か！？

私の中で組み上がってしまった推測に私は思わず愕然としてしまう。

そして袁術は顔に出てしまった私の驚きに気付いたようで、まるで悪戯が成功した時のような笑みを浮かべていた。

「…私達をだましていたな！」

私は怒りを込めて袁術を睨み付ける。

だが袁術は私の視線を受けても怯えるような様子は全くなかった。

「お主達を騙す事になってしまった事についてはすまぬのじゃ。じやが妾達にも事情があつてのう…」

それから袁術が話し始めた話の内容は驚愕の一言に尽きた。

袁術は群がってくる強欲な豪族を一網打尽にするために樂就のような信頼のおける家臣達とともに1年という時間を掛けて下準備をしていた。

そして今日の騒ぎは宴に集まった豪族達を樂就達が一斉に捕縛した事によるものらしい。

私達孫呉は雌伏して時を待っているつもりだったけど…雌伏していたのは袁術も同じだったのだ。

私は袁術の話聞いて納得がいったのと同時に目の前が暗くなった気がした。

私達はいつか袁術から孫呉の地を取り戻す為に準備をしてきた。

でもそれは袁術につけ込む隙がある事を前提にしているものだ。

あの冥琳の目さえ騙してこれほどの事を進めてきた袁術とその家臣達を相手にしてそれは出来るのだろうか？

いや、何を考えているんだ孫仲謀！

今私は袁術と話をしているのだ！

今はそれ以外にも考えるべき事がある筈だ！

私達の悲願が遠のいていく感覚を味わいつつも私はそれを必死で押さえつける。

「…成る程、そちらの事情は分かった。それで私にしたい話とは何なのだ？」

そう、袁術は私に話があつてここに来たはず。

そしてそれはただ私に今回の事情を話す為だけとは考えられない。

私が袁術を睨み付けるように見ると袁術は一度後ろの楽就を振り返って目を合わせてお互い頷く仕草をした。

そして再び私の方へ振り返った袁術の顔は笑みが消え、真剣なものとなっている。

「仲謀殿、妾からお主にしたい話はただ一つじゃ。妾達と同盟を結ばぬかえ？」

袁術が話した言葉の意味を私は最初理解が出来なかった。

今袁術は何と言った？

我ら孫呉と同盟を結ぶ？

「ど、同盟だと！？戯言を抜かすな！！」

私の後ろに控えていた思春が叫び声をあげたが私も同感だ。

袁術は私達孫呉の地を奪った敵だ。

その敵と同盟を結ぶなぞ冗談ではない！

「思春の言つとおりだ！我ら孫家が孫呉の地を奪った貴様らと同盟を結ぶと思つのか！」

私は袁術に向かって怒りとともに怒鳴り声を叩きつける。

だが袁術は私の怒り等気にせず、後ろの樂就と顔を合わせるとお互いに溜め息を吐いた。

「「はあ……」」

その袁術達の態度が更に私の、いや私達の感情を刺激する。

「何がおかしい！！場合よっては斬り捨てるぞ！」

思春がいきり立つがそれは私とて同じだ。

返答次第ではここで死ぬ事となろうとも奴らを討つ！

「何をもってして我らが孫呉の地を奪ったと言つのでしょうか？」

袁術達を睨み付ける私達に答えたのは袁術ではなく樂就だった。

丁寧な口調ではあるもののその顔は明らかに呆れの表情が浮かんでいる。

「巫山戯た事を！母様が死んだあとこの地に乗り込んできたのは貴様らではないか！」

母様が死んだ後に袁術達はこの地に来て太守の座についた。

当たり前前的事実に私は声を上げるが、樂就はやれやれといったように首をすくめる。

「我らはこの地を奪ってなどおりませんよ。美羽は漢王朝より太守

の職を任じられてこの地に来ただけです。それとも貴女方がこの地の太守であるとしても？」

「な、何…！？」

楽就の思わぬ反論に私は思わず黙り込んでしまった。

太守…漢王朝に任じられて土地を任せられた者。

確かに楽就の言う通りこの地の太守として任じられているのは袁術だ。

今の姉様は太守としての地位に就いているわけではない。

「だ、だがこの地は蓮華様のお母上たる孫文台様が治めておられたと聞いている！」

思春が私の代わりに反論するも楽就は全く意に介した様子がない。

「はい。確かに孫文台殿はこの地を治めていました」

「な、ならば…！」

「それは孫文台殿が司馬という軍事を司る職にあり、この辺りの力無い太守に代わって民と治安を守っていたからです。だからこそ漢王朝も孫文台殿が太守ではないにもかかわらずその支配を認めていたのです」

意外な事に楽就は母様がこの地を治めていた事をあっさりと認めた。

奴の理論で言うならば母様がこの地の太守ではなかったにも拘わらず。

思わず私は少し気を緩ませるが…楽就の話には続きがあった。

「ですがそれは孫文台殿に限ったこと。後を継がれた孫伯符殿にはその民や治安を守ることが出来る程の力が無く、ましてや孫伯符殿は漢の役職にも就いておりません。だからこそ漢王朝は美羽をこの地の太守として任じる事となったのです。それとも貴女方は漢の地であり、漢王朝に任じられた太守が治めるべき地を自分のものであると言われるので？」

続けた楽就の言葉を聞いた私は何も言うことが出来なくなってしまうた。

楽就の言っている事は寸分の違いもなく正論だ。

母様は確かにこの地の正式な太守ではなかった。

でも母様は役人としてその実力でこの地を守っていたからこそこの地の支配者として認められていたのだ。

対して今の私達に母様の頃のような民を守るだけの力は無く、姉様は何の役職にも就いていない。

この大陸は衰えているとはいえ漢のものである事に変わりはなく、勝手な支配などすればそれは逆賊だ。

私は今までこの地が孫呉のものであると何の疑いもなく信じていたが、楽就が言う通りそんな根拠は何処にもないのだ。

私達は母様が治めていたこの地を後から来た袁術に奪われたと考え
ていたが、よく考えてみれば私達が勝手にそう思っていただけで袁
術は母様の地を奪ったというわけではない。

私は今までの自分の常識を崩す事となった驚愕の事実思わず頭を
抱え込んでしまった。

「れ、蓮華様!？」

私の様子を見た思春が戸惑いの声を上げるものの、いまの私はそれ
を気にする余裕が無い。

元江賊である思春は政治に明るいわけではなく、今の話の重大さが
あまり理解出来なかったのだろう。

私は…私は今まで一体何を見ていたのだ…？

勝手にこの地を自分たちの地であると思いつみ……そして袁術が来
たら土地を奪われたと勝手に勘違いをしまっていた。

ここでもし私達が漢王朝に任命された太守である袁術に反旗を翻し
ていたら私達は……。

「仲謀殿、妾は昔蜂蜜が大好物じゃったのじゃ」

「は？」

どんどん嫌な方向へと思考が進む私はいきなり話を始めた袁術の言
葉に顔を上げた。

いや、袁術が蜂蜜が好きな事は知っているが…何故に蜂蜜？

いきなり飛んだ話には意味がわからなくなるが袁術は構わずに続ける。

「昔の妾は蜂蜜が普通の民の口に一生入るか分らないような物であるとは知らずにいつも蜂蜜を食べておった…その民の納めた税での。その後泉と町に出て民の暮らしを知り、蜂蜜が高価であると知った時妾は昔の自分が堪らなく恥ずかしくなったのじゃ」

袁術が何を言いたいのか分からないが袁術は恐らく私に何かを伝えようとしているのだろう。

それにしても何時も蜂蜜水とやらを飲んでいた袁術は蜂蜜が大好物だと思っていたが…違うのか？

「じゃがその時泉に言われての。『今の美羽は知る事が出来たんだ。ならこれからどうすればいいか考えればいいだろ』とな」

「！」

「それ以来妾は妾を支えてくれる民を守る為に妾に何が出来るかいつも考えるようにしてある。…ただこの一年策の為とはいえ随分な量の蜂蜜水を飲んだものじゃが…正直昔の妾の愚かさや今の妾の無力さを思い知るようで苦くて堪らなかつたの」

袁術は最後は苦笑いをしながら話を終えた。

その袁術につられて私も思わず笑ってしまふ。

そうか…確かにその通りだ。

今の私は現状を知る事が出来たのだ。

ならば今この私がこの地の民の為に何を出来るか考えればいい。

そう考えると不思議と沈んでいた気持ちが一変した。

「仲謀殿、もう大丈夫かえ？」

「ああ、もう大丈夫だ。……私はあまり周りが見えていなかったよ
うだ。それに袁術……いや、公路殿の事を軽蔑していた。許して欲
しい」

「な、蓮華様!？」

私を心配してきた袁術……いや、公路殿に私は頭を下げた。

その私の行為に思春が慌てるが、私にはそれが気にならない。

不思議なもので以前はあれ程公路殿を孫呉の地を奪った憎き敵と恨
んでいたのに今は公路殿に対する悪感情が自分でも驚く程薄れてい
た。

むしろ私の愚かさを気付かせてくれた事に対して感謝さえしている
くらいだ。

そう、自然と詫びる事が出来る程に。

「こちらこそ済まなかったのじゃ。妾も仲謀殿達にきつく当たってしまったからの。…それで同盟の事に話を戻しても良いかや？」

私の詫びを公路殿は自分も詫びる事で簡単に流す。

おそらく私の事を気遣ってくれたのだろう。

今の公路殿が本当にこんなに細かい気配りが出来る事を姉様達に話しても信じられないに違いない。

そう思うと自然と私の顔に笑みが浮かんでくるのが分かる。

「ああ、是非聞かせて頂きたい」

私は姿勢を正す。

目の前にいる幼い王・袁公路に孫仲謀として向き合う為に。

第22話 孫権2（後書き）

美羽様魅力全開中。

そして樂就君は地味に策を実行しております。

第23話 握手（前書き）

すみません。

遅れに遅れましたがなんとか日刊で投稿です。

蓮華様のセリフが難しいです。

第23話 握手

SIDE 袁術

「ああ、是非聞かせて頂きたい」

仲謀殿がそう言った時、妾には仲謀殿の雰囲気が何か変わったのが分かったのじゃ。

今まで仲謀殿は妾に向かって敵意を放っておったのじゃが、今の仲謀殿からは何か誇りのような物が放たれておる。

元々この交渉は泉や蒼香達の反対を妾が押し切る形でする事となつたのじゃ。

最初泉達は仲謀殿を城の部屋に呼びよせて交渉を行うつもりじゃつた。

それは恐らく泉達が妾の身の安全を案じておつたからじゃろう。

じゃが妾はどうしても仲謀殿と正面からぶつかってみたかつたのじゃ。

もしも仲謀殿が妾の夢の想いを理解してくれれば民を傷つける戦をせずとも済むかもしれぬ。

妾の夢とも言えるようなその願いじゃが、それを伝えると泉は妾の賛成してくれたのじゃ。

そして泉はこの交渉に付き合ってくれておるのじゃが……。

泉め……妾に黙って『鞭』の役目を勝手に引き受けおって。

妾が昔泉に教えて貰った『飴と鞭』の話。

物事に当たるには優しさと厳しさが重要じゃという話なのじゃが、妾はどうしてもその『鞭』の部分が苦手じゃ。

泉は昔からその『鞭』の部分を補ってくれたおった。

今回も泉が『鞭』によって仲謀殿を追い詰めたからこそ妾の『飴』が上手く働いて仲謀殿は妾に心を開いてくれたのじゃ。

しかしそれは妾だけが美味な部分を食して、泉に苦い部分を食べさせておるのと同じ事。

妾は泉だけに汚れ役なぞ押し付けとうはないのじゃ！

妾は泉と同じ位置に立ちたいのじゃ！

じゃというに泉は自分で全てを被ろうとしおる。

それ程妾は泉にとって頼り無く見えるのかのう？

これはこの交渉を終えたら泉を問い詰めねばならぬの。

じゃがそれは後回しじゃ。

今は仲謀殿との交渉を纏める事が優先。

何はともあれ泉の御蔭で仲謀殿とようやく話しあえるようになったのじゃ

妾はこの交渉を是非とも成功させねばいかぬ。

仲謀殿が真剣となったからには妾も気を引き締めねばのう。

妾は目の前で姿勢を正した仲謀殿に倣い、椅子の上で背筋を伸ばして確りと孫仲謀殿と向き合う。

「先程話した通り妾は仲謀殿達と同盟を結びたいと考えておる。互いに争わず、一方が困れば一方が助け合うといったものじゃな。この同盟が成れば妾達は南陽に引き上げ、寿春は孫家に明け渡すつもりじゃ。無論王朝に働きかけて太守の座も孫家に譲り渡すのじゃ」

「なっ!?!」

妾が同盟の内容について述べると甘寧が驚きの声を上げおった。

仲謀殿も驚いてはいるようじゃが声には出さずにその意味を考えておる。

まあ同盟や盟約といったものは双方に利があつて結ぶものじゃからな。

妾の話した条件はあまりにも仲謀殿達に都合が良いから疑つておるのじゃろう。

「……そちらの条件は？」

仲謀殿は少し考えた後で妾の目を真剣に見ながら尋ねてきおった。

その目は妾の真意を探るような目をしておる。

誤魔化しは効かぬの……ここが本番じゃ！

意を決した妾はゆっくりと深呼吸をして…。

「孫家が荊州州牧・劉景升殿に詫びを入れる事じゃ」

この交渉の焦点となる条件を言い放った。

その直後に部屋に殺気が満ちるのを妾は感じた。

その殺気を放っておるのは他でもない仲謀殿と甘寧じゃ。

まあ仲謀殿達の反応は当たり前じゃな。

仲謀殿にとって事情はどうあれ景升殿達は母親の仇じゃ。

その景升殿に詫びよと言われても到底納得が出来ないじゃろう。

「……その理由を伺ってもよろしいか？」

じゃが仲謀殿は怒気は放っておってもそれに吞まれてはおらぬようじゃ。

必死に自らの感情を抑えてながら理由を尋ねる仲謀殿に妾が答えよ

うとした時……

「仲謀殿は荊州の民の間で孫家の評判が酷く良くない事をご存知ですか？」

またしても泉が『鞭』の役目を奪いおつた。

妾としては泉に文句を言いたいのじゃが、今ここで泉と揉める訳にはいかぬ。

腹は立つのじゃが、仲謀殿との交渉を纏めるには泉が『鞭』、妾が『飴』という姿勢を崩すわけにはいかぬ。

ならば……妾は泉の思いを無駄にせぬためにもここは『飴』に徹さなければいかぬ……。

妾は自分の感情を抑えて推移を見守る事にする。

「……いや、初耳だ」

泉の問いに仲謀殿はやや怒気の抜けた声で応じる。

やはり仲謀殿は民の声を気にする人柄なのじゃろう。

荊州で孫家の評判が悪いという言葉が気になったんじゃろうな。

それから泉は仲謀殿に荊州での孫家の評価について説明をし続けた。

孫堅が勢力を拡大する為に豊かな荊州の地を狙って景升殿が治める荊州に攻め込んだのであろう事。

景升殿が皇族の出かつ正式な荊州の州牧で善政を敷いており、その劉景升殿に孫文台殿は攻めかかった事で漢王朝に対する反逆となりかねなかつた事。

実際に漢王朝の上の方では孫堅の亡きあと孫家を警戒する動きがあつた事。

その為に妾が南陽の太守になるついでに寿春を孫家ごと預かつて監視する事になつた事

そしてそのような立場にあるにも拘わらず孫家が孫文台殿の仇討ちを声高に宣言した為に、荊州の民が孫家に反感を持つておる事。

その為に妾達が孫家と親しくなれば荊州の民に反感を抱かれるであろう事。

それらの事を泉は淡々と感情を交えずに仲謀殿に説明し続けたのじや。

仲謀殿は時折怒鳴り声を上げようとする甘寧を常に制しながら泉の話は黙つて静かに聞いておつた。

その顔は青くなつてはおつたものの、嫌な話から目を背けずにしっかりと物事を受け止めるその姿勢は見事の一言じゃ。

やはり妾にとって仲謀殿を見習うべき点は実に多いのう。

妾が仲謀殿に感心しておる中で、泉の話聞き終えた仲謀殿は静かにじつと眼を閉じおつた。

恐らく泉に聞かされたあまりに多くの事実について整理しておるのじゃろう。

長い時間が経ったようにも感じられたのじゃが、やがて仲謀殿は目を開くと妾をしっかりと見つめてくる。

「……我ら孫家が荊州の民に恨まれている事は分かったし我らが王朝から睨まれている事も理解出来た。だが何故公路殿は恩知らずな真似をしようとした我らと同盟を結ぼうとされるのだ？ 私には公路殿が何故そこまでして我らと結ぼうとされるのか分からない」

その仲謀殿の問いかけに妾は少し考え込む。

戦略としての理由ならばある。

南陽と寿春はかなり離れておるし、寿春のある揚州は人口が少なくあまり開発されていない割には孫家のような昔から住み着いている豪族や江賊・海賊といった者が多い土地じゃ。

水軍を持っておらん妾達にとっては治めにくい事はこの1年でよく理解しておる。

水軍に通じておる孫策達がおらんかったら妾達はかなり苦労したじやろう。

揚州を孫家に任せた上で同盟を結べば妾達は南陽に集中する事が出来る。

じゃがこれは妾の答えではないのう。

この戦略を考えたのは泉達で妾が仲謀殿と盟を結ぼうと思ったのは他の理由があるのじゃ。

自分の考えをまとめた妾はゆっくりと顔を上げて仲謀殿を見つめる。

「仲謀殿、妾はの、戦が嫌いなのじゃ。戦となれば被害を受けるのは民じゃし、実際に戦場で命の遣り取りをするのは妾の民でもある兵達じゃ。戦は人を狂わせる……。妾も賊を何人かこの手で殺めたがその感触は未だ忘れられん」

そう、妾が初めてこの手で人を殺して1年程経っておるが未だに妾の手にはあの時何人かの賊の喉をこの手に持った剣で突いて殺した感触が残っておる。

「……………公路殿が賊を？」

仲謀殿と隣の甘寧は驚いたように妾を見ておるが……………妾がこの手で人を殺めた事が信じられぬのじゃろう。

まあ無理もあるまい。

仲謀殿達はこの1年間玉座に座って只管蜂蜜水を飲んでおった妾の姿しか知らぬじゃろうからのう。

妾は苦笑しながら右手に掌を上にして机の上に置く。

この1年の間も密かに部屋で剣の訓練を欠かさなかった妾の掌は固くなったタコがいくつも出来ておる。

剣を握る者が見ればすぐに妾が剣を扱っておる事がわかる筈じゃ。

案の定仲謀殿も妾の掌を見て納得した顔を浮かべておる。

「妾は妾達……上に立つ者が己の都合で徒に戦を起こしてはいかぬと考えておる。出来る限り戦を起こさぬようにする事が妾達に務めじゃともな。孫伯符殿はいずれ妾から独立しようと思戦を仕掛けるじやろうし、恐らくそれが終われば孫文台殿の仇を討とうと思景升殿に軍を起こす筈じゃ。かといって妾が孫伯符殿を止めようとしても戦が起きる」

妾が一旦話を止めて仲謀殿を見やると仲謀殿も頷いておった。

恐らく仲謀殿も妾と同じ見解なのじやろう。

仲謀殿が妾と同じ事を考えてくれておる事を確認した妾は心に秘めていた想いを言葉に乗せる。

「じゃがこの同盟が成れば少なくともこれらの起こさなくても良い戦を止める事が出来るのじゃ！仲謀殿、どうかむやみに民を苦しめる戦を起こさぬようにする為にも妾に力を貸してくれぬか!？」

最後は叫ぶように妾は仲謀殿に頼み込む。

「……………」

妾の願いに仲謀殿は何も答えず、妾にとって非常に長く感じられるような時間が流れおった。

何時まで経っても返ってくる事のない仲謀殿の答えに妾は思わず俯

く。

……妾の想いは仲謀殿に通じなかったのじゃろうか？

「……私も戦は嫌いよ」

妾の頭に諦めが過ぎたその時、仲謀殿の口から絞り出すかのよう
に紡がれた言葉に妾ははっと顔を上げた。

妾の目の前では仲謀殿が微笑むかのように笑っておる！

「『孫呉の女は勇猛であれ』という言葉通り今まで私は気丈に振舞
ってきたけど……私は姉様や祭達のように戦に馴染む事がどうして
も出来ないわ」

「蓮華様!!??」

聞き様によつては弱音ともとれるような仲謀殿の言葉を聞き咎めた
甘寧が仲謀殿に声を上げるも仲謀殿は微笑むばかりじゃ。

「戦で私の命令で孫呉の民の血が流れることが私にはどうしても受
け入れ難かった……でも公路殿の御蔭でようやく霧が晴れたわ」

「で、では!??」

「ええ、この孫仲謀、公路殿の同盟の提案に賛成させて頂くわ」

妾は仲謀殿の言葉に思わず椅子から立ち上がる。

仲謀殿の言葉に妾は嬉しさが隠せなかったのじゃ。

これ程嬉しい事は無いのじゃ！

あの日の戦以来妾は如何に戦を起こさぬようにするか考えておった。結果妾の出した答えは志を同じくする者が手を携えれば良いというもの。

そして今妾はこうして仲謀殿と手を結ぶ事が出来たのじゃ！

後ろを振り向くと泉も妾に笑顔を浮かべておった。

「泉、やったのじゃ〜！！」

「おい、美羽！？人前で飛びつくなと何度も……！」

思わず泉に妾が飛びつくと泉は焦りながら妾を受け止めてくれたのじゃ。

泉が焦っておるようじゃが……泉め、勝手に『鞭』の役目を妾に黙って引き受けおった罰じゃ。

「……守路、公路殿が貴方にそうして甘えるのはいつもの事なのか？」

「……恥ずかしながら」

「あれ程の気を持つ者がこんな顔を持つとはな……」

妾の頭越しに泉と話す仲謀殿の呆れたような声が聞こえてきおる。

振り向くと仲謀殿が何やら生温かい視線で妾と泉を見ておった。

その後ろの甘寧も何やら同じ目をしておる。

……ここはもう少し泉を困らせてやるとするかのおう。

「…何なのじゃ？」

妾は頬を膨らませつつ泉の身体に更に強く抱きつく。

「こゝ、こゝら、美羽!？」

すると泉の身体が更に硬くなり、泉は焦った声を漏らす。

そしてそれを見た仲謀殿が笑いだしおった。

ちらりと脇目で泉を見上げるとあの泉が本当に困った顔をして狼狽しておる。

ふふふ、泉めいい気味なのじゃ。

妾の泉への怒りが取りあえず治まって、仲謀殿の笑いも治まった後で仲謀殿は顔を真面目に戻した。

「私は賛成しても孫家の当主は姉様よ。姉様が納得しないと同盟は結べない。無論私は力の及ぶ限り姉様を説得するつもりだけど……」

「いや、十分なのじゃ！感謝するのじゃ、仲謀殿！」

孫家の当主が孫策である事は分かっておる。

未だ同盟は完全に成ったわけではないのじゃが、これは大きな前進なのじゃ！

妾は泉から離れて仲謀殿の前にまで移動すると妾よりも少し背の高い仲謀殿を見上げる。

「仲謀殿、未だ盟は成っておらぬが志を同じくする者として妾の真名…美羽の名を受け取ってくれんじやろうか？」

真名を告げた妾に仲謀殿は驚いたようじゃがやがて顔に微笑みを浮かべおった。

「ええ、これから私たちの関係がどうなるか未だ分からないが…志を同じくする者として有難く受け取らせて貰うわ。それと私の真名は蓮華よ」

仲謀殿…いや、蓮華は妾の願いに応えてくれたのじゃ。

嬉しくなった妾は蓮華の前に右手を差し出す。

「これは泉から教わった挨拶での。握手というのじゃ。友好の印らしいの」

「へえ…初めて聞くけど…嫌ではないわ」

そうして蓮華も右手を差し出し……妾と蓮華はしっかりと握手をしたのじゃ。

「よろしくなのじゃ、蓮華」

「こちらこそよろしく、美羽」

まだこの先妾と蓮華がどうなるか分からぬが……是非とも志を同じくする者として一緒に歩みたいものじゃな。

第23話 握手（後書き）

蓮華のセリフに違和感があると思います。

何かありましたらご指摘下さい。

第24話 焦燥（前書き）

今回焦って書いた為にあまり文章の出来がよくありません。

細かい部分は後日訂正していきます。

それと23話に加筆修正を加えました。

少し内容が変わっているので確認頂ければ幸いです。

第24話 焦燥

SIDE 樂就

今回の計画における最大の山場だった孫権との交渉が無事成功に終わった。

まさか美羽と孫権がこの交渉を通じて真名の交換にまで至る関係を築く事になるとは予想外だったが、孫権との交渉を無事に終える事が出来た事の意味は大きい。

これで孫家との同盟が現実近づいたし、仮に孫策が同盟に反対して俺達と敵対したとしても孫権が同盟に賛成すれば孫家内に派閥が出来る事は必至だ。

孫権は孫策との対立を避ける為に意見を抑えるかもしれないが、説得という形で孫権と孫策が一度対立すれば俺達と対立する事を避けようとする孫家の者が孫権を担ぐだろう。

そうなればこちらが孫家を排するのは容易になる。

我ながら冷酷な考え方をしているとは思いますが、未だ孫家との同盟が成っておらず、敵対する可能性がある以上当然考えておかなくてはいけない事だ。

純粹に孫権と友誼を結べた事を喜んでいる美羽も良い顔はしなかつ

たがこの事について了承はしている。

というのも本当は俺はこの案を美羽には話さずにおくつもりだったのだが、ある事情によって話さざるを得ない事になってしまったのだ。

その事情というのは孫権との交渉を終えてから俺が美羽に泣き付かれた事に発する。

俺は孫権との交渉においてスムーズに交渉が進むように敢えて苛め役を買って出たのだが、それを美羽に怒られた。

どうやら美羽は交渉の最中に俺の意図に気付いていたらしく、俺は美羽を傷つけることになってしまったようなのだ。

『自分だけが泥を被ろうとするのは泉の悪い癖じゃ！！泉ばかりに嫌な思いをさせるなぞ妾は嫌なのじゃ！！妾も泉と共に泥を被る覚悟はいくらでも出来ておる！！妾は……泉にとって背中を預けるに足りぬ主なのかえ！！？』と美羽に言われた時俺は頭に衝撃を受けた。

俺が美羽の為に良かれと思ってした事がかえって美羽を苦しめてしまった。

俺は美羽を守っているつもりだったのだがまだまだ本当の意味で美羽を守る事が出来ていなかったらしい。

俺は自分の行動が独りよがりなものであり、美羽を傷つける事になってしまった事を深く反省しながら今後二度と美羽に隠し事をして勝手な真似をしない事を美羽に誓った。

その結果また一つ俺と美羽の間に約束事が増える事となったのだが何故だか俺は悪い気がしない。

最初それは美羽が成長した事を知る事が出来たためかとも思ったのだが……どうも違うようだ。

表現するとすれば俺の中に何か妙な感情が芽生えたようではあるのだが、それが何なのかはモヤモヤしているようでよく分からない。

何か厄介な感情を抱えてしまったという感覚はするのだが……一体何なのだろうか？

まあその問題は置いておくとしても孫権との交渉を終える事が出来た俺達は孫家の動向に目を配りつつも計画の事後処理に入った。

捕縛した豪族や親族、それに悪徳官吏達を雄が調べた調査結果や蒼香達がこの1年で集めた不正の証拠を基にして処分していく一方で、南陽に残る真里や軍勢を引き連れて待機していた李雪に使者を出して豪族達の資産を差し押さえさせる。

既に没収した豪族達の資産はかなりの額に上っており、この資産を使えば一気に領内の整備を進める事が出来るだろう。

また豪族達の処罰については死刑となった豪族達以外の者や死刑となった豪族の家族については少し工夫をした。

財産を没収した上で追放か農民になるかを選ばせたのだ。

本当ならば一族郎党皆殺しにすれば後腐れはないのだろうが流石に

本人がしたわけではない罪で幼子まで殺すのはどうかと思っ
たし、美羽も賛成しなかった。

かといって無理に追放しても野垂れ死ぬか、食うに困って賊となる可能性が高い。

そうなれば困るのは何の関係もない民達である。

追放刑というのは治安上の問題で愚策と言えるのだ。

そこで俺達は豪族達とその家族を南陽に連れて行って土地を割り当て農業に従事させる事とした。

兵の訓練の傍らで土木作業を行った御蔭で今の南陽は土地が余っていて受け入れに問題は無い。

この方法なら彼らの生活の手段を与えれば彼らが賊となる事も無く、こちらは農業の人手を得る事が出来る。

反乱を起こす可能性も無いわけではないが、農地に兵を巡回させれば問題はないだろう。

そうした工夫を凝らしながら俺達が事後処理をこなし始めて既に10日程経っている。

そう、10日だ。

交渉を終えた2日後に城を出て寿春にいた孫家の者と合流した孫権は孫策を説得する為に寿春を出た。

孫策達が賊の討伐に向かった先である歴陽は寿春こしから八日程の位置にある。

時間的に考えて丁度孫権は孫策のところに着いたころだろう。

今頃孫権は孫策の説得に入ってる筈だ。

さて孫策、周瑜……お前たちはどう動く？

S I D E 樂就 E N D

S I D E 周瑜

「未だ接触は無い……か」

私は歴陽の町の城壁から外の風景を眺めながら溜め息を吐いた。

寿春で異変が起きたという知らせを受けてから早8日。

私が待っている袁術からの使者は未だに来ない。

こうして時折城壁で使者を待つ事はもはやここ数日の日課とさえなっている。

「冥琳ったらまた寿春の方を見ているの？」

ふと聞きなれた声に振り向いていればいつの間にか私の後ろに雪蓮が立っていた。

但し酒の入った壺を抱えながら。

「雪蓮……また日中から酒を飲んで……」

「いいじゃない、別に。どうせ今の私達には袁術ちゃんからの使いを待つしか出来ないんでしょ？」

思わず溜め息を吐きつつ文句を言う私に対して雪蓮は手に持った酒壺から直接酒を呷る。

その仕草に何かを紛らわすような印象を受けるのは私の勘違いではない筈だ。

口では何事もないかのように装っているが内心蓮華様達の事を心配しているのだろう。

その気持ちは私も同じであり、私がこうして城壁に立っているのも雪蓮が酒を飲むのと同じような理由だ。

私達が歴陽の賊を退治するように袁術から命を受け、その間に袁術が楽就への嫌がらせの為に豪族達を招いて宴を開く事を聞いた時私の脳裏に閃くものがあった。

樂就への嫌がらせの為に周辺どころか荊州や汝南の豪族達さえも招いて開かれる宴。

そしてその間に賊退治に派遣される私達。

常識から考えればいつものように袁術が下らない嫌がらせを思い付いたというところだろうが、最近感じている袁術に対する違和感が私にそれ以外の可能性を考えさせた。

仮に袁術が私の推測通り莫迦の振りをしているとしたら？

そしてもしも樂就と袁術が繋がっていたとしたら？

私の頭に思い浮かんだのは宴にかこつけて豪族達を集める事による豪族達の粛清。

その可能性が当たれば豪族達の次に袁術が矛先を向ける相手は我らしかない。

その自分の推測を否定する事が出来なかった私は雪蓮と相談の上で手を打った。

事前に孫家に味方しそうであると目星をつけていた豪族達に宴に出ないよう忠告し、袁術による粛清の可能性を仄めかして戦の準備を促す。

更に孫家の中でもしもの時の対処について取りきめをした後で私・雪蓮・祭殿で歴陽の賊の退治に向かったのだ。

そして私達が歴陽の賊を退治し終えた時、知らせは届いた。

知らせを届けてくれたのは寿春に残っていた結殿クヱ（韓当の真名）。

結殿は寿春に残っていた穩の指示に従って寿春で起きた出来事を私達に知らせる為に寿春の町を脱出してきた。

結殿によれば寿春で開かれている宴が三日目になった時に寿春の町に突然多数の兵士が乱入してきたらしい。

兵士達の乱入を知った結殿達は孫家の屋敷を出て事前に用意していた隠れ家に身を潜めたのだが、兵は孫家の屋敷を襲わなかったという。

その兵士達は寿春の町の豪族達の拠点を襲いはしたものの、寿春の治安を乱す事はなかった。

また兵士の数が多かった為に確認は出来なかったらしいのだが、宴が開かれている寿春の城でも何か騒ぎが起きていたようだ。

宴に豪族が集まっている時を狙った行動。

あまりに鮮やか過ぎる兵の動き。

そして明命から伝えられた楽就が予定よりも早く行軍し、紀靈率いる親衛隊と共に密かに寿春に入ったという情報。

袁術が信頼している親衛隊が楽就に協力した事から袁術と楽就は繋がっている事は想像出来る。

加えて感嘆する程見事な手際の良さ。

これは事前に相当な時間をかけて準備を進めていたに違いない。

そして我らを寿春から引き離れたのはおそらく兵力を持つ我らが不測の行動を起こす事を防ぐ為だろう。

しかし私は自分の推測が当たった事を確信する事は出来たものの、袁術達の意図は読め無かった。

袁術と楽就が繋がっていたのなら袁術は今まで暗君を演じていた事になる。

だとすればあの沮授達は恐らく袁術に忠誠を誓っていたのに違いない。

沮授や田豊は私から見ても一流と断言出来る程の才を持っていると思える程の切れ者だ。

奴らは間違はなく我らが袁術から独立を狙っていた事に気付いていたことだろう。

なのに奴らは我らが力を蓄える事を放置していた。

あの沮授達の手腕を見れば我らが力をつける事を防ぐ事など簡単に出来たであろうにも拘わらず。

それに彼らは今回の襲撃でも孫家の屋敷を狙っていない。

あまりにも我らに対するには温ぬるいとしか思えないような扱い。

袁術達が我らに対して何を考えているのか本当に読めない。

だが私は孫呉の軍師だ。

事態が推移する事を黙って見ているわけにはいかない。

この後どうなるかは分からないが、袁術達が我らを討とうとする事も考えられる以上何か手を打たなければならぬ。

今回袁術が豪族達を肅清したであろうことで宴に参加しなかった豪族達は次は自分の番だと戦々恐々としている。

つまりこの肅清で揚州の豪族達が袁術を積極的に支持する可能性は無くなったとあっていい。

豪族達が加勢しないとすれば袁術が今保有している兵力は常備兵2万に樂就の数千を加えた2万数千のみ。

仮に民を徴兵したとしてもすぐ集まる筈が無い。

対して我らが立てば残った豪族達が我らに加勢する可能性は高い。

我らが袁術を倒せば肅清という名の恐怖が消えさるからだ。

そう考えた私は事前に忠告をしていた豪族達に誘いをかけた。

結果として予想通り彼らは突然の事態に怯えていたらしく、彼らは我らの誘いに直ぐ乗ってきた。

今は蜂起していないが、我らが号令さえかければ彼らは直ぐ私達に合流する手筈となっている。

我らの手勢と合わせてその数は2万近くにまでなる筈であり、決して袁術軍に劣る数ではない。

ただそうした準備を整えても我らはすぐ動くわけにはいかなかった。

今寿春の城には蓮華様と思春が人質としているし、穩の安否は未だに分からない。

一応明命を寿春に派遣して可能ならば蓮華様と連絡を取るように頼んだが……未だ明命は戻ってきていない。

この状態で袁術を攻めて仮に勝てたとしても蓮華達を失っては孫呉の先行きは暗いと言いかないようがないのだ。

雪蓮もこの出陣の前にはいざという覚悟を固めてはいたが、出来る事なら蓮華様達を死なせたくは無い筈だ。

軍師として見えない可能性にすぎるような事はしたくはないが、袁術が我らに交渉を持ちかけてくるといふ事は充分に考えられる。

その交渉内容から袁術の意図を察することもできる筈だ。

そしてその間に明命が何らかの成果を持ち帰ってくる事も考えられる。

だからこそ我らは拳兵の準備をしつつも袁術からの接触を待っているのだ。

しかし我らとていつまでも待つ事は出来ない。

袁術が我らを待たせている間に南陽からさらに軍勢を呼びよせる可能性も残っているし、我らには兵糧を始めとした物資が潤沢にあるわけではないのだ。

長く待てば待つだけ我らの状況は不利となり、袁術の方もそれを狙っている事は充分に考えられる。

それ故に私達はその待つ期日を結殿の知らせを受けてから9日後と決めた。

9日待つて何も接触がなければ我らは覚悟を決めて寿春に向かって進軍する。

そして今日は8日目だ。

明日までに接触が無ければ我らは仲間を失う事を覚悟しなければならぬ。

その事が憂鬱となって再び私が溜め息を吐いていると横から雪蓮の叫び声が聞こえた。

「冥琳！ちょっとあれを見て！！」

いきなりの城壁から身を乗り出した雪蓮に釣られて私は顔を上げる。

「あれは……」

雪蓮の指し示す方角に目を向けるといつのまにか地平線の彼方からこちらへ向かってくる騎馬の集団らしき姿が見えた。

生憎と目が良くない私にはぼんやりとしか見えないが、その騎馬は赤い牙門旗を掲げているようにも見える。

私と雪蓮はその集団が近づいてくるのを固唾を飲みながら見守る。

いつもの私ならば私達に比べて格段に目が良い祭殿を呼んだのだろうが、今の私の頭からは焦りによってその選択肢が抜け落ちていた。

「あれは……蓮華よ！思春に穩もいるわ！！」

「何だと!？」

しばらく見守る中で段々大きくなる集団の姿を確認した雪蓮が歓喜の声を上げながら踵を返した。

こちらに向かってきているらしい蓮華様を城門まで出迎えにいったのだろう。

だがそれを聞いた私は雪蓮のように素直に喜ぶような事は出来なかった。

蓮華様達がこちらに戻ってきた事は確かに喜ばしい。

しかし何故蓮華様達がこちらに来れたのだろうか。

蓮華様達が寿春での騒ぎに乗じて城を抜け出せたとは考えにくい。

寿春の制圧において奴らは見事な制圧手際を見せた。と結殿から聞いている。

それ程の手腕を見せた者が蓮華様達の脱出を簡単に許す筈が無い。

「……………ここで考えていても仕方が無いか」

ここで考えていても埒があかない事は確かだ。

私は一度首を振ると事情を知るであろう蓮華様に会いに行くべく雪蓮の後を追った。

結殿や祭殿にも知らせねばいけないしな。

おそらく雪蓮の事だ。

そこまで気は回っていないだろう。

さて……………これから先我らはどうなるのかな。

第25話 姉妹（前書き）

日刊連続更新を断念しました。

ちよつと残念です。

さすがにスケジュールがきつくて……。

ただ今回はその代わりに大ボリュームとなっております。

あと冥琳とかのキャラが薄くてすみません。

第25話 姉妹

S I D E 孫権

私は同盟の話を受け、美羽と真名を交換したその日のうちに思春とともに寿春の城を出た。

無論それは姉様を説得して袁家と孫家の同盟を結ぶ為だ。

最初に向かった姉様の屋敷には誰もいなかったが、もしもの時にと姉様から教えられていた隠れ家で私は無事に穩達と合流する事が出来た。

私達が無事だった事を穩は喜んだけど、私が城での経緯を話すと直ぐに軍師の顔となった。

最初私は穩を説得するには時間がかかると考えていたのだが、穩は意外にもすぐに私の話を聞き入れてくれた。

後から聞いたところ穩と話していた時の私は何か逆らえないような気迫を放っていたらしい。

……私としては特にそんな気迫を放っていた自覚は無いのだが。

何はともあれ穩と合流した私達はすぐに旅支度をして寿春から姉様が賊退治に向かったという歴陽に向けて旅立った。

寿春から歴陽まで馬を乗り潰しながら進めば3日あれば着けるが、私に思春、穩に護衛の兵の事を考えるとそれだけの数の馬を乗り潰す事など出来ない。

馬の疲れを考慮しつつ進めば急いだとしても1週間程は掛る。

それでも穩から結が既に姉様に危急を知らせに向かった事を聞いた私は姉様が拳兵してしまつては遅いと馬を急がせた。

そして歴陽に向かう途中で再会した明命を加えた私達は残りの道を急ぎ、今寿春を出て八日後にしてようやく歴陽に辿り着いたのだ。

「よく無事だったわね…蓮華…」

「姉様……」

ようやく歴陽に街に着いた私達を門で出迎えてくれたのは姉様だった。

姉様の目にはうっすらと涙が浮かんでいて私達の事を姉様が心配してくれていた事が分かる。

私も思わず涙が出そうになったが私はそれを必死に堪えた。

姉様と会えた事は嬉しいけど今ここで泣くわけにはいかない。

私はこれから美羽との同盟について姉様を説得しなくてはならないのだ。

私は弱い。

今私がここで泣いて姉様に甘えてしまつては多分私は姉様を強く説得する事が出来なくなつてしまつたろう。

私を信じてくれた美羽の為にも……我が孫呉の民と兵に無駄な血を流させない為にも今私はここで泣く事等出来ない！

私は湧いてくる感情を押し殺しながらしっかりと姉様の目を見据えた。

「姉様、着いていきなりではありませんが是非姉様に聞いて頂きたいお話があります」

「へえ……一体何かしら？蓮華、それは私だけにしか話せない事なの？」

私の目から何かを感じ取つたらしい姉様はそれまで浮かべていた慈愛の顔から孫呉の王としての顔に一瞬で戻る。

普段は自由奔放な姉様だけどこういった切り換えが早い所は私が姉様に敵わないと思う所の一つだ。

「いえ、冥琳や祭達も一緒の方が良いと思います。我ら孫呉の今後に関わる大事ですので」

「そう……。取りあえず城門前で話す事では無いようだから中に入りなさい。中で話を聞かむ」

姉様は私の話を聞くと自ら歴陽の町の中へと歩き出す。

「駄目ですよお、蓮華様あ」

私の答えも聞かずに町の中に入って行ってしまった姉様を見ていた私が呆然としてしていると隣りにいつの間にか隣りにいた穩が私に声を掛けてきた。

「蓮華様が雪蓮様を説得したいと意気込むのは分かりますけどお、意気込む余りに焦ってしまったら成功するものも成功しません」

「……そうだな。ありがとう、穩」

「いえいえ」

そうだ、穩の言うとおり焦ってどうするのだ、孫仲謀。

私が焦ったら姉様を説き伏せるなんて到底無理に決まっているじゃないか。

私は姉様と本格的に話し合う前に失敗に気付いた事を感謝しながら一回深呼吸をする。

昂ぶっていた気持ち落ち着いていた事を確認した私は姉様の後を追って歴陽の町へ穩達とともに歩き出した。

歴陽にある姉様達が宿舎として借りている屋敷の会議室。

会議室にいるのは姉様、私、冥琳、穩、明命、思春、祭、結を始めとした孫家の中心を担う面々。

避難している小蓮とその護衛に就いている舞（程普の真名）を除いた全ての将が集っている状態だ。

そして私はその全員の視線を受けながら寿春で起きた事と美羽から持ちかけられた同盟について話している。

「……というわけで公路殿は我らとの同盟を希望しており、私はこの同盟に応じるべきだと思います」

私が全ての話終えると会議室は静寂に包まれた。

既に話の内容を知っている思春や穩を除いた全員が腕を組んで眉間に皺を寄せている。

実際に美羽から話を受けた私や思春もかなりの衝撃を受けた話だ。

皆私達が話した事の内容を頭で整理しているのだろう。

「冥琳に言われた時はまさかと思うたが……あの袁術が本当に莫迦

のフリをしておったとはのう…。それに我らと同盟を結ぼうとは…」

最初に沈黙を破ったのは祭だった。

その祭に釣られて結が唸る。

「袁術が我らと同盟を結ぼうとしているのは本気なのでしょうか？
我らを呼びよせて一網打尽とする為の罠とも考えられるのですが…」

「結殿、それはないでしょう。袁術が我らを叩くつもりならばこの1年我らに力を蓄えさせる隙等作らなかつた筈です」

その結に対して冥琳が軍師らしい予測を口に出す。

それを皮切りに祭や結のような古参の家臣の間で意見が次々と出るが、それに共通している事は同盟の内容よりも美羽の真意を測りかねているといった事だった。

そして祭達が議論している間姉様は腕を組んで目を閉じた状態のまま何も語ろうとしない。

そうした状態が暫く続き、祭達の話は同盟の内容に移っていったが流石に祭達は母様が死んだ戦に参加していた事もあって劉表に詫びを入れる事が納得出来ないようだ。

私は美羽と結ぶ事で孫呉が得られる利を説いて祭達を説得しようとするがあまり効果は上がっていなかった。

思春は私を擁護してくれるものの元々口が達者というわけではなく、明命は政治に疎いこともあって話自体についていく事が出来ていない。

また不思議な事に孫家の軍師である穂と冥琳は議論に少し口を挟むばかりで積極的に議論に加わっていなかった。

そうして会議が続く中で古参の家臣達の視線が姉様へと集中し始める。

どうやら姉様の意向次第という形に意見が傾いたようだ。

そして皆の視線が姉様に集中する中で、それまで一言も発さなかった姉様が口を開く。

「……蓮華、貴女はこの袁術ちゃんとの同盟を受けるべきだと思っているのね？」

「はい、姉様」

静かに私の目を見ながら話しかけてきた姉様に私も姉様の目を見返しながら答える。

「それが母様を私達から奪った相手に頭を下げる事になっても？」

姉様の目が細められ、周囲の気温が下がったように感じられる。

でも私はここで引き下がるわけにはいかない。

「……我らの私怨で民や兵を苦しめるわけにはいきません。私も母

様を殺した相手に頭を下げる事は複雑な思いではありますが……私達が怒りを呑みこむことで戦が防げるのならばそうするべきであると思います」

そう、私達がもし劉表や黄祖に復讐を挑めばそれは私憤となる。

孫呉の民を束ねる孫家の一員として……そのような私情で関係のない民達を苦しめる戦を起こすわけにはいかない！

私は湧きあがる恐怖心を抑えながら姉様と向かい合う。

「そう。でも私は袁術ちゃんとの同盟の為に母様の命を奪った奴らに頭を下げるたくはないわ」

「姉様！」

姉様の言葉に私は思わずその場で立ち上がる。

だが姉様はそんな私に対しても悠然と構えたままだ。

「落ち着きなさい、蓮華。こうして私達を対立させるのが袁術ちゃん狙いなのもしれないわよ？」

その姉様の言葉に私はハツとする。

確かに姉様の言う事にも一理ある。

美羽自身が狙っていないなかったとしても樂就達がそれを狙っている事は充分に考えられる。

でも私の脳裏には私が賛成した時に無邪気に喜んでいた美羽の顔が浮かぶ。

私は……私と志を同じくする者……私に初めて出来た友といえる存在である美羽の事を信じたい！

「そうかもしれませんが……。ですが私は美羽が言葉にした想いは本物であると信じています！」

私が胸を張りながら言い切ると姉様は黙ってその場から立ち上がった。

「ふーん……。袁術ちゃんの真名を口にするなんて私が知らない間に随分と袁術ちゃんと親密になったようね。さては袁術ちゃんに籠絡でもされたのかしら？」

「姉様！私は美羽に籠絡なんてされていません！」

姉様の言葉に思わず私は荒声を上げて姉様を睨みつける。

だが姉様は私の視線を軽く受け流しながらそのまま会議室に接している中庭に繋がる出入り口まで移動した。

「さてどうかしらね。いずれにしてもここで私達が対立していても時間の無駄だわ。本当に貴女が袁術ちゃんとの同盟を結ぶつもりなら私にかかってきなさい！」

姉様は高らかに声を上げつつ腰に差していた南海霸王を抜いて切っ先を私へと向ける。

その姉様の目は真剣そのもので冗談をいつているような節は全くない。

姉様は本気だ！

思春が私を心配そうに私を見上げるが、私は思春に向かって一つ頷いた。

ここで私が姉様を止めなければ姉様は本当にこのまま寿春に向かって軍を進めるだろう。

そうすれば美羽の軍と姉様の軍がぶつかって大きな戦が起きる事となる。

私が寿春で見た美羽の兵達はかなり鍛えられていた。

姉様の軍と美羽の軍がぶつかれば間違いなく双方に大きな被害が出るし、寿春の民は恐怖に陥るに違いない。

その最中で孫呉の兵や祭達が傷つくことは避けられないだろう。

……そんな無意味な戦を起こさせるわけにはいかない！

私は……要らぬ戦を起こさないように美羽と手を携える道を選びたい！

私は腰に佩いていた母様から貰った剣を抜いて切っ先を姉様に向ける。

「姉様！私はここで必ずや姉様を止めてみせます！だから約束して

下さい！私が姉様に勝てたら美羽と同盟を結ぶと！」

「へえ……私に一度も勝てた事のない蓮華が言うじゃない。良いわ、約束してあげる。蓮華が私に勝てたら孫家は袁術ちゃんと同盟を結ぶわ」

私の宣言に姉様は不敵な笑みを浮かべる。

今ここに私に絶対に負ける事が出来ない戦いが始まった。

中庭でお互いに剣を構えた姉様と私が少し間を挟んで対峙する。

先程の姉様との遣り取りで何も口を挟まなかった冥琳達が見守る中で私と姉様の決闘が行われよとしていた。

正直今まで訓練していても一度も勝てる事の出来なかった姉様と戦う事を怖いとは感じるし、勝てるかと聞かれれば勝てると言い切る事は出来ない。

しかしそれにも拘わらず私の心は自分でも驚く程に落ち着いていた。

それは言うなれば嵐の前の静けさに等しいのかもしれない。

私の心の中には熱い思いがある。

私がこの戦いで背負っているのは孫呉の…呉の地の民と孫呉の皆の未来、そして美羽との志だ。

私の心の恐怖や姉様に勝てるかどうか等問題ではない。

私は姉様と戦い、勝たなければならないのだ。

「さあ、蓮華。……覚悟は出来てるかしら？」

私の目の前にいるのは孫呉の王。

私の前に今まで常に立っていた姉様。

私は……姉様に絶対に勝つ！

「覚悟等姉様に剣を向けた時から出来ています」

「へえ……いい返事じゃない」

私の返事を聞いた姉様はゆっくりと片手に持っていた南海霸王を一段に構える。

その瞬間に姉様から殺気が噴き出した。

その殺気を受けつつ私は剣を正眼に構える。

私と姉様の間に凄まじいまでの緊張感が漂った。

「行くわよ！蓮華！」

「私は必ず姉様を止めて見せます！」

お互いに裂帛の声を上げた後、姉様が地を蹴った。

凄まじい速さで私に近づきながら南海霸王を振ってきた姉様の剣を私は剣でしっかりと受け止める。

流石に姉様の剣は信じる事が出来ない程に重い！

だけどそれは決して受ける事が出来ない程の重さではない！

「この一撃をしっかりと受けきるなんて結構やるじゃない」

初撃を防がれた姉様は私と鏖兢り合いをするような事はせずに私から一旦距離を取った。

その姉様の顔に浮かぶのは笑みばかりで攻撃を防がれた事に対する落胆は微塵もない。

「私は姉様に負けるわけにはいかないんです！」

「言っわね。でも……防ぐだけじゃ私に勝つ事なんて出来ないわよ！」

姉様は言葉を言い終えないうちに動き出しながら南海霸王を振るっ

てくる。

「そんな事は承知の上です！」

次々と繰り出される姉様の斬撃を私は剣で受け流し続ける。

一方的に私が姉様に攻められているという展開になっているが、それは私も承知の事だ。

姉様の剣は攻撃の剣。

その激しさはまさに天下逸品のものだ。

攻撃における限り私が姉様に勝つことは難しいだろう。

私から斬り込んだところであっさりと姉様に返り討ちにされるのが関の山だ。

でも私は攻めに関しては自信はないが、守りの剣に関してはかなり自信がある。

思春が私の護衛に就いてから私は思春とかなり剣の稽古をしてきたが、その模擬戦の中で私は思春に勝つことはほとんど出来なかった。

そう、ほとんどだ。

私が思春に勝った事が無いわけではないのだ。

その勝利は思春の剣を私が受け続けて一瞬思春が息を吐いた時の隙を突くことで得られたもの。

攻撃側と防御側では得物を激しく動かす分攻撃側の方が体力のを多く使う。

そう、私は姉様の剣を受け続けて姉様が一旦攻撃の手を休める瞬間を狙っているのだ。

これは姉様の攻めの剣と私の守りの剣の勝負。

私が姉様が疲れるまで姉様の剣を捌き続けることが出来れば私の勝ち。

逆に私が姉様の剣を捌く事に失敗すれば姉様の勝ちとなる。

「ほらほらほらっ！！！！」

「……………くっ！！！」

姉様の攻撃は時間が経つにつれて激しくなるものの私はそれをなんとか剣で受け続ける。

いつまで続くのか分からない程に長く、絶える事のない姉様の攻撃。

私はその剣を必死に受け続けて……………見つけた！

それまで受けていた姉様の剣より一際鋭い斬撃が私に襲いかかる。

ここだ！

姉様は一旦距離を取るつもりで牽制として強い斬撃を放ったんだろ

う。

だが私はその斬撃を受けきり、姉様が後ろに飛んだ瞬間に合わせて
一歩前に踏み出す！

姉様の驚いた顔が視界に入ったものの私は構わずに剣を薙ぐ。

私の振るった剣は狙い違わずに姉様の持っていた南海霸王の腹に当
たってその衝撃で南海霸王が姉様の手から離れた。

勝った！！

私は思わず心の中で喜びの声を上げる。

しかし私が勝利を確信した次の瞬間、私の袖が何かに引っ張られて
それにつられて私の視界が急に回転する。

そして気付けば私は地面に叩きつけられ、私の上に馬乗りのなった
姉様に腕を締めあげられていた。

「…ぐう！？」

腕の痛み思わず私は呻き声を上げる。

「残念だったわね、蓮華」

私の上に馬乗りとなった姉様の声を聞いたその瞬間、私が姉様に自
分が負けた事を悟った。

私は……美羽の期待に応える事が……孫呉の皆を守る事が出来なか

ったのか……！

S I D E 孫権 E N D

S I D E 孫策

「残念だったわね、蓮華」

私は蓮華の上に乗って背で蓮華の腕を締めつつ蓮華に声をかけた。

「最後の一撃は見事だったわ。でもそこで油断したのがいけなかったわね」

そう、蓮華が私が持っていた南海霸王を弾いたあの一撃は本当に見事だったわ。

あのまま蓮華が油断せずに私に追撃をかけていたら私は恐らく負けていたでしょうね。

あの時蓮華が一瞬気を抜いた御蔭でなんとか寝技に持ち込むことが出来たけど。

「蓮華様!!」

私が蓮華の上に跨ったまま蓮華に話しかけていると私と蓮華の戦いを見守っていた思春がこちらに駆け寄ってきた。

それを見た私は蓮華の腕から手を離して蓮華の上から立ち上がり、蓮華から離れる。

「蓮華様！大丈夫ですか!!？」

思春が蓮華に駆け寄って蓮華に身体を助け起こすと思春の姿を確認した蓮華はその場で泣き始めた。

「思春…？うう…ごめん、皆…ごめん…みつ…私…私……」

涙声で聞き取りづらいけど蓮華は負けた事自体が悔しくて泣いているわけではないわね。

ああ、我ながら私って本当に今日は悪役そのものよね。

「全く……泣き虫が治ったと思ったたら相変わらずのようね、蓮華？」
「雪蓮様！」

私が蓮華に歩み寄ろうとすると思春が咎めるような視線を私に送ってくる。

でも私はその思春の視線を無視しながら蓮華の前に立った。

私の事に気付いた蓮華が土と涙でグチャグチャになった顔を上げる。

「ほら、これで顔を拭きなさい。これから袁術ちゃんと同盟を結びに寿春まで皆で行くんだから」

「……ふえ、ね、姉様!？」

私が布を差し出しつつ蓮華に声を掛けると蓮華は布を受け足らないまま泣くのを止めて目を見開いて私の顔を見つめる。

まああれだけ悪役に徹していたんだから仕方が無いのは分かるけど……少し驚き過ぎじゃない？

「な、何で？だ、だって私は姉様に負けて……わつぶ!？」

私は呆然とする蓮華の顔の汚れを布で拭きとりながら笑う。

「確かに私は蓮華が私と戦って勝ったら袁術ちゃんと同盟を結ぶって約束したけど、私が勝ったら袁術ちゃんと同盟を結ばないなんて言っていないわよ？」

そう。

私は蓮華に戦うように誘導はしたけどその結果については言及していない。

私の言葉の意味を蓮華は暫く理解出来なかったようだけど少しすると頭が回転し始めたようで蓮華の顔が赤くなった。

「ね、姉様、私を騙したんですか!？」

「あら、騙したなんて人聞きが悪いわね？私はただ蓮華の覚悟を確かめただけよ。……本当に強くなったわね、蓮華」

私は蓮華の咎めを軽く受け流すと怒っている蓮華に手を伸ばしてその頭を自分の胸に抱き寄せる。

そう、蓮華は本当に強くなった。

人としても、王としても。

今までの蓮華は王としての素質は見る事が出来たものの、何か芯のようなものが足りなかった。

でもさっき私と堂々と渡り合った蓮華からは何か信念のようなものが滲み出ていた。

私の知らない間に何があったのかは知らないけど……袁術ちゃんとの出会いで蓮華は何か大切なものを手に入れたようね。

何か実の姉としては少し袁術ちゃんに妬けるけど。

抱き寄せた蓮華は最初呆然としていたけどやがて涙腺が緩んで私の胸に顔を埋めながら大声で泣きだした。

「うわーん。姉様ー！ー！！」

「はいはい、よしよし。意地悪して悪かったわね」

私は強く身体を押し付けてきた蓮華を支えつつその背中を撫でる。

こうして蓮華を宥めるのも久しぶりね。

しばらく泣き続けた蓮華が泣き止むと私は蓮華を私の身体から離して自分で立たせた。

「さあ、さつきも言ったけどこれから袁術ちゃんに会いに行くわ。袁術ちゃんと話をつけたのは蓮華なんだから……蓮華にはこれから頑張って貰うわよ？」

「は、はい！姉様！」

しっかりと頷いた蓮華の様子を見て私は蓮華の肩を叩く。

「それじゃさつさと身体を洗ってきなさい。私が言うのも難だけどね」

私に言われて初めて自分の状態に気付いた蓮華は泥と汗に塗れた自分の身体を見て顔を一気に赤くする。

「もう！姉様ってば！」

「あはは、ごめんごめん」

私は軽く謝りつつ、頬を膨らました蓮華が思春を連れて屋敷の中に戻っていくのを私は立っただま見送った。

「全く……過激な芝居を打ったものだな、雪蓮」

「仕方が無いじゃない。ああでもしないと蓮華の覚悟は分からなかったわよ」

私が口を尖らせて後ろを振り向くとそこには冥琳が立っていた。

「確かに蓮華様の覚悟を確かめる必要はあったが……真剣で戦うのはやり過ぎだろう。思わずヒヤヒヤしたぞ」

「こつちも母様の仇が掛っているのよ？それを諦めるとしたらそれぐらいの覚悟は必要よ」

私は袁術ちゃんと同盟を結ぶ事については異議はない。

もしも私達が袁術ちゃんの下に入らなければ生き延びる事が難しかったであろう事は分かっているし、袁術ちゃんの私達に対する扱い

は決して悪いものではなかった。

その袁術ちゃんが孫呉の地を返してくれるというのならそれには異議がある筈がない。

ただ私の胸に引っかけたのは袁術ちゃんから条件に出されたという劉表との和睦。

孫呉の未来を考えれば受け入れざるを得ない条件である事は私にも分かっていてる。

仇を討ったところで母様が戻ってくるわけじゃない。

それは分かっているけど多分私にはその感情を抑える事は出来ない。

やはり母様を殺した相手は憎いのだ。

仮にそれが戦の中での事であったとしても。

私が孫呉を率いる限り孫呉が母様の仇を諦めることはないだろう。

でも孫呉を率いるのが蓮華であれば話は別だ。

蓮華がその条件を受け入れた上で袁術ちゃんと歩むと言っならば私は孫呉を蓮華に託す。

蓮華という家族の為ならば私は母様に対する自分の気持ちを抑える事が出来るから。

だからこそ蓮華の覚悟を極限の状況の中で試す必要があった。

本当に蓮華が自分の道を見定めていて、その道を歩む覚悟があるかどうかを。

蓮華に覚悟があるのならば、屈辱や祭達が抱えているであろう母様への想いも全て私が引き受けた後で孫呉の未来を蓮華に委ねる。

私はそう決めた。

そして蓮華は私の予想以上のものを私に見せてくれた。

「本当に引退するつもりか、雪蓮？」

「ええ、すぐにはないけどね。でも状況が安定したら私は後を蓮華に任せるわ」

冥琳の声はかなり沈んでいる。

やっぱり長い付き合いだけあって冥琳は私の考えている事が分かっていたみたいね。

「お前の事だ。止めても無駄……だろうな」

「ええ……。勝手に決めてごめんね、冥琳」

かつて私は冥琳と孫呉の天下を夢見た。

でも私がやるうとしていることはその夢を捨てることに等しい。

我ながら勝手なものだと思っわ。

「いいさ。お前の独断専行には慣れていないからな。……それに雪蓮。まだ完全に袁術が信じられると決まったわけではないぞ?」

「大丈夫よ。多分袁術ちゃんは私達を悪いようにはしないわ」

袁術ちゃんが私達を罠に嵌めようとしているとしたら今回の事は余りにも手が込み過ぎているわ。

それにどうも嫌な予感が全然しないのよね。

「またいつもの勘か?」

「ええ、勘よ。それに人を見る目がある蓮華があれ程袁術ちゃんを信じてるんだから冥琳も納得出来るんじゃない?」

「……まあな」

「さて、それじゃ私達も準備をしましょうか?」

私は冥琳にこの話は終わりとばかりに声を掛けると屋敷に戻る為に歩き出す。

蓮華をあそこまで変えた本当の袁術ちゃんってどんな感じかしら?

それに楽就って奴も興味があるわね。

寿春に着くのが少し楽しみだわ。

第25話 姉妹（後書き）

作者は基本的にキャラクターはしない予定なので……こういう形に収まりました。

第26話 再起（前書き）

宣言通り挿入です。

第26話 再起

SIDE 張勳

「はあ……本当にこれからどうしたらいいんですかね……」

あの悪夢のような日から1週間程。

あの日以来ずっと殆ど自分の部屋に閉じこもったまま過ごしている私は溜め息とともに何度呟いたのかも分からなくなった言葉を紡ぐ。

昔から思い焦がれていてようやく私の手に入ったように見えたお嬢様。

そのお嬢様の側にいる事の出来たこの1年という期間はまさに私にとって至福と言えるようば期間だったなあ。

でもお嬢様は私の手に収まったふりをしていただけで自分の意志で私の手から抜け出して去っていつちゃった。

あの樂就さんの所へと。

今の私は滑稽としか言いようがないよね。

私は一人何も知らされずに仮面を着けたお嬢様が手に入った事を喜び、舞台の裏の事に気付かずにお嬢様や樂就さんの手の上で踊って

いただけの道化。

そして舞台が終わるとともに私は全てを失っちゃった。

私の持っていた大將軍の位は無かった事にされて今の私には何の役職も無い。

ようやく手に入れたと思ったお嬢様の信頼も。

お嬢様から向けられていた笑顔も。

このお城での居場所も。

そして何かをする為の気力も。

全てが消えて無くなっちゃった。

ううん、私は手に入れたつもりで実は何も手に入れる事が出来ていなかったんだ。

私が手に入れたと思っていたものは全て幻に過ぎなかっただけの事。

……なんでこんな事になっちゃったんだろう？

私はただお嬢様の側にいてそのお世話をしながらお嬢様を可愛がってたかっただけなのに。

それだけが私の生き甲斐だったのに。

私が生まれた張家はお嬢様の袁家と遠縁に当たる家。

袁家との結び付きを深めたいというお父様の思惑もあって私はお嬢様のお守役となるべくして育てられた。

実際に私はお嬢様が幼い頃に顔を合わせていたりもする。

そしてその時私は無垢なお嬢様の可愛らしさに衝撃を受けたんだ。

ああ、お嬢様を可愛がりたい。

お嬢様を私だけのものになりたい。

もっとお嬢様の色々な顔を見たい。

この可愛いお嬢様をいじくり回してその困ったところを愛でたいって。

お嬢様に会った瞬間にそのような感情が私を支配したのは今でも良く覚えてる。

そして私はお嬢様のお世話役としてお嬢様のお側にお仕えする事を楽しみにしていたのに……。

その思いが叶わなかった。

何故なら私がいよいよお嬢様のお側に上がるのかという時に袁逢様から私がお側に上がる事を断られたから。

『済まないがもう娘を託すにふさわしい世話役が見つかったから』と。

その後お嬢様のお側にお仕えする事が叶わなかった私はそれでもいつかお嬢様にお仕えしようとその機会を伺ってた。

そして袁逢様が亡くなった時その機会は訪れた。

お嬢様が太守として南陽に赴任する事となって家臣を集めていた時によろやく私はお嬢様にお仕えする事が出来た。

でもその時には既にお嬢様の側には楽就さんがいて……私が入りこめる隙は無かった。

それは本当に悔しかった。

ようやくお嬢様のお側に上がったと思ったのにそのお嬢様は楽就さんに独占されていたんだから。

それでも暫くしたら楽就さんがお嬢様に嫌われて、ようやくお嬢様が私のもになったと思ったのに……またお嬢様は楽就さんの下へ戻っていつてしまった。

なんでお嬢様の側にいるのが楽就さんで私じゃなかったのかな？

楽就さんさえいなければ私はもっと昔からお嬢様にお仕えすることが出来たのに。

楽就さんさえいなければお嬢様は私のものだったのに。

楽就さんさえいなければお嬢様を私の好きに出来たのに。

樂就さんさえいなければお嬢様を私の好きな色に染め上げる事が出来たのに。

樂就さんさえいなければ……。

樂就さんさえいなければ……。

かく就さんさえいなければ……。

かくしゅウさんサエイなけれ……。

ガクシユウサンサエ……。

……。

…。

ジャアジャマナガクシユウサンヲケシテシマエバ？

ふと私の頭の中にそんな考えが思い浮かぶけどその考えはあの光景によってすぐに打ち消される。

今でも鮮明に思い描く事が出来るあの日の光景。

あの日樂就さん達によって豪族さん達が一網打尽にされた後、お嬢様はすぐさま樂就さんの胸の中へと飛び込んでいった。

今まで私に向けてくれた事が無いような最高に輝くような笑顔が浮かべて。

楽就さんを恨む気持ちはあるし、私を騙し続けていた他の人達やお嬢様を恨む気持ちもあるけど……。

あのお嬢様の笑顔を思い浮かべるとその気持ちを糧に何かをしようという気持ちも起こらなくなってしまう。

そうした気持ちが消えてしまった後に残るのは今何も持っていない全てを失ってしまった抜け殻も同然の私。

苦しくて…辛くて仕方が無いけど、こんな私を助けてくれる人はいない。

何故なら私は今までお嬢様一筋で生きてきたから。

そのお嬢様がいなくなれば私には誰も残らない。

本当に私は一体これからどうしたらいいんだろう？

この数日で何度抱いたかも分からない感情に私が身を沈めていると、私以外誰もいない筈の部屋にいきなり音程の外れた琵琶の音が響く。

ふと私が顔を上げるといつの間にか部屋に白い派手で妙な服を着た

男の人が琵琶を抱えて立っていた。

一体誰、この頓珍漢な格好をした男は？

何だか少し見覚えがあるような気もしなくはないけど。

「お嬢さん暗い顔してるなあ〜」

男の人はどう聴いても下手くそにしか聴こえないような琵琶の音を鳴らしながら私に近づいてくる。

本人は格好つけてるのかもしれないけど、何もかもが盛大にズレているとしか思えない。

空気というものが読めないのかな、この頓珍漢男とんちんかんさんは。

「いきなり現れた頓珍漢男さんに言われる筋合いはないですよ。頓珍漢男さんが誰なのか知りませんが今の私は貴方と話すような気分じゃないんです。言葉を理解出来る頭があるのならさっさと私の前から消えて下さい」

「なんだ、毒を吐けるくらいの元気はあるじゃないか」

頓珍漢男さんは私の毒舌を気にもせず私の前に立つとそのまま床に腰を下ろした。

そして何処からか何かが入った竹の皮で出来た包みを取り出すとその包みを私の前で解く。

「女官の人に聞いたんだがお嬢さんこのところ何も食べていない

ようじゃねえか。簡単に食べれるものを持ってきたんだ、食わないか？」

竹の皮の中に入っていたのは炊いたお米を三角の形に丸めたもの。

竹の皮の中に3個入ったそれを頓珍漢男さんは私に差し出してくる。

私はそんなものを受け取るつもりは無かったけど、私を受け取る様子が無い事を見た頓珍漢男さんはその一つを手にとって私の前で食べ出した。

「こいつはおむすびって言ってな。結構美味いもんだぜ？」

頓珍漢男は本当に美味しそうにおむすびというらしいものを頬張る。

その姿を目にした瞬間私のお腹の虫が鳴る音が響いた。

こんな…男の人の前でお腹を鳴らすなんて！

一気に自分の顔が赤くなる事を感じた私は私の目の前に差し出された白いおむすびを勢いよく手に取ると一気にそれに頬張った。

途端に一気に口の中に広がったあまりにもな酸っぱさに私は思わず顔を顰める。

「酸っぱ……いつ……!?」

何なのこの酸っぱさは!?

思わず涙目になって私が頓珍漢男さんを睨み付けると腹の立つ事に

頓珍漢男さんは笑いながら竹筒を差し出してきた。

「ははは、これを最初に食べた奴は皆必ずそう言うんだ。でも慣れればこの酸っぱさが癖になるぞ？落ち着いて少しずつ味わって食べてみな」

私は黙って竹筒を受け取って中に入った水を飲む。

口の中の酸っぱさが落ち着いた私は改めて手に持ったおむすびを見してみる。

私が嚙ったことで半分ほどの大きさになったおむすびの中には赤い色をした何かが入っていた。

酸っぱいと感じたものはこれなんだろう。

私は恐る恐るそれを一口それを含むと……目を見開いた。

確かにそれは酸っぱかったけど、最初に感じたような酸っぱさは無い。

むしろ酸っぱさと塩気が同居していて、周りのご飯と合わさると不思議な美味しさが広まった。

そして咀嚼している内に唾液と合わさることで甘みさえも出てくる。

思わず夢中で私はそのおむすびに齧り付き、気が付くと私は2つのおむすびを食べ終えてしまっていた。

「ははは、な、美味かっただろ？梅おむすびって言ってな、姫さん

もこれが結構好きだったりするんだぜ？」

「……貴方一体誰なんですか？」

笑いながら馴れ馴れしく私に話しかけてきた頓珍漢男さんを私は思わず睨み付ける。

『姫さん』っていうのは多分お嬢様の事だと思っ。

お嬢様が私が今食べたものが好きだなんて私は知らなかった。

それを知っているっていう事は頓珍漢男さんは多分楽就さんの仲間なんだろうけど、私はこの人の事なんか知らない。

「俺は？燕。姫さんの元で偵察部隊の隊長をやってる」

「偵察部隊……」

また私の知らない事だ。

私はあれ程お嬢様のお側にいたのに重要な事は全部私には伏せられていた。

その事実私がお嬢様に信頼されていなかった事を思い知らされる。

本当に私はお嬢様にとって必要のない存在だったんだ……。

「……で、お嬢さんはこれから一体どうするんだ？」

私が新たに発覚した私の知らない事に落ち込んでいると？燕さんが

私の顔を覗き込んできた。

「どうするって言われても……私自身どうしたらいいかなんて分からないですよ。何せ私はお嬢様に見捨てられたんですから」

そう、私はこれまでお嬢様一筋で生きてきた。

そのお嬢様に見捨てられた今、これから何をしたらいいのかなんて私には良く分からない。

「姫さんに見捨てられたねえ……。俺には姫さんがお嬢さんを見捨てたとは思えないけどな」

「何勝手なことを言ってるんですか！？今私がこうしてここにいるのが私がお嬢様に見捨てられた何よりの証ですよ！！」

勝手な事を話す舒邵さんに私は思わずカッとなって怒鳴った。

でも怒る私に対して？燕さんは全く動じる様子がない。

「どうして今ここにいる事が姫さんに見捨てられた証になるんだ？」

「え………？」

それまで浮かべていた笑みを消して真顔で私に尋ねてきた？燕さんに私は思わずきょとんとしてしまった。

それは一体どういう意味なの？

「あんだ何か勘違いをしていないか？今姫さんの周りには奴らは

何もせずに姫さんの周りにいるわけじゃないぞ。皆も姫さんの想いを理解して姫さんを支えようとして仕事に取り組んでいるからこそ姫さんの周りにいるし、姫さんも信頼しているんだ。あんたはそういう意味で姫さんを支えようとした事があるのか？」

「それは……」

それまで身に纏っていた軽薄そうな雰囲気や嘘のように消え去り、真面目な雰囲気や身を纏った？ 燕さんの問いに私は何かを言おうとしたけど言葉に詰まってしまった。

「人は欲で動くもんだ、欲で姫さんに仕える事は否定しねえよ。蒼の嬢ちゃん達も姫さんの夢を支えたいって欲から動いてる訳だしなだがあんたはそういう姫さんの内面を考えた事はあるのか？ あんたはただ自分の欲情を満たす為に姫さんを愛玩動物として可愛がっていただけ…… 政務の仕事にしてもその姫さんの世話に付随する事だったから仕方なくやっていただけだ、違うか？」

否定できない。

私は？ 燕さんの言葉に何も言い返す事が出来なかった。

確かに私はお嬢様のお姿を近くで見たいからこそお嬢様にお仕えしてきた。

甘やかしたのもお嬢様が可愛くて仕方が無かったからこそ。

「姫さんはああ見えて自分に厳しいんだ。そんな姫さんが自分を甘やかそうとするだけで本来の仕事を真面目にしない奴を信頼する筈がないだろ。それともなんだ、あんたは姫さんの事を思っただけで仕事を

しつかりとこなした事があるのか？」

「……」

何も言う事が出来ない。

私はお嬢様を可愛がる事だけを考えていて、お嬢様の願いを聞いていたのもお嬢様の為にというよりも私がお嬢様の色々な顔をみたいからといった理由。

仕事は出来る人に任せればいとはかりに適当な人に振り分け、私は始終お嬢様の側にいることだけを考えていた。

「大して功績を上げたわけでもない信頼出来ない奴を姫さんの側の置いておく筈がないだろ？それに今お嬢さんがここにいるのは姫さんがお嬢ちゃんを見捨てていない証なんだぜ？」

「え？」

それまで私に淡々と事実を継げているだけの？燕さんの口調が柔らかくなったと同時に告げられた思わぬ言葉に私は思わず顔を上げる。

私はお嬢様に捨てられたと思っていたのに……そうじゃない？

「本当に姫さんがお嬢さんを見捨てているなら役職を失った奴をずっとここに置いておく筈がないだろ。普通ならお役ご免とばかりに追い出しているぜ？それにな、姫さんはこの1年でお嬢さんが自分から間違いに気付くようならお嬢さんを仲間に引き入れるつもりだったんだぜ？」

「私を仲間には？」

確かに？燕さんの言う通り、何も仕事がない私をこの城に置いておく理由はない。

それは確かに納得が出来るけど……お嬢様が私を仲間にするつもりだった？

思わぬ言葉に私は呆然としてしまう。

「ああ、お嬢さんが姫さんに少しでも民の事を気に掛けるような諫言をするようだったらな。結局お嬢さんは姫さんを甘やかすばかりだったから無理だったけど。それでも姫さんはお嬢さんが自分の間違いに気付いて真面目に仕事をしてくれる事を期待してるんだよ。今お嬢さんがここに居るのも泉達が追放しようと考えていたのを姫さんが止めたからだ」

「お嬢様……」

お嬢様が私を庇ってくれた。

今まで知り得なかった事実私に私の目に涙が浮かぶ。

思わず泣き崩れそうになった私を支えてくれたのは？燕さんだった。

「さて、お嬢さんはどうする？もしももう姫さんの事なんかどうでもいいと考えているようなら俺も止めはしないさ、ここから出て行けばいい。でもお嬢さんがもう一度一からここでやり直したいというのなら……」

私はお嬢様に捨てられていたと思っていたのに……お嬢様はまだ私を信じていてくれていた。

そしてそのお嬢様は私にまだ期待してくれているという。

自分の欲望にはかりに忠実でその実お嬢様自身の事を考えていなかったこの私を。

私の脳裏にあの日に見たお嬢様の笑顔が浮かぶ。

見たい。

あのお嬢様の笑顔を……もっと近くで。

あの笑顔で私のことを見て貰えるようになりたい。

「やります！頑張つて……お嬢様に信じて頂けるようになります！」

思わず私が叫ぶと？燕さんは一瞬驚いた顔をしたものの、ニヤツと私が思わずドキツとするような笑みを浮かべた。

「なら信用はお嬢ちゃん自身の働きを示して勝ち取るしかないな。仕事が無いなら自分に出来る事を探せばいいんだ。うちの奴らは皆さっぱりとした性格の奴ばかりだからな。お嬢さんが性根を入れ替えて働きを示せば……必ず認めてくれるさ」

「はい！」

私は？燕さんの励ましともとれる言葉を聞いた後にすぐに立ち上がる。

私はこんな事をしている場合なんかじゃない！

「？燕さん！色々ありがとうございます！おむすび美味しかったです！」

「ああ。それとお嬢さん、一つ言いにくい事があるんだが……」

？燕さんにお礼を言った後で私は部屋を飛び出ようとして……？燕さんに呼び止められた。

「何ですか!？」

私が振り向くと？燕さんが決まり悪げに頭を掻いている。

一体何なのだろうか？

「仕事をする前に…身体を洗った方がいいと思うぞ？」

「へ?」

思わぬ？燕さんの言葉に私は一瞬きょとんとした後で自分の腕を嗅いでみる。

するとさっきまでは気付かなかったものの、私の腕は少し臭った。

そういえば……一週間程お風呂に入っていない。

？燕さんに言われた言葉の意味を理解した瞬間に私は顔が一気に赤くなる事を感じた。

思わず？燕さんを怒鳴りつけようかと思ったけど頭にある考えが浮かんだ私はそれを押さえつける。

私は顔を上げて？燕さんに向けてにこっと微笑んだ。

「お気遣いありがとうございます。私からも言わせて頂きますけど……格好つけてるのかもしれないんですがその格好全く似合っていますよ？というより今の？燕さんって笑いどころを外した芸人にしか見えません。あと私はお嬢さんじゃなくて張勳です。七乃っていう真名もあります。それと私って狙った獲物は絶対に諦めない夕子なんですよね。覚悟して置いてくださいね、頓珍漢男さん？」

私は？燕さんの返事を待たずにそのまま部屋を出て行って一気に駆け出す。

さて……お嬢様のあの笑顔の為に張志真、頑張るとしましょうか

S I D E 張勳 E N D

「……覚悟しておいて下さいね、頓珍漢男さん？」

そんな言葉を残して張勲の嬢ちゃんが部屋を駆け出していった。

やれやれ、何とか上手くいったようだな。

俺は一仕事が終わった事を確信して安堵の息を吐く。

この寿春の制圧作戦が成功してから1週間程、俺はずっと張勲の嬢ちゃんの事が気にかかっていた。

この1年間俺達は策の為に本人には何も知らせずにあの張勲の嬢ちゃんを利用してきた。

まああの張勲の嬢ちゃんは姫さんに何か歪んだ愛情を持っているようだったから泉達が警戒する事も分かる。

実際に何も知らせない状態で寿春に送ったら姫さんを甘やかすは仕事は真面目にしないわでやりたい放題だったからな。

この1年の行動を見る限りもしも姫さんが泉じゃなくて張勲の嬢ちゃんに育てられていたら間違いない性根がねじ曲がった人間になっちまっていた事だろうさ。

言ってみりゃ今回の事については張勲の嬢ちゃんの自業自得って事なんだが……あの嬢ちゃんを利用したまま放置しとく事がどうも拙

い気がしていたんだ。

今回の事は張勲の嬢ちゃんからしてみたら姫さんから裏切られたように思えるだろうし、その姫さんの側にいるのが泉ともなれば気が気じゃない筈だ。

下手すりゃ張勲の嬢ちゃんがこの事を逆恨みして姫さん達を害しようとするかもしれない。

俺の杞憂かもしれないが、どうも泉も姫さんもその辺りの事に鈍いところがあるからな。

姫さんは人の悪意自体には結構敏感なんだが……基本的に善人だから人の善意を信じすぎるし、泉はそういった人の裏については理解しているんだが先の事を考えすぎて少し足元が疎かになる事がある。

今回泉や蒼の嬢ちゃん達は張勲の嬢ちゃんを警戒して追放しようとしたんだが……姫さんの主張で張勲の嬢ちゃんを女官にしても一度機会を与える事にしたんだ。

それはいいと思うんだが、その後何も張勲の嬢ちゃんい対して行動を起こそうとしなかったのは問題だと思う。

孫家への対応やら寿春の後始末やらで今泉達全員が忙しいから、恐らく張勲の嬢ちゃんの事は後回しになっていたんだらう。

だけど俺はあの日豪族達を捕まえた後に姫さんと泉の事を暗い絶望に染まったような目で見ていた張勲の嬢ちゃんの姿をよくはつきりと覚えている。

ああいう目をした人間はどういう行動に出るか分からないから怖いんだ。

だから俺は張勳の嬢ちゃんについて注意していたんだが……偵察の仕事から数日ぶりに戻って見たら張勳の嬢ちゃんが殆ど部屋に閉じこもったきりだって言うじゃねえか。

これは拙いとはかりに部屋に忍び込んでみたら張勳の嬢ちゃんは薄暗い部屋で痩せこけた頬に目だけをキラキラさせて何やらブツブツ言ってるやがった。

これ以上放っておいたらありや間違いなくとんでもない行動に出るか心が壊れちまっていたな。

何とか説得が成功して良かった、本当に間一髪だったぜ。

あれだけ目に輝きを取り戻せていればもう十分だ。

あとはあの張勳の嬢ちゃん次第だが……元々人遣いの才能はあの泉や蒼の嬢ちゃん達が判を押す程に持っているんだ、真面目に仕事をこなしさえすれば大丈夫だろう。

俺はやれやれとはかりに床から立ち上がり、目の前に置かれていた竹皮の包みを拾う。

それにしても昼飯用におむすび持っておいて良かったぜ。

このおむすびがあったからあの張勳の嬢ちゃんも警戒を解いてくれたよなもんだしな。

でもこのおむすびが姫さんの大好物だつていうのは本当の事だけだ……このおむすびを考えたのが泉だつて知っていたら張勳のお嬢ちゃんはどう思うかねえ？

元々俺達が洛陽にいた頃馬で遠くに出掛ける時の昼飯につて泉が作り始めたものだからな。

おむすびの具は色々あるんだが、最初に泉が作ったおむすびの具だった梅干しが気に入ってる。

最初泉が薬の材料のコレを作っていた時は驚いたもんだが……コレが中々慣れると美味しい。

防腐の効果もあるからまさに俺のような偵察任務につく奴にはうってつけのもんだ。

今じゃ南陽で梅干しは梅酢と一緒に大量に作っている。

漬物だから保存が効くし、これさえあれば飯が進むから兵糧食にはうってつけだ。

しかも傷の消毒とかにも使えるし、梅干しを食べていると食中毒や病気にもなりにくい事から今じゃうちの軍ではこれは無くてはならないものになってる。

いつも兵糧として完備してるから俺も簡単にこの梅おむすびを作れるわけだ。

それにしても梅干しがなければ俺はおむすびをこの場に持っているかっただろうから、泉の奴は自分では気付かずに誰かを助けている

んだよなあ……。

あいつとはお互い浮浪児だった頃からの付き合いだが……あいつと付き合っていると本当に面白くて堪らない。

何処から知ったのか分からないがあいつの知識はそこが知れない。

この梅干しやおむすびにしてもそうだが、突拍子もない事を考え付く。

それでいて泉は妙なところで面倒見がいい。

いくら孤児仲間つっても普通自分が生活の種にしていた釣りとかの方法を俺に教えるかね？

しかもあいつは袁家に引き取られた後で時々俺の事を探しに裏町にまで来たんだ。

俺は泉に恩があるし、俺なんかとは関わらずに幸せになつて欲しかったから会わないように気を付けていたんだが……数年後に偶々会ったら躊躇せずに俺を姫さんに紹介しやがった。

その御蔭で俺は今ここにいる。

もしも泉と出会わなきゃ、俺は何処かで山賊でもやっていたのかもしれねえ。

そんなあいつだからこそ俺はこうして陰ながら手伝ってやりたくなるんだよなあ。

泉が姫さんの影になって働くって決めたように俺はさらにその泉の影になるって決めてるからな。

今回みたいに泉の手が回らないところを何とかするのも俺の仕事のうちだ。

……さて、こつちの問題も片付いた事だし……隠密の仕事に戻るとするかねえ。

ただ何かさつきから寒気がするんだよな。

あの張勲の嬢ちゃんが言っていた覚悟って何の事だろうか？

第26話 再起（後書き）

なんか七乃の言葉遣いが安定しませんね。
コレも作者の未熟さ故の話ですが。

というわけで七乃さんの再起の話でした。

本当なら七乃さんはこの後復讐の鬼となって楽就の前に立ちほだかる予定だったんですが……。

七乃さん人氣が凄いようなので予定を変更しました。

そして今回の陰の主役は加山さんこと？燕。

名前だけ出るばかりで印象が薄かったんで。

そして何気に立つフラグ。

第27話 同盟(前書き)

中々話が進まないです。

第27話 同盟

SIDE 樂就

孫策からの使者として韓当が来たのは孫権が寿春を出て2週間程経ち、捕縛した豪族達の処理が一段落ついた頃だ。

『孫家は同盟を受け入れる』という内容の手紙を携えて韓当が訪れた時の美羽の喜びようは並の事では無かった。

それは美羽と面識があるらしい韓当が思わず啞然としてしまう程のものであり、本来ならば緊張感が漂う筈である場面に微妙な空気が流れることとなってしまった事は今思い出しても苦笑する他はない。

ただ孫策から同盟に合意するという知らせが届いても、まだ同盟が結ばれたわけでは無い。

俺達は孫家に対する警戒を解くわけにはいかないし、向こうもこの同盟が罠ではないかと疑っている事だろう。

そこで俺達と孫家の会談は寿春郊外でお互いの軍が対峙する中でその中間点に天幕を設けた上で行う事を提案したところ、孫家側もこれに同意した。

寿春という孫家にとって敵地も同然な場所で行うよりは遙かに危険

性が低い以上当然の選択だ。

この提案をした俺に対して蒼香達が感心していたが別にそう感心されるようなことではない。

前世において国同士の会談が第三国で行われる事が多かった事を知識として知っていた俺にとっては当然の発想だ。

この辺りは漢という一つの国の中で物事が進んでしまっているこの時代の人間と多くの国が存在する事が当たり前であった俺との違いなのだろう。

何はともあれ孫家との会談が決まった後俺達は直ぐに準備を始めた。

汝南郡の豪族達の対処に当たっていた李雪に使者を送っていつでも軍を動かせるようにしておく事を指示する一方で寿春の町の民に俺達と孫家がこれから会談をする事を伝える。

寿春の民に会談について伝える事は俺達が孫家と事を構えるつもりがない姿勢を示す為のアピールであり、孫策が来た時に民が戦が起きると勘違いして混乱を起こすのを防ぐ為でもある。

また現在寿春にいる兵達についても今回の俺達の行動の意図を末端にまで伝えて軍紀を徹底させた。

一部の者の暴走でせつかく美羽が待ち望んだ会談を破綻させるわけにはいかないからだ。

そうして俺達が考えられる限りの全ての準備を推し進め、その準備を終えた時に孫策達はやってきた。

8千程の兵を率いて寿春に来た孫策は寿春の郊外に陣を構える。

そしてその孫策の陣と寿春の中間点に設けられた天幕の中で俺達の会談は進められた。

俺達側の出席者は俺・美羽・蒼香・華漣の4人で、孫家側の出席者は孫策・孫権・周瑜・黄蓋の4人だ。

ここで俺は孫策や周瑜、黄蓋といった孫呉の英雄達と初めて顔を合わせる事になったわけなのだが……。

孫呉の英雄達は俺の予想以上にぶっ飛んでいた。

特に孫策が余りにもフリーダム過ぎる。

この世界の3人が女性である事は知っていたし、今までに会った英雄達も女性であるだけに別に驚くような事ではない。

だが……何で3人もあれ程露出度が高い服なぞ身に纏っているんだ？

確かに揚州は南の方に位置する為に漢の中では気温が高い地域ではあるが、それでも気温は日本の九州程度。

戦場に出る者が何故態々露出が多い服を着ようとするのか訳が分からない。

孫権が比較的まとまな服を着ているだけに余計に対比が目立つ。

それとも何だ、これは俺の集中力を削いで会談を有利に進めようという策なのか？

小麦色に焼けた肌とその豊かと言えるであろうスタイルは確かに目のやり場に困るものではある。

だが会談の出席者で男は俺一人であり、それ程効果がある策とは思えない。

むしろもしも戦闘になった時の事を考えればデメリットの方が大きい筈だ。

そう会談の最中俺は頭の片隅で悩んでいたのだが、後から孫権にあれが彼女達の普段着である事を教えられた時俺は思わず崩れ落ちそうになったものだ。

彼女達の貞操観念といったものは一体どうなってしまうているのだろうか？

孫権は一応まともなようだから大丈夫ではあるうが、孫呉と付き合いのうち美羽の貞操観念に悪い影響を与えることとならないか心配だ。

最もそうなりそうだったら俺は全力で阻止するつもりではあるが。

そして孫策については……もう深く考えない方がいいのかもしれない。

俺の前に現れた孫策は確かに『江東の小霸王』と呼ばれるに相応しい程の覇気を身に纏ってはいた。

だがその言動がその空気をぶち壊しにしまっている。

孫策はいきなり会談で俺をジロジロ見るなり『へえ、貴方が楽就？』
と言いながら俺に近づいて来た。

『思ったより中々いい男じゃない』と俺を誘惑しているとしたか思
えない言動を取ってきた事も驚いたが、その孫策の言動を見て思わ
ず俺の手を美羽が握りしめて来ると孫策は何とそれを見てニヤニヤ
しながら美羽をからかいだしたのだ。

余りにも礼儀を無視したその言動に俺達は怒りを通り越してもはや
呆れるしかなかった。

演技で挑発しているのかとも思ったが、その時に溜め息を吐いてい
た孫権と周瑜の様子から見てもアレは恐らく孫策の素だ。

おかげでその場の緊張は吹き飛んだものの……酷く疲れた。

まあ何はともあれその後の会談は順調に進み、交渉はまとめる事が
出来た。

まず孫家は景升殿に俺達の仲介の元で詫びを入れる事が決まり、そ
れが終わり次第俺達は寿春を含む九江郡の太守の座を譲り渡す工作
を開始する。

その太守の工作が終わるまでの間に政務の引き継ぎを行い、孫権が
太守に任命されればその時点で同盟を結ぶ事となった。

そう、太守となるのは孫策ではなく孫権だ。

俺達も聞かされた時は驚いたが孫策は今回の件が終われば自身は隠居して当主の座を孫権に明け渡すつもりらしい。

それでもしばらく孫権の補佐はするみたいだが、いずれ完全に家督を譲り渡すのは本気のようなのだ。

だが『袁術ちゃんと組むとしたら孫呉の王は蓮華の方が向いているのよ』とそれまで笑っていた顔から真剣な表情に顔を戻して言い切った孫策を前にしては部外者である俺達はそれを言及する事は出来ない。

俺達としても同盟相手は美羽と仲の良い孫権である方が都合が良い事は確かなので美羽と同盟を結ぶのは孫権が率いる孫呉となる事は特に問題なく決まる。

こうして孫家との会談は上々の成果を残して終わり、俺達と孫家はこれから新しい道を歩んでいくこととなったのだった。

S I D E

樂就

E N D

S I D E 周瑜

会谈で我ら孫呉と袁術達が同盟を結ぶ事を決定した後、袁術の提案によって宴が開かれる事と成った。

寿春で袁術達が宴を利用して豪族達を一網打尽にした事を知っている私は当然に身構えたが、事もあろうか雪蓮が真つ先にそれに賛成してしまつたのだ。

『大丈夫よ、冥琳。悪い予感はないから』

雪蓮が嬉々としてそう言つてしまえば元々そういつた賑やかな事が大好きな祭殿達を私が止められる筈もない。

そして今寿春の外では兵達も交えた上で宴が開かれている。

兵達にまで酒食を振る舞う事と成ればその中に毒物を仕込むこと等無理に等しい。

その点を考えればこの宴が罾ではないと安心は出来るもの……よくもこれだけの酒食を用意する事が出来たものだ。

今の我らと袁術が持っている力の差を見せつけられたような光景に私は内心溜め息を吐きながらも宴の会場を歩き回って目的の人物の姿を探す。

そしてその人物は程なくして見つかった。

私は宴の中心に近い場所で年嵩の男達と酒を呑んでいるその人物に近づいていく。

「楽守路殿、話がしたいのだが少しよろしいか？」

「……周公瑾殿か。別に構いませんよ。李豊殿、梁綱殿済みませんが……」

楽就は私に気付くとそれまで話していた男達に目配らせをする。

李豊と梁綱というらしい男達は楽就に頷くとその場を立って歩き去っていった。

どうやら楽就が私に気を遣ってくれたらしい。

「気を遣って頂いたようで感謝する」

「何、私も公瑾殿とは話をしてみたいと思っていましたから」

私が楽就と向かい合うように腰を下ろすと楽就は置いてあった酒壺

から杯に酒を注ぎ私に手渡ししてくる。

「呑みますか？」

「ありがたく頂かせて貰おう」

私は楽就から杯を受け取るとそのまま酒に口をつけた。

私は杯を傾けながら目の前の楽就を見やる。

会談において初めて顔を合わせる事となった楽就は私が想像していたのと随分と違った印象の男だった。

南陽を発展させたという能吏であり、袁術の補佐をしていたという話から私は文官肌の小柄な策士のような男を想像していた。

だが実際に会った楽就は大柄で精悍そうな印象を受ける武人肌の男だ。

実際に戦場に出て武を振るう事もあるらしく、その身体はよく鍛え込まれている。

ただ楽就がその印象から受けるように武官よりの人間でない事は確かだろう。

会談においての発言からも楽就がかなり政治と智に長けた人物である事は分かる。

私の今の目的は楽就の器を測る事だ。

この男がどこまで物事を考えているものか……。

杯から口を離れた私は樂就の器を測るべく言葉をぶつけてみた。

「今回の件には参った。私が軍師として守路殿に完敗してしまったようだ……」

「いや、今回の策を立てたのは私ではなく沮信貫や田元皓達です。私は彼女達の策に従っただけですよ」

私は敢えて自分を貶して樂就を誉めるも中々樂就は乗ってこない。

中々に慎重な人物であるようだ。

「おや、私はその元皓殿から今回の策の大筋は守路殿が描いたと伺ったのだが？」

私も最初から全てがこの男によって成されていたとは思っていない。

私は袁術の下で客将をしていた頃から田豊と沮授の優秀さには目を付けていた。

あの二人の才は穩を超えるものがあるだろう。

だから私は宴が始まってすぐにあの二人に声を掛けてみたのだ。

あの二人は少し脇が甘いところがあって酒が入ると色々と思痴がてらに話を聞かせてくれた。

曰く今回の策の骨は樂就が作り、田豊達がそれに肉付けをしたらし

い。

つまりこの男は1年以上前から私達孫呉の扱いに目を付けていたと
いうことだ。

「ほう、元皓達がそう言っていたと……いやいや、彼女達も謙遜し
たものですねぇ」

ぬう……中々手強いな。

ちつとやさつとの挑発や誘いでは動きそうにない。

しかしこれでこの男が慎重で冷静である事は分かった。

軍師と言われる人物はその才に自身を持ち、己の智を恃みとする者
が多い。

この男がそのような者であればそこを突けたのだが……。

このような男を相手に化かし合いをしても時間の無駄だな。

雪蓮の勘ではないが、むしろ率直に話をしてみた方がいいような気
がする。

さて……どのように持ちかけたものかな？

第27話 同盟（後書き）

他の恋姫のキャラにも言える事ですが……あんたらなんで戦場でそんな薄着なのさ？

まともなのハムさんとか金ぴかさんの軍ぐらいじゃん。

特に孫呉は酷いと思うんだ。

他にも来来の人とか戦場でアレはない。

第28話 同志（前書き）

少し投稿が遅れました。

あと密かに第26話を割り込みで更新していたので、まだお読みで無い方はそちらもご覧下さい。

第28話 同志

SIDE 周瑜

「不躰な問いになるが……守路殿、貴殿はこの先大陸はどのように動くと考えておられる？」

どうやって樂就の考えを探ったものかと考えた私は取りあえず一番無難な問いを樂就に投げかけてみる事にした。

少しでも時勢を読める者なら答える事が出来る問いではあるが、どの程度まで見通しているかでその読みを量ることが出来る。

私はこのままいけば漢王朝は権威を失って大陸は群雄が割拠する時代を迎えると考えているが、樂就は一体どの程度まで考えているのだろうか？

私が興味深げに樂就を観察していると樂就は少し考えた後で顔を上げた。

「大陸というものがこの漢の地を指しているとすれば、このままだと大陸は滅びるでしょうな」

「滅びる？」

あまりにも予想外な樂就の答えに私は思わず目を見開く。

楽就の言い回しからすれば楽就はこの地を大陸と捉えていないように聞こえる。

それに滅びるとはあまりにも物騒な言葉だ。

確かに漢王朝が滅びる事はある事ではあるのだが……いや、また？

今楽就は『漢が滅びる』ではなく『漢の地が滅びる』と言わなかったか？

『漢の地が滅びる』とは一体どういう意味だろうか？

「滅びるとは随分と物騒な言葉だが……それはどういった事ですか？」
私が抱いた疑問について楽就に尋ねると楽就は無言で手に持っていた杯を一気に呷る。

そして楽就が再び私に視線を合わせた時、その目には何やら諦観のようなものが浮かんでいるように見えた。

私の言葉に何か楽就の気に障るようなものがあつたのだろうか？

「言葉通りの意味ですよ。このまま時が進めば漢の治める地は大陸から消えてなくなります。我ら漢の民は苦難の時を過ごすこととなるでしょう。……万里の長城と言えば分かるでしょうか？」

「！」

何気なく答えた楽就の言葉に私は衝撃を受けた。

思わず身体がよろめきそうにもなる。

『漢の治める地が消える』

『漢の民が苦難の時を過ごす』

『万里の長城』

この三つの言葉が示す事から辿り着く事が出来る答え。

それは……異民族の侵攻によってこの大陸が異民族に支配されるようになっていくこと。

まさか楽就はそう言っているのか!?

「正気か？」

思わず楽就の顔を凝視してしまった私だが、楽就の顔は至って真面目で冗談を言っているようには見えない。

「正気ですよ。そもそもなんでそれがあり得ないなんて言えるんですか？ 始皇帝の時代からこの国は常に異民族の侵攻に晒されてきました。それをこれまで曲がりなりにも防ぐ事が出来ていたのは『漢』という国の下で民が纏まっていてそれを跳ね返せる程の国力を保持出来ていたからこそです。ですがその漢王朝はもはや救いようがない程に腐敗が進んでいます。遠くない将来漢王朝は倒れることとなるでしょう。そしてその後に来る事になるのは、恐らく諸侯が割拠する戦乱の世。今の状態でさえ民は苦難に喘ぎ国力が落ちていると

いうのに、続く戦乱で更に国が疲弊した時に奴らが万里の長城を超えてこないという保証がありますか？」

至って真面目な顔でまるで事実を告げるかのように淡々と話す楽就に対して私は身体は自分でも気付かないうちに震えだしていた。

楽就の言葉は荒唐無稽な話に聞こえるかもしれない。

普通の者が聞いたら楽就の事を狂人かと疑うことだろう。

だが私はその楽就のあまりにも突飛な予測を頭ごなしに否定する事は出来なかった。

楽就の論は理に叶っているのだ。

異民族は今も幽州や涼州には度々侵攻していると聞いている。

だが今はその地の太守達によって何とか防がれているそれは本来の彼らの勢力から考えてみれば生温い程のものだ。

今まで考えた事も無かったが、その異民族が本格的に大陸に侵攻してこないのは、未だ漢王朝が曲がりなりにも健在でその力が侮りがたいと警戒しているからだろう。

だがこれから漢王朝が倒れ、大陸で諸侯が割拠することとなればどうだろうか？

楽就が言う通り、これ幸いとばかりに攻めてくる事は大いに考える事が出来る。

そして漢王朝が倒れるまでには反乱等によって大陸が荒れる事は間違いが無いし、諸侯が割拠すれば戦が起こり、国土の荒廃はさらに進行することだろう。

その大陸が割れ、国土が荒廃した状態で異民族が全力を挙げて攻めてきたとしたら……確かに大陸が滅びる事は間違いない。

私は震える身体を何とか抑えつけながら楽就を見やる。

楽就の予測は先見の明というようなもので表現出来るような発想ではない。

恐らくこの大陸で楽就と同じ視点で物事を捉えているものは存在しないだろう。

大陸の覇権について考えている者はいたとしても、大陸としての『国力』や大陸の外の事に目を向けている者などいないに違いない。

何せ大陸を『漢』の民が支配することは普通なら当たり前の常識であるからだ。

私も漢王朝亡き後、雪蓮が……孫呉が大陸の覇権を握る事のみを考えていて、大陸そのものの存亡など考えたことさえ無かった。

だが楽就はその大陸の滅亡を予見し、それを当たり前の事として捉えている。

その楽就からしてみれば私達の考えなどいとも小さいものに見えた事だろう。

「……くくく、はははははっ!!」

私の口から図らずも笑い声が漏れる。

しかし私は胸の奥から湧き上がる笑いを押し留めることは出来なかった。

これが笑わずにいられようか!

こんな発想を普通にする奴に勝とうとしていた等、私は一体何を考えていたのだろうか?

私がいい気になって孫呉の大計を見据えていた頃に樂就は大陸の大計を見据えていたのだ。

見ていたものが余りにも違い過ぎる!

ここまで差を見せつけられるともはや悔しさを通り越して感嘆するしかない。

そして同時に私はこれ程狭い視野で大陸の天下を見ていたのかと思うと自分の小ささが情けなく感じる。

ただ少々樂就の話で解せない事もある。

だがいくら聞かれたからといってもこれ程の大事を樂就は何故私に話したのだろうか?

「参った。その見識はもう見事と言っしかない。だが何故それ程の大事を私に話したのだ? 軽々と他の者に話すような話ではないと思

うが……？」

そう、樂就の話は軽々しく他人に聞かせて良いものではない。

いくら盟を結ぶ事となったとはいえ、何故私に打ち明けたのだろうか？

私が抱いた疑問を樂就にぶつけると樂就はそれまで傾けていた杯を地に置いた。

「そうですね。大きな理由としては今回の会談で孫家が天下を諦めたと分かったからです。孫伯符殿は孫家の当主の座を孫仲謀殿に譲ると言ってきました。仲謀殿は守成の質を持つ方で、しかも美羽の考えに賛同しています。その事から孫家は天下への野望を捨てたと私は見たのですが違いますか？」

「いや、その通りだ」

樂就の的を得た言葉に私は首肯する。

実際に雪蓮は孫呉の天下を捨てる事を覚悟した上で当主の座を蓮華様に譲るつもりだ。

「確かに私の語る大陸の将来の事は軽々と話せるような事ではありません。並みの者に話せば一笑に付されるでしょうし、才があつて覇気ある者に話せば『ならばそうなる前に自分が大陸を纏めてやる』と火に油を注ぐ事になりかねません」

そこまで樂就が語った時、私は樂就の真意を悟った。

成程、だから孫呉の軍師である私にその事を話した訳か……。

「だが、話を理解出来て天下への野心が無い者ならば話は別……か？」

私が悟った事をポツリと述べると楽就はゆっくりと頷く。

楽就…… 本当に油断ならない奴だ。

楽就は今回我らが盟を結んだところに更に楔を打ち込んだのだろう。

蓮華様は袁術と真名を交換する程にまでなっている。

蓮華様が袁術との盟を破る事は袁術が盟を破らない限りあり得ないと考えて良い。

となれば残る心配の種は軍師である私のみ。

楽就は恐らく私が孫呉の天下を諦めずに何かを画策する事を警戒したのだろう。

そして楽就は恐らく私にそれを実行に移せるだけの力があると認めているのだ。

だがその私に大陸の危機について語れば、君主である蓮華様が袁術と盟を結んでいる限り私は迂闊な行動に出る事など出来なくなる。

大陸の滅亡が懸かっている時に足を引っぱろうとするなど国の政に携わるものとする所業ではないのだから。まつじごと

事実、樂就の話聞いた今私にはもはや袁術との盟を破ろうと言つ
気は綺麗さっぱりと無くなってしまっている。

だがふと私は思うところがあった。

これ程までに我らとの関係を警戒している樂就だ。

今こうして我らは袁術と盟を結ぶ事になったが、もしも我らが敵対
していた場合樂就はどうするつもりだったのだろうか？

「守路殿、一つ尋ねたいのだが……もしも我らが袁公路殿と盟を結
ばない事を選んだ場合貴殿らはどうするつもりだったのだ？」

我らは今豪族達を束ねることで、2万近い軍を集める事が出来る筈
だった。

もしも我らが袁術と盟を選ばずに戦う事を選んだ場合、その数は決
して今の袁術軍にとって少ない数では無かった筈だ。

そんな危ない橋をこの目の前の男が渡るとは思えない。

私が尋ねると樂就は口を歪めた。

その瞬間に私の背筋に何か寒いものが奔る。

「孫呉が我らと手を取り合う道を選べば良し。揚州は我らにとって
治めにくい土地ですからそこを孫家に治めて頂ければ私達も手間が
省けますし、国力を無駄に消費せずに済みます。ですが孫家が我ら
と敵対した場合はこれから先に無駄な戦を起す禍根を断つ為に孫
家には綺麗さっぱりと消えて頂くつもりでした」

「なっ!!??」

まるで虫を殺すような気軽さであっさりと告げる楽就に私は絶句して何も言えなかった。

そして楽就が我らを潰すと言ったからには恐らく楽就達にはその手立てが整っていたと見ていい。

楽就は口元に笑みを浮かべたままで話を続ける。

「公瑾殿、貴女は私達の兵の数をどれ程と見積もっていましたか？」

「常備兵2万に守路殿が率いる兵2千を加えた程だろうか？追加で徴兵すればもつと増えるかもしれないが……徴兵が間に合うものではない。その上寿春の兵の内の紀義伯が率いる以外の1万5千は大して使い物にならないと見ていたが……」

私が訝しげに思いながら答えると楽就は更に笑みを深くする。

私はもしかして何か盛大な過ちを犯していたのだろうか？

「4万5千……それが今回私達は揃えた兵の数です」

「な!？」

私は思わず驚きの声挙げてしまった。

4万5千……決して一太守が単独で揃えられるような兵の数ではない。

豪族達と袁術が敵対している今、それ程の兵を揃える事は無理にさえ思える。

となれば答えはただ一つ。

袁術軍は予めそれだけの兵を単独で揃えていたのだ。

しかも南陽にも留守居の兵を残している筈だから実際袁術が抱える兵は5万を超える計算となる！

しかし明命の調査で寿春に集まった兵の数は把握していた。

あの明命がそこまでの数の兵を見落とすという事は無い筈だ。

となればその兵達は南陽の兵か徴兵した兵なのだろう。

だが南陽から援軍を呼び寄せるにしてみれば早すぎるし、徴兵が行われたという報告も受けていない。

……ま、まさか!?

「伏兵か!？」

私が思い当った答えに樂就は拍手で答えた。

「ご名答です。私達は最初から南陽の2万の兵を州境の山中に伏せていました」

州境……道理で見つからない筈だ。

今の我らには他州にまで探索の手を伸ばす程の余裕は無かった。

しかも最初から伏せていたということはあらかじめ我らの動向について警戒をしていたに違いない。

「確かにその内1万5千はあまり使い物になりませんが残り3万の兵は精兵です。もしも公瑾殿達が敵対した場合は禍根を残さない為にこの兵をもつて孫家を完膚なきまでに叩くつもりでした。兵糧に不安がある公瑾殿達は寿春に攻めて来るしか手は無かった筈です。我らは2万5千の兵を持って寿春に籠城し、公瑾殿達の兵糧が尽きる事を待つ。そして兵糧が尽きた所を伏せていた2万の兵と呼応して挟み打ちにするつもりでした。更に集まった豪族に取引を持ちかけて切り崩すという手もありましたしね」

楽就の語った内容は私を青ざめさせるのに十分過ぎる内容だった。

そこまでの態勢を整えた上で精兵3万と寄せ集めの連合軍2万少しが戦ったところで勝敗は目に見えている。

もしも私達が同盟を蹴っていれば私達は確実に滅ぼされていた事だろう。

今回の同盟の話で我らはまさに崖っぷちに立たされていたのだ。

同盟を我らが受け入れれば良し。

受け入れなければ同盟を提案してきた袁術を我らが弱腰と思い攻めかかったところで一気に殲滅する。

私達は今一步の所で危機を免れていた。

今さらながら私達がこれまでどれ程危ない綱の上を渡っていたのかに気付कि、私は冷や汗が止まらなくなる。

「……本当に守路殿と敵対しなくて正解だったと心から思うよ」

こんな男を相手としていたら命がいくつあったとしても到底足りるようなものではない。

ようやくそれだけの言葉を私は絞り出す、樂就はそれを見て首を横に振った。

「いえ、私は方針を打ち出しただけです。今回の伏兵の指揮をしたのは張雋父です、戦の段取りを考えたのは元皓や信貫です。更に南陽にも留守を任せるに足る者達が残っています。今回の事は美羽の下に皆が纏まったからこそ出来た事なのですよ」

「……成程な。袁公路殿を侮っていた事が我らの失敗だったという事か」

いや……正確には袁術と樂就の絆の深さに気付けなかった事だな。

樂就は謙遜してはいるが、今回は私達や豪族の目を袁術が惹きつけている間に樂就が準備を整えたからこそ成った策の筈だ。

つまりそれが簡単に為せる程の信頼関係が袁術と樂就の間で築かれていたのだ。

それは恐らく雪蓮と私の関係に近いものがあるのだろう。

その関係を早々に見抜く事が出来なかった時点で私達の負けは確定していた。

我らが敵わないわけだ。

だが私は負けを悟ると同時に自分の中で一つの情熱の火が灯された事を感じていた。

私は確かに今回楽就に完敗した。

だが軍師としてこうして負け続けたままというのは悔しさが拭えない。

今はまだ無理かもしれないが……見識を広げ、いつか楽就が見ている世界を私も見てみたい！

私は手に持っている杯に残っていた酒を一気に飲み干す。

「守路殿、今日は色々と為になる話を聞かせて頂いた。その礼といつてはなんだが……是非我が真名を受け取っては頂けないだろうか？その真名をもって私が袁家と孫家の盟を決して破らぬ事の誓いとさせて頂きたいのだが？」

正直肉親以外の男に真名を託す事は初めてだが、この楽就になら預けても良い気がした。

雪蓮の勘ではないが、これから我らは長い付き合いになりそうながしたがしたのだ。

男女の仲という意味ではない。

互いの王を支えながらも、その背を追い求める事になるだろう目標としてだ。

私の提案に楽就は驚いたのか目を見開いたが、直ぐに大きく息を吐く。

「よろしいでしょう。それでは私も盟を破らぬ事を誓い真名を預けましょう」

そして楽就は酒瓶を持って私と自分の空になった杯に酒を注いでいく。

私達は酒が満たされた杯を互いに右手に持った。

「我が真名は冥琳」

「我が真名は泉」

互いに持った杯を掲げ、その縁を軽くぶつけ合う。

「我が主の意思在る限り、我が真名をもって互いに盟を破らぬ事を！！」

誓いの口上を終えた私と楽就……いや、泉殿は掲げた杯を同時に一気に呷る。

お互い杯を飲み干した時、どちらからともなく笑みが零れた。

「これからよろしく頼む、袁家の軍師……泉殿」

「いや、こちらこそ、孫家の軍師……冥琳殿」

今まで私には好敵手といったものがいなかったものだが……目標となる存在がいるということは中々良いものだ。

今はまだ泉殿に視点に追いつくことは出来そうにないが……いつか必ずその目線に追いついてみせる！

こうして泉殿と私が誓いを結び、私が新たなる目標に決意を新たにした時に……それは私達に襲いかかってきた。

「めいり〜ん！一体何をしてるのよ〜！」

「泉〜！！お主公瑾殿と一体何をしておったのじゃ〜！！！」

私の後ろからいきなり雪蓮が私に寄りかかってくる。

既になんかの量の酒を呑んで酔っているらしく、その息は酷く酒臭い。

困って泉殿を見やると泉殿も袁術に酷く絡まれているようだった。

一瞬泉殿と視線が合った私はお互い苦笑の笑みを浮かべる。

どうやら私達は主に苦勞するということ意味で結構似た者同士であった
ようだ。

本当に泉殿と私は良い友人関係を築けそうだ。

だが……取りあえず今はこの困った主の対処をしなくてはならない
な。

第28話 同志（後書き）

7月に入ってから私生活が忙しくなり、これまでのように更新出来
そうにありません。

大体1週間に1・2回を目安の更新となるかと思えますのでご了承
ください。

第29話 噂影（前書き）

どうも投稿した話が納得出来なかったので書き直しました。

やはり話は良く練らないといい話になりませんね。

いつもタイミング良くアイディアの神様が降りてきてくれればいいのですが。

第29話 噂影

SIDE 樂就

「なあ美羽、一体何で怒っているんだ？」

「……別に何も怒っておらんのだじゃ」

俺は全く俺の方を見ようともしせずにひたすら竹簡に筆を走らせる美羽の様子を見て溜め息を吐く。

もうかれこれ1週間もこんな調子が続いている。

というのも何故かあの宴の次の日から美羽の俺に対する機嫌が非常に悪くなったのだ。

美羽は仕事について言葉は交わすもののそれ以外は一切話そうとはしない。

恐らくあの宴での何かが関係しているのだろうか……一体何があったのだろうか？

俺に思い当たる事といえば、あの宴で実質的に孫家を動かしている冥琳と個人的な繋がりを結んだ事ぐらいなのだが……。

孫家と袁家の中枢に携わる者同士で繋がりを作る事は別に悪い事で

はないよな？

もしかして宴の間おれが美羽と話そうとしなかった事が問題なのだろうか？

いや、でもあの宴で美羽は孫権や孫策と楽しく話していたからそれは問題ではなさそうだよな？

俺はこの1週間延々と美羽が不機嫌な理由について考えているのだが、全く思い当たる節がない。

全く解決する兆候のない事態に俺は戸惑うばかりだった。

ただ俺の近況を除けば周囲の環境は慌ただしく変化している。

あの宴が終わった次の日から俺達も孫家も一気に動き出した。

今俺達は寿春で日常の政務を行いつつも並行して進めている事はこの地の孫家への政権移譲の準備だ。

具体的には引き継ぎの為の書類の作成や現在の官吏と兵の中で寿春に残って孫家に仕える者と俺達とともに南陽へ戻る者の選別などがある。

もう少しして孫家の準備が整えば、孫家の文官連中との職務の引き継ぎ作業が始まる事だろう。

そんな俺達に対して孫家の対応も負けず劣らずに早い。

孫家は善は急げとばかりにすぐに景升殿に使者を送って和解の準備

を進め始めた。

既に孫権を代表として送る事はもう決まっております、俺達の陣営からは紫苑殿が孫権に付き合つて景升殿との会談に行くこととなっている。

というのも紫苑殿は宴に翌日に正式に美羽に仕える事を願い出てきたのだ。

紫苑殿は今回の一連の騒動で美羽の事を見て、美羽を仕えるべき主として見定めたらしい。

既に紫苑殿が能力・人格ともに信頼出来る事は分かっているので俺達に否は無く、紫苑殿が美羽に仕える事はすぐに決まる。

その結果として元々景升殿に仕えていた紫苑殿が景升殿に対する挨拶といった要件を含めて孫権に付き添う事になった。

更に孫策達は程普等の揚州に隠れていた家臣を集める一方で、声を掛けていた豪族の懐柔を進めている。

揚州の名族である周家と陸家の出身である冥琳と陸遜がいるだけにその感触は上々といったところのようだ。

既に魯肅を筆頭とした者達が孫策に接触をしてきているらしい。

呉郡の嚴百虎等未だに油断出来ない勢力はあるが、この調子ならば孫家が寿春の太守となったとしてもあまり問題は起こらないだろう。

そうした動きは俺が冥琳と引き継ぎの打ち合わせをしている時に聞

いているもので俺はそれを美羽に報告しているのだが……日に日に美羽の機嫌は悪くなるばかりだ。

今日も美羽は仕事し始めた頃は比較的まだ機嫌は悪くなかったのだが、俺が孫家の動向の話をすると途端に殆ど話さなくなってしまうた。

……あ、もしかしたら俺が冥琳と話している事が原因なのか？

前世で仲が良かった友人の妹がそいつが俺と話しているのを見ておくれてしまった事があった。

ああ、そう考えれば確かに納得がいく。

要するに兄みたいな存在である俺が冥琳とよく話している事が兄を取られたようで美羽には面白くなかったわけだ。

そつと分かればさっさと謝って誤解を解いてしまった方がいいだろうな。

「美羽、済まなかった。冥琳とはただ仕事の話をしていただけなんだが……美羽に話すような話じゃ無かった」

「……ようやくわかったのじゃな、泉？」

俺が美羽に頭を下げると今まで俺の方を向きもしなかった美羽がようやく俺に顔を向けてくれた。

どうやら俺の予想は正解だったようだ。

「ああ、俺の配慮が足りなかったようだ。今度時間が出来たら一緒に釣りにでもいこう」

「うむ、分かれば良いのじゃ 妾も少しに意固地になりすぎたようで済まなかったの」

俺が釣りに行くことを誘うと美羽は今までの態度が嘘だったかのようになりに上機嫌となる。

やはり最近美羽に構う事が出来なかったのが原因だったか。

もう少し美羽のことを気に掛けておくべきだったな。

その後しばらく美羽の機嫌が良くなった事で和やかな空気の中で仕事をしていた俺達だったが、その最中に美羽がふと顔を上げた。

「のう、泉。釣りで思い出したのじゃが……薔薇は今どうしておるのじゃろうか？」

「薔薇か……懐かしいな」

美羽の口から出た懐かしい名前に俺は思わず動かしていた筆の動きを止める。

薔薇は美羽が俺や雄とともに洛陽の周辺によく出かけていた頃に知り合った友人の名前だ。

洛陽に近い河東郡の町に住んでいた女の子で年は俺と殆ど同じ。

性格の良い子ではあったのだが薔薇は幼い頃に遭った火事による火

傷の跡が全身にあつて、特に顔の右の傷跡が酷かった。

加えて薔薇は少し目つきが悪い為に火傷の跡と跡と相まってその筋の人っぽい迫力がある。

幸い薔薇は武の手解きを受けていた為に腕がかなり立ったので虐められる事はなかったのだが、他の子から気味の悪さと怖さによって敬遠されて町で除け者になっていたのだ。

偶々訪れた町で薔薇が除け者にされていることを見た美羽が怒って町の子供に突つかかっていた事は今でもよく覚えている。

それから俺達は薔薇を交えて釣りなどをして遊んだものだ。

最初は殆ど笑顔を見せなかった薔薇だったが、美羽と遊ぶうちに薔薇は次第によく笑うようになり、俺達とはかなり仲が良い友人となつた。

ただ薔薇は親の仕事の為に町を出てしまい、俺達の気付かないうちに何処かに消えてしまった。

俺達は自然と真名で呼び合っていたので薔薇の姓名を知らなかった俺達は薔薇の姓名を聞いておけばと後悔したものだ。

「……………薔薇ほどの武人ならいつか必ず名を挙げる。そうすればいつか会える日も来るさ」

「……………そうじゃな。出来れば薔薇が妾達と共に歩めれば良いのう」

希望的観測とは分かっているが俺は薔薇の顔を思い出しつつ美羽に

声をかける。

美羽も今の段階ではどうしようも無い事は分かっているようで、ただ薔薇の事を思い出しただけのようだ。

少しの間昔の思い出に浸っていた俺達だが、直ぐに気を引き締める。

「さて、それじゃいつか薔薇に会えたときの為にも今俺達に出来る事をしておかないとな」

「うむ、そうじゃな」

そして俺達が再び仕事に取りかかろうとしていた時に部屋の外から声が掛けられた。

「失礼します。 太守様にご報告する事があるのですが……」

「うむ、分かったのじゃ。 入ってよいぞ」

美羽が許可を出すとともに戸が開き、文官が一人入って来る。

入ってきた文官は前に進むと跪礼をとった。

「失礼します。 太守様にお目通りを願う者が参っております。 その者は『薔薇そらぎが尋ねてきたと伝えて欲しい』と申しているのですが、いかがなさいませうか？」

薔薇！？

文官の口から伝えられた思わぬ言葉に俺と美羽は思わず顔を見合わ

せた。

今まさに薔薇の話をしていたところだったのだ。

「のう、泉……こんな偶然があるのかのう？」

美羽が驚きに目を見開いているが、それは恐らく俺も同じだろう。

まさに『噂をすれば影』とやらだ。

「すぐに会いに行くのじゃ！薔薇は門のところに居るのじゃな！？」

「は、はい！城門前にて待たせております！」

驚きから我に戻った美羽は椅子から立ち上がって文官に薔薇を居場所を確認するとすぐさま部屋を飛び出していく。

後に残ったのは呆然としてしまっている文官と俺だけだ。

「あ、あのう、太守様は一体どうされてしまったのでしょうか？」

「ああ尋ねてきた者は俺達の旧友でな、特に問題はないからあまり気にしなくて良いぞ。報告ご苦労だったな」

恐る恐る俺に質問してきた文官に答えつつ俺は机の上のものを片付け始める。

薔薇が来たからには今日の美羽は仕事どころではないだろう。

部屋から退出していく文官を尻目に俺は机の上を片付け続けた。

さて、俺もあいつに会いに行くとするか。

片付けを終えた俺は背伸びをすると旧友に会うために部屋を出るのだった。

第29話 噂影（後書き）

随分変わった話になりました。

話中にヒントはありますが……真名と容姿で誰がモデルかは気付く人は気付いたのではないかと。
あの方の若い頃を想像して頂ければ結構です。具体的には少女時代の。

第30話 徐晃（前書き）

すいません。

大幅に投稿が遅れました。

活動報告に記載したとおり、なんとか出来上がりました。

第30話 徐晃

SIDE 徐晃

「では太守様に取り次ぎますので少々お待ち下さい」

「はい、お願いします」

私が頭を下げると文官さんが城の奥へと戻っていった。

この顔のせいで美羽に取り次いで貰えないかもしれない事を心配していた私はその文官さんの対応にほっとする。

これでようやく美羽達と会う事が出来る……！

この私の怖がらずに正面から向き合ってくれた私の大切な友達達に……！

私の身体には小さい頃の火事で負った火傷の跡がある。

その全身にある火傷の跡の中でも顔の右側のものは特に酷い。

この火傷跡のせいで私は昔住んでいた町の人から気味悪く思われていて、同じ子供達からも除け者にされていた。

元は都で軍に務めていたお母さんが「私が苛められないように」と小さい頃から私に稽古を付けてくれていた御蔭で子供ながら町の人よりも強かった私は苛められることこそ無かったけど、いつも一人ぼっちだった。

他の同じ年頃の子が皆で何かしている時もいつも私は遠くから眺めているだけ。

そんな生活にも慣れてしまっただけでそれが当たり前になっただ頃私の中に現れたのが美羽達だった。

服こそ町の人が着るような服を着ているものの、あきらかに身分が高い家の子である事が分かる雰囲気身を纏っていた美羽が私の事を全く恐れずに話しかけてきてくれた。

そして私が事情を話すと美羽達は私の為に怒ってくれた事は今でも良く覚えている。

それから私は美羽達と一緒に行動するようになった。

美羽達が私の住んでいた町に来るのは七日に一回位だったけれど、美羽達と手合わせをしたり一緒に釣りをして遊んだあの日々は私にとって大切な思い出だ。

でも美羽達と出会って2年程経った頃に私はお父さんの仕事で町を

離れる事になった。

急な事で美羽達と挨拶をする事も出来なかった私はしばらく落ち込んじやっただけけど……思い直したんだ。

私から見ても美羽は多分将来人の上に立つようになる存在だ。

それに美羽にはその資質が十分にあると思し、泉や雄はきっとその美羽を傍で支え続けるだろう。

美羽達は一人ぼっちだった私の力になってくれた。

なら今度は私がいつか美羽達の力になれるように頑張ろうって。

それからというものは1年間必死で武と知を鍛えた。

そうして私が自分に少し自身が持てるようになった頃に私は成人を迎え、私は美羽達を探す為の旅に出たんだ。

美羽達とは真名で呼び合っていたから私は美羽達の姓名を知らない。

私がつっていた美羽達の手掛かりは美羽達の真名と容姿、それに使う武器だけ。

それに顔の火傷跡のせいで私は他の土地の人からも避けられる事が多くて情報を集めるのも一苦労だ。

それでも私は決して諦めずに美羽達を探し続け、旅に出て1年程経った時に寄った荊州の村でようやく美羽達の手掛かりを掴む事が出来た。

1年前にその村が賊に襲われた時に助けてくれたという南陽の太守の袁術という人物は聞けば聞く程美羽の事としか思えない。

しかもその美羽らしき人の側には双薙刀らしき武器を持った男の人と村の女の子を口説いていたという男の人がいたらしい。

そして村人振舞われたという水飴の話聞いた時に私はその袁術という太守は間違いなく美羽の事だと確信した。

あれは泉が美羽の為に作ったものだと言った昔聞いた事がある。

そうして袁術という太守が美羽の事である事を確信した私は南陽を経てこの寿春によく辿り着いたんだ。

美羽達がいるこの城に！

「貴女仕官を希望してきたの？」

私が文官さんに言われた通りに城の前で待っていると後ろから声を掛けられた。

今までの事を思い返していた私は後ろから誰かが近づく事に気付く事が出来ずに慌てて振り返る。

するといつの間にか私の後ろには良く日に焼けた肌をした紫色の長い髪の女の人が立っていて、その女の方は私の事を興味深げに見つめていた。

「え、あ、はい、そうです」

ジロジロと私を見る女の方に私は少したじろいってしまったものな何とか慌てて答える。

私は美羽の力になる為に此処に来たわけだから、仕官しに来たという事に間違いはないと思う。

でもこの人は一体誰なんだろう？

見るからに腕は立ちそうだから美羽に仕える將軍さんなのかもしれないけど……それにしても覇気がありすぎる気もするし……。

私が内心考え事をしつつ答えると女の方は少し考えるそぶりをした後で顔を上げた。

その顔には何か獣のような笑みが浮かんでいて私の背筋に悪寒が走る。

なんだろう？

何かすごく嫌な予感がする。

「貴女結構強そうねえ……。いいわ、私が貴女の腕を見てあげる」

「え、ええっ？」

な、何で!？」

私はここで美羽を待っているだけでなのに？

女の人が突然言い出した事に私は慌てたけど女の人はその私を気にせずに話を進めてしまう。

「あら、貴女つて顔に似合わず結構恥ずかしがり屋なのね？遠慮することはないわよ。さ、行きましょ 丁度仕事続きで身体が鈍っていたところだったのよねえ」

「え、あの、ちょっと私!？」

この人もしかしたら自分が戦いたいだけ!？」

私は慌てて何か言おうとしたけど言葉にならず、女の人はその私の腕を掴むと無理矢理引く張る。

「あ!？」

「さあさあ、さっさと遣り合いましょ あの中庭だったら貴女の武器でも大丈夫そうね」

うっ、この人強引すぎるよお……。

なんでこうなっちゃったんだろ？

私はただ美羽に会いに来ただけなのに……。

もうこうなったらこの人と手合わせでもなんでもしてその後には話を聞いて貰うしかなさそう……。

そう考えながら私は女の人に引きずられていくのだった。

S I D E 樂就

俺が美羽の後を追って薔薇に会う為に城門に向かうと城門には誰もおらず、代わりに城門から少し離れた場所に人だかりが出来ていた。

一体何があるのかと疑問を抱きながら俺はその人だかりの方へと足を向けると、近づくとつれて金属と金属が激しくぶつかり合う音が聴こえて来る。

これは……もしかすると薔薇が誰かと戦っているのか？

薔薇は間違っても自分から誰かに仕掛けるような性格じゃない。

となると薔薇はその戦っている相手に巻き込まれたな。

そう予測を立てつつ俺がその人の輪に近づくと案の定、薔薇が懐かしい長柄の戦斧を振り回して戦っていた。

その相手は……孫策！？

「あはははは！貴女やっぱ強いわ！こんなに楽しいのは久しぶりよ」

笑いながら『南海霸王』というらしい剣を振り回して薔薇と戦う孫策の姿を見た俺は自分の予測が的中した事を悟って溜め息を吐く。

……何でいつも普通に騒ぎを巻き起こすかな、この小霸王様は。

孫策は戦いに熱中するあまりに他の事が目に入らなくなってしまっているようでちっとやそつとの事では止まりそうにない。

そういえば冥琳から孫策は戦いに夢中になるとトリップしてしまうと聞いた事があった。

今の孫策は正しくそのトリップしてしまっている状態のようだ。

これはこの戦いが終わるまで待つしかない諦めつつ俺が周りを見回すと戦いの様子を見ている美羽の姿が目に入った。

俺より先に此処に着いた筈の美羽も既に戦いを止める事は諦めている様子で二人の戦いを注意深く見守っている。

ただもしも誰かが危なくなったら直ぐに止める事が出来るようにと思っているのだろう、美羽は腰の剣から手を離してはいない。

そんな健気な美羽の様子を見やりながら俺もいつでも腰の剣を抜けるようにと準備をする。

俺の武器は双薙刀だが、戦場でもしも双薙刀を手放してしまった時の為に一応剣も扱う鍛練はしている。

とはいうものの恐らく美羽の用心は杞憂に終わるだろう。

もし俺達が剣を抜く必要があるとしたらそれは孫策が薔薇に大怪我させそうになった時だろうが、今の状態を見る限りそんな状態にはなりそうにない。

互角に戦っているようには見える孫策と薔薇だが、その実薔薇が孫策を徐々に追い詰めているからだ。

長柄の武器の長所はそのリーチにあるのだが長柄の武器はそのリーチ故に剣に比べると攻撃の速さは遅く、特に薔薇が扱っているような戦斧のような重量級の武器ともなればそれは顕著となる。

つまり孫策は薔薇の懐にさえ入り込めれば薔薇に勝つ事が出来るのだ。

だが薔薇はフェイントや石突での攻撃を織り交ぜる事で決して孫策を己の懐に入らせようとせず、孫策は間合いの内側に入れない事に

焦りを見せている。

薔薇が威力のある大振りな攻撃をすればその隙に孫策は間合いに入れそうなのだが、薔薇はその大振りな攻撃をしないのだ。

薔薇は隙の少ないように斧を振り回して孫策と戦っている。

隙が小さいとは言っても俺とは比べ物にならない程の力持ちである薔薇が重量のある戦斧を遠心力を利用しつつ繰り出す攻撃は決して軽いものではない。

薔薇の攻撃をあれだけ受け続けた孫策の腕は既に痺れで限界に近い筈だ。

何せ俺が昔薔薇に勝てなかった理由が正にそれなのだから良く分かる。

俺がそう考えながら戦いの様子を見てみると暫くして俺の予想通り孫策の腕が限界を迎えたらしく、薔薇の一撃で孫策の南海霸王が弾き飛ばされた。

「あ……！」

「これで私の勝ちですね」

重い戦斧を片手で持ちながらそれをピクリとも動かさずに薔薇は戦斧の刃を孫策の首の真横で止める。

そして負けを悟った孫策は悔しそうな表情をしながらも両手を上に上げた。

「はあ……参ったわ、降参よ。強そうだとは思っていたけれど……まさかここまでとは思わなかったわ」

「かなり鍛練を積みましたから。それと聞きたい事があるので「薔薇！久しぶりなのじゃ！！」……って美羽！？」

孫策が降参した事を確認した薔薇が戦斧を孫策の首からは離れたところで今まで固唾を飲みつつ様子を見ていた美羽が薔薇に飛びついた。

いきなり美羽に飛びつかれた薔薇は驚いて一瞬バランスを崩したもののなんとか美羽を受け止める。

抱きついてきた美羽を見ながら暫し呆然としていた薔薇だったが、我に返ったらしい次の瞬間に戦斧を手離すとそのまま美羽に抱きつく。

「美羽……会いたかった！うっ、ようやく会えたよお……」

「薔薇！？……全く、薔薇は相変わらず泣き虫じゃのお……」

……武の方はかなり成長したようだけど性格の方は相変わらずか。

自分より小さい美羽に抱きつきながら泣く薔薇の昔と何ら変わりない様子に俺は苦笑しつつも、目の前でいきなり展開された事態に呆然としてしまっている孫策に歩み寄った。

「伯符殿、大丈夫でしたか？」

「あ、樂就……。私は腕がまだ少し痺れている位で大丈夫だけど……あの子って貴方達の知り合いなの？」

俺の問いかけに孫策はまだ少し驚きながらも俺に気付いて振り向く。

まあ怪我がないのは何よりだが……何故薔薇と孫策が戦う事になったのか問い詰めないとな。

……まあ大体の予想はついてはいるが。

「ええ、昔の遊び友達ですよ。……それはそうと私達に面会を希望していた彼女が何故伯符殿と戦う事になったのか事情をお聞きしたいのですが？」

「あ……え、え〜とそれはね……」

俺の怒りを感じ取ったのか冷や汗を流す孫策を俺は問い詰めて事情を聞き出す。

「……つまり薔薇を仕官志望者と勘違いした拳句に報告も入れずに自ら腕試しをしたと？しかもその理由は仕事漬けの鬱憤晴らしであると？」

「あ、あはははは……」

半ば呆れつつ孫策をジト目で見る俺に対して孫策はあさつての方向に目を逸らしながら乾いた笑い声を上げる。

その孫策の様子に俺は溜め息を吐いた。

「笑って誤魔化そうとしないで下さい。取りあえず冥琳殿に報告して……それからですね」

「げっ！ね、ねえ、楽就、この事を冥琳に黙ってくれるっていうわけには……」

孫策は今までの比ではない程に大量の冷や汗を流しながら俺に無理矢理作った笑みを向けてくる。

そして俺はその孫策に対してにこやかな笑みを浮かべつつ……死刑の執行宣告を下した。

「いきません。それにもう手遅れの様ですよ。ねえ、冥琳殿？」

「え！！？？」

俺が告げた言葉に孫策が固まって動かなくなる。

そしてその孫策の肩に後ろから冥琳がぼんつと手を置いた。

「ああ、泉殿。うちの雪蓮バカが迷惑を掛けてしまったようで済まない。後でお詫びに伺わせて貰おう」

実は俺が雪蓮から事情を聞き出している時から冥琳は孫策の後ろに立っていたのだ。

俺は途中で冥琳が近づいてくるのに気付いていたのだが、敢えて黙っていた。

理由はそれが一番孫策が堪えそうなお仕置きだからだ。

肩に手を置かれた孫策は蒼白な顔をしていかにも恐る恐るといった
感じで後ろを振り返る。

「め、冥琳？い、いつからそこに……？」

「泉殿が雪蓮から事情を聞き出している時からだな。さて、雪蓮…
…逝こうか？」

冥琳はもはや何も言い返す事が出来ずに項垂れている孫策を襟首を
掴むと俺に頭を下げた後そのまま孫策を引き摺って行った。

精々しつかりと絞られてこい、孫策。

冥琳に引きずられていく孫策を見送った俺は脇の美羽達の方へと視
線を戻す。

薔薇と孫策の戦いを見ていた城の者達は既に皆いなくなっている。

また俺が孫策と話をしている間に薔薇の方は落ち着いたようでもう
薔薇は泣きやんでいた。

だが美羽と二人揃って俺の事を目を見開きながら見ているのは何故
だろうか？

「……二人とも俺がどうかしたか？」

「…泉が黒いのじゃ」

「元々黒かったけど……暫く会わないうちにもっと黒くなったね、

泉

俺が黒い？

たったあれくらいで？

「……………本来ならこの事に付け込んで今後の孫家との交渉の材料にするところを冥琳に預けるで済ませたんだから随分と甘いと思っ
ているんだが？」

俺が本気で思っている事を言うと美羽と薔薇は顔を見合わせる。

「雪蓮の顔があれ程絶望に染まっておったというのに……………」

「何かこの世の終わりのような顔をしていたよね？」

美羽と薔薇が何やら話してはいるが……………それは気にしない事として
おこじ。

今は薔薇と話したい事があるしな。

「まあそれはともかく……………久しぶりだな、薔薇」

「……………うん、久しぶりだね、泉」

俺が実に2年ぶりに薔薇に声を掛けると薔薇は少しの間の後で俺に
向かって笑いかけてくる。

「色々と話たい事はあるが……………此处で話すのもなんだ。取りあえず
城の中に入らないか？」

「うむ、そうじゃな。薔薇に聞きたい事は沢山あるからの」

俺の提案に美羽が頷くが、薔薇はその場で首を横に振った。

「薔薇？」

「少し待って。やらなきゃいけない事があるから」

美羽が薔薇の様子を訝しげに見やるも薔薇はその場で佇まいを正す。

「名乗りが遅れた事をお許しください。私は徐晃、字は公明。私の友、袁公路殿の力となるべく参じました。今日より袁公路様を主と呼ぶ事をお許し願えないでしょうか？」

薔薇はその場で見事な跪礼をとった後で頭を伏せつつ美羽にそう述べた。

その薔薇の行動を見た美羽はその場で目を瞑って深呼吸をする。

「その願いしかと承知したのじゃ。薔薇の気持ちは嬉しく思う。じやが妾を主として仰ごうとも薔薇が妾の友である事に変わりはないのじゃ。妾は徐公明を臣としても友としても喜んで受け入れよう。よく来てくれたのじゃ、薔薇。改めてこれからよろしく頼むのじゃ」

「はい、美羽。こちらこそよろしく願います」

これだけははじめをつけておきたかったのだろう薔薇の臣下の礼を美羽は悠然と微笑みつつ受け取る。

俺はその二人の様子を一切口を挟まずに見守った。

薔薇が来てくれた事は確かに嬉しいが……薔薇がまさかあの徐晃だったとはな。

確かにそれならば薔薇があそこまで強い事にも納得出来るか。

しかし……何だか美羽の下には信じられない程豪華な面々が集まってくるな。

本来袁術に仕えていた筈の芙蓉（袁渙）・張勳・華漣（紀靈）を別にすれば李雪（張？）・蒼香（沮授）・翠香（田豊）・雄（臧覇）・真里（徐庶）・紫苑殿（黄忠）・薔薇（徐晃）と誰もがそれぞれ仕えた主の下で活躍した面々ばかりだ。

俺は天なんていう物を信じているわけではないが……ここまで来ると何か美羽には運を引き寄せるような力があるとしたか思えなくもなる。

だがいくら美羽の下に人材が集いつつあって孫家との仲が良好であるとしても油断はできない。

先だつては曹操が陳留の太守に赴任したという報告が届いているようにこの世界は俺の知る歴史とは全く違った歴史を歩みつつある。

この先少しの油断が命取りとなるような事が多々ある事だろう。

いや、今さらだな。

俺は美羽と出会った時に美羽の『けらい』になると決めただ。

ならば俺がやる事は常に主である美羽を支える事……それだけしかない。

そう俺が目を開じつつ考えていると袖を引っ張られる感覚を感じた。

目を開けると美羽が俺の腕を引っ張っている。

「どっしたのじゃ、泉？いきなりぼんやりとしおってからに」

「いや、何でもない。少し考え事をしていただけだ」

俺は心配そうに俺を見上げる美羽に対して俺は首を振った。

「さ、さつさと城の中に戻ろう。積もる話も沢山あることだし、薔薇を他の皆に紹介しないとな」

「むっ……それならば良いのじゃが……まあよい。よし、泉、薔薇！さつさと城の中に戻るのじゃ！」

何か思う所はあったようだが言葉を飲み込んだ美羽が俺と薔薇の顔を交互に見て自ら先頭に城の中に向かって歩き出す。

俺と薔薇はお互い顔を見合わせて頷いた後で美羽の後に続いた。

色々と考えるべき事はあるが……今日ぐらいは昔の思い出に浸るとしよう。

さて……こうなったら雄も呼ばないとな。

あいつの事だから何処からか話を聞きつけてもう部屋で待っている
うではあるが。

今日寝るのは遅くなりそうだ。

第30話 徐晃（後書き）

今回は苦戦しました。

ころころと視点を変えて書きなおすこと実に5回。

さて言いわけはここまでにして登場人物紹介を。

徐晃

史実では郡の役人となった後で紆余曲折あつて曹操に仕える。

魏の五大將軍の一人に数えられる程の功を立て、負けた事が無い事から『常勝將軍』と称えられた。

常に冷静沈着に判断を下し、友である関羽と戦う事も厭わなかった生粋の軍人のような人物。

モデルはロシアの首都の名前のホテルのあの方。ただしあの方よりは若く、中身は白い悪魔の親友の天然娘。

第31話 改革（前書き）

今回特に話に動きはありません。

完全なNAISEEタイムです。

第31話 改革

SIDE 楽就

「……ふう、とりあえずこれで終わりにするか」

竹紙に文字を書き終えた俺は手に持っていた筆をそつと硯に戻す。

長い時間の机作業で凝り固まった身体を解す為に伸びをしながら俺は部屋の窓から外を見た。

作業を始めた時はまだ明るかった筈の空にはいつの間にか紅い色が混じっている。

「……そういえば今日は会食の日だったな。遅れたら美羽達に怒られそうだ」

今朝の美羽と薔薇が妙に張り切っていた事を思い出しつつ俺は部屋の片づけに入る。

薔薇は皆に紹介した当初は少し緊張していたものの、皆は薔薇の顔の火傷跡事を気にするような輩では無かった為にすんなりと俺達の陣営に溶け込む事が出来た。

その薔薇は今では李雪とともに武官の双壁とも言えるような存在となっており、軍事の中核を担っている。

会食というのはここ最近うちで慣例化した行事で3日に一回袁家の

重臣達が夕食を一緒に食べるというものだ。

作るのは参加者の持ち回り制であり、今日の当番は美羽と薔薇の筈だ。

他に月一回大会食というものも開かれる事になっていて、こちらは兵や文官の中から抽選で選ばれた者達が俺達と食事を共にする行事となっている。

何とも微笑ましい行事だとは思うが、一緒に飯を食べる事による結束力の強化は決して侮れるようなものではない。

美羽という君主を身近に感じる事によって兵や文官達の結束は更に固まるだろう。

しかし……こうして会食が普通に出来る事になった事というのは喜ばしい事だな。

少し前までは会食のような事をしている余裕なんてどこにも無かった。

本当にこの半年近くは大変だったのだから……。

薔薇が俺達の下に来てから少ししてから孫家と景升殿の和解が無事に成立し、洛陽の玉ナシ共に鼻薬を嗅がせたことで迅速に孫権が九江郡太守に任命された。

それをもって正式に孫家と同盟を結んだ俺達は寿春から南陽に戻ってきたのだが、俺達にはやらなければいけない事が山積みとなっていたのだ。

それは俺達が留守にしている間に日常の政務が溜まっていたというわけではない。

日常の政務は南陽に残った真里や芙蓉達がしつかりとこなしてくれていた。

それではそのやらなければいけない事とは何なのか？

…… 答えは南陽の改革だ。

実は俺が南陽を預かっている間は経済政策には力を入れていたが、税制等の政治的なものの仕組みには手をつけていなかった。

俺が手をつけなかった理由としては単純に人手が足りなかったという問題もあったが、リスク上の問題と効果上の問題があった事が大きい。

まず一つ目の問題としては、漢の政治的な問題がある。

漢の官吏の採用制度は基本的に推挙だ。

これは各地において優れた人材を上の方が推薦して役人とする制度

なのだが、売官が罷り通ってしまったている今の時代は地方の官職は豪族が賄賂によって地位を得ている状態となっていまっている。

俺達が税を下げようとしても豪族達がそれに従うとはとても思えない。

かといって無理に通せば豪族達を刺激して警戒させる事になり、奴らを一網打尽にする計画の事を考えるとそれを行う事は出来なかった。

そしてもう一つの問題は、この改革は美羽の指揮において行われてこそ意味があるという事だ。

美羽が暗君を演じている状態で改革を行ってもそれは美羽が行ったとは世間は捉えない。

美羽自らが陣頭に立って改革を行ってこそ、それが美羽の名声に繋がる。

こういった諸事情により俺達は税制等には手を付けていなかったのだが、豪族達を処分した時点においてそれらの問題は全て片付いている。

それ故に俺達は南陽に戻ってすぐに政治の改革に手をつける事となったのだが、この改革が大仕事だった。

まず内政改革で俺の提案によって手を付けたのは各組合の設立だ。

農民なら農民組合、職人なら職人組合、商人なら商人組合というよきな組合設立し、その支部を領内の各地に設けた。

組合は各職業の支援と管理を行う存在で所属すれば農民なら農業器具の貸出、商人なら領内の市における自由商売の許可といったような支援を受ける事が出来る。

これらの組合の設立の狙いは領内の生産力を高めると共に税制の基盤を固める事にある。

というのも税制については税の基本を大凡おおよそ三公七民から四公六民として、各組合を通して俺達に支払うような体制としたのだ。

大凡というのは累進課税制度を導入している事で各人によって納める税の割合が異なるからだ。

こうすると民は頑張れば頑張るほど税が高くなるのでやる気がなくなるかもしれないと思うかもしれないが、そこは組合の仕組みに工夫がある。

組合の形態として各組合の支部に所属している者の中で毎年高い割合で税を納めた者の中から抽選で組合の職員を選ぶ事にしたのだ。

職員の仕事は組合に所属する者の税の徴収や毎年の収入の確認を含めた管理業務といったもので、職員になった者はその在任の1年間は税を免除される事になっている。

税は基本的に組合の支部単位で集められてその支部を管理する町の役所に納められる。

そしてもしも税を納めようとしなない者がいた場合はその者は組合から除名され、今後一切組合の支援を受けることが出来なくなるよう

になっている。

税自体も以前よりは安くなっているので誰もそんなデメリットを覚悟してまで脱税をしようとは考えない事だろう。

しかも組合の支部は地域のものなのでそんなことをすれば周囲から白い目で見られる事になるのだから。

また組合ぐるみで不正が行われる事も考えられるので各組合の支部のトップは官吏が務める事にもしているが、組合を官吏の天下り先にするつもりは毛頭ない。

官吏の監視は確りで行い、官吏が不正を行うようならその官吏は処罰する。

これらの新体制は未だに動き出したばかりなのだが、既に民達の間ではこの制度を歓迎する雰囲気が出来上がっている。

というのも頑張れば翌年の税が免除になる事に加えて、組合の職員に選ばれる事が一種のステータスであるかのように受け取られているようだ。

ただ……この制度が本当の意味で動き出すにはまだ時間がかかるだろう。

商人を別にすればこの時代の平民は読み書きはおろか計算もろくに出来ない。

そんな民を職員にしたところで業務に支障が出る事は目に見えている。

民の識字率が上がるまでは官吏が業務を補佐する事になるだろう。だがそれには目を瞑ったとしても組合がもたらす効果は大きい。生産力の向上と税収の安定。

これからの事を考えれば組合の存在は大いに美羽の力となる筈だ。

そしてこの組合と税制を何とか形とすると同時に俺達は寿春で処分しきれなかった豪族や悪徳官吏達の締め上げを行った。

元々俺としては豪族の広すぎる私有地や所有する私有民等というものを認めるつもりは一切ない。

所有するだけしておいて税は一切納めずに搾取するだけの存在なんて領地を預かる者からしてみれば邪魔なだけだ。

美羽も豪族の私有地や私有民の悲惨さ見知っている為に、俺と全く同じ考えだ。

ましてや官の側にありながら不正を働いて民を苦しめる悪徳官吏なぞ論外。

俺達はこの1年以上の間に集めた証拠を基に圧倒的な兵力を背後に従えた上で奴らを一気に処分し、その財産や土地を没収した。

寿春の時と同様に死罪となった者以外には追放か農民となるかを選ばせてもいる。

その豪族達の土地はその豪族達が抱えていた私有民に分け与えたが、没収した財産等はこれからの領地経営の資金に回す予定だ。

豪族達や悪徳官吏達が溜め込んでいた資産は膨大なものであり、これを使えば今まで手が回せなかった案件も一気に解決するだろう。

ただ豪族の中にもまともな者や、時流が読める者は少数ながらもいた。

そういった者はこのまま俺達の改革が進めば私有民達が流出していくだろう事を理解しており、むしろ美羽の傘下に入ることに生き残る道を見いだしている。

俺達としても人材不足な事は確かなので、そいつらの素性を調べた上でまともと思える者達は官吏として採用した。

無論ただ美羽に媚びを売って生き残ろうとしているだけの奴らや過去に不正を行っていた者は遠慮無く処分したが。

この税制の改革や豪族達の処理という仕事を終えた次に俺達は戸籍・土地帳の作成に取りかかった。

元々南陽の帳簿は酷く曖昧であつた事に加えて、俺達が南陽に来てから余所から流れてきた民に加えて今まで戸籍には記載されていなかった豪族の私有民達が加わつたので民の事を把握する為には戸籍と土地帳の作成は欠かせない。

というか正確な戸籍や土地帳も無しに領地を管理するなんて無謀もいいところとしか考えられない。

実は俺はこの戸籍作りが一番難航するかと思ったのだが、組合制度を作っていたお陰で組み合い毎にまずは戸籍・土地帳簿を提出させ、その上で組合に未だ所属していない者だけを個別に調べる事で大幅に作業を簡単にする事が出来た事は正に棚ぼただった。

俺は最初気付かなかつたんだが……なんとあの張勲もとい七乃がそれを指摘してきたのだ。

俺達は今までの事もあつて七乃には殆ど期待していなかつたのだが、七乃は南陽に戻つて来てからというものの今までが嘘とも思えるような態度で仕事に取り組み、目覚ましい働きを示している。

七乃に何が起きたのかは分からないのだが、組織での人材運用と作業の効率化という点で七乃は信じられない程に優秀だった。

七乃は各人の能力の適正を瞬時に見抜き、各人を能力に見合った役職に推薦して仕事と人材を見事に割り振っていく。

さらに既存の組織を徹底的に利用して作業を進めようとするその手腕は凄まじいと言いが言いがたい。

御蔭で南陽郡全体の作業効率は凄まじく上昇した。

それらの功績によつて七乃は今では美羽や俺を含めた皆に認められて地位を回復し、袁家における人事担当の重臣に収まっている。

美羽を見る視線についても以前のような邪まな視線は感じられなくなつており、美羽の為に粉骨碎身して尽くすその姿は忠臣そのものとさえ言える。

七乃に何があつたのかは知らないが、本当に人は変われば変わるものだ。

最近七乃が雄に付き纏っている姿を良く見るからどうも雄が関係していそうではあるのだが……。

まあそこは俺が無闇に詮索するような事ではないだろう。

しかしいくら七乃が予想外の活躍を示し、作業が効率化したといってもこの改革が大変であつた事に変わりはない。

組合の創設・税制の改革を始めとして、寿春で処分しきれなかつた豪族や悪徳官吏の締め上げとそれに伴う財産・荘園の没収、最近南陽に流入してきた民や豪族の私有民となつていた民等を含めて民の事を把握するための戸籍・土地帳の作成、更には新たな政治体制の為の人事を含むそれらの改革はまさしく大改革だ。

これを始めた当初の徹夜が当たり前という日々は正しく地獄のような日々だつた。

来る日も来る日も皆で意見を戦わせ、書類を相手に格闘する毎日。

今でもあの日々は悪夢のような日々として記憶にはつきりと残っている。

美羽や俺達文官寄りの人間が南陽の町で書類と格闘する傍ら各地の村や県での作業の為に南陽郡各地を飛び回り、加わつたばかりの薔薇や梨雪・紫苑殿・華漣等の武官連中は軍制の改革や兵の訓練、更には改革に反抗する残つた豪族達や賊の鎮圧に当たる。

まさしく俺達全員が一丸となって改革に当たる日々だった。

だがその忙しさも改革を始めて半年程が経った今、それもようやく落ち着いてきている。

組合には既に南陽で働く民の殆どの者が所属し終えており予想以上の好評をもって民に受け入れられているし、税制の方も以前よりも総合的に安くなったので同じだ。

私有民や流民には土地を分け与え、最初の1年の税を免除する代わりに10年の間納める税を1割増しとしたものの、自分の土地を得られることもあって好意的に受け入れられている。

豪族達の鎮圧や悪徳官吏の締め上げも終わったし、戸籍と土地帳も既に大方完成した。

今回の改革はようやく終息したと言えるだろう。

ただ今回の改革はあくまでこれからの飛躍の為に土台をしっかりと固めただけだ。

むしろこれからやる内政や軍政の方が本番だと言っている。

現に俺が今まで書いていたのはこれからの内政案についてだ。

南陽の町が発展するのは結構だが、町というのは発展すればするほどその裏というものが生まれるし、現に現在の時点で南陽の町には色街のような場所が形成されつつある。

この世界は将こそは女性が目立つが、兵に方では逆に男性の方が多

くなっている。

日常に命を賭ける兵にとっては色街というのは必要不可欠な場所だ。下手に規制して町で民を襲うなんて事件が起きたら大変な事になる。その対策として非公式に裏町組合という組合を既に組織させてあるが、いずれこれを公式なものにしないといけないだろう。

この問題の他にも警察の設立、軍内での階級制度や組織の整備、工
作隊・輜重隊・医療隊の設立、烈を中心とした研究機関の正式発足
とやるべき事は山程ある。

それにこのところ忙しくて出来なかつた新商品の開発も進めたい。
だが……やはりまずはアレだな。

そろそろ時期的にも丁度いいだろうし、幸い資金も有り余っている
事だ。

この時期を逃すわけにはいかないし、今は是非とも人材が欲しい。

今日の夕食の時に美羽達に相談してみようか。

特に真里にはこの件の中心となって貰わないとな。

そうだった諸々の事を考えつつ部屋の片付けを終えた俺は会食に出
る為に部屋を出るのだった。

第31話 改革（後書き）

中々原作に突入出来ません。40話までには確実に原作に突入できるとは思っていますが……。

第32話 袁隗（前書き）

皆様、大変お待たせしてしまいましたすみませんでした。

更新を再開致します。

プランクが大きくて中々調子を取り戻せていませんが、お楽しみ頂ければ幸いです。

第32話 袁隗

SIDE 袁隗

「……ふむ、こうなるとはちと予想外じゃったのう」

儂は今まで目を通しておった書簡を机の上に置きつつこめかみに指を当てた。

机の上に二通あるその書簡はそれぞれ本初と公路の近況を調べさせた儂の手の者の報告書じゃ。

その報告書を儂は自室で読んでおったのじゃが……内容は随分と儂の予想から外れておったわ。

本初と公路、儂は本初の方が秀でておると思っていたのじゃが報告書に記された内容は全く逆のものじゃ。

渤海の太守になった本初は華美な生活をして徒に浪費を重ねるばかりで一向に政務に興味を示しておらぬらしい。

本初は昔から傍に仕えておる顔良と文醜と共に遊ぶばかりで、渤海郡の政務は郭図や逢紀といった輩に任せきり。

この二人は共通して口が達者なようで本初の奴は二人の言を信じ切

っておるようじゃのう。

これで郭図や逢紀が優秀な輩ならばそれでも良いのじゃが、手の者の調べではこの二人は私財を蓄える事に熱心で領内に重税を掛け、賄賂を贈ってきた者を取りたてておる。

いくら渤海郡が豊かな地であるといってもこのような状態では先が見えておるわ。

それに気付かぬようでは……本初に先を見る目が無いということかの。

対して公路の方は見事の一言に尽きる。

公路自らが指揮を執って領内の改革を行い、今や南陽郡はかつてない程に発展して居るといふ。

民の顔は明るく、公路に対する支持は驚く程高いようじゃ。

配下にしても文武共に逸材が集いつつあり、兵は常備兵のみで5万を軽く越しておる。

更に公路は揚州の孫家や周家、荊州州牧の劉景升とも良好な関係となっておるらしい。

公路は盤石な土台を既に南陽で築いておると言っても過言ではないじゃろ。

……まさかこれ程にまで本初と公路に差が出るとはの。

儂は公路と本初と比べたら本初の方に芽があると思つておつた。

洛陽でも名門と言われる私塾で学び、多くの良家の子弟と交友のある本初に対して、私塾には通わずに屋敷で拾われ子の樂就に教育され、その樂就と共に外に遊びに行く事の多かつた公路。

儂の目から見て将来の袁家を背負うのは比べるまでもなく本初しかないと思えんかつた。

いくら羽羽兄上の遺言があるとは言つても公路に袁家の先を預けるのは不安が過ぎたからのう。

儂は羽羽兄上の遺言については羽羽兄上が我が子の可愛さに公路を袁家の当主に据えようとしたものと思つておつた。

当時はあの羽羽兄上も死を前にして目が曇ってしまったかと思つたものじゃが……何の事は無い、曇つておつたのは儂の目の方だったわい。

あの汚らわしい樂就が側に居つた事で自然と公路も見誤つてしもつた。

いや、あの樂就を見下しておつた事が儂の過ちだったのかもしれない。

認める事は癪ではあるが樂就は有能じゃ。

それは手の者の報告でも明らかになっておる。

今思えば儂を含めた大抵の袁家の者は樂就を所詮は元浮浪児の拾われ子と忌み嫌つておつた。

その樂就が羽羽兄上によつて公路の教育役に任じられた折に儂らは私塾で学んでおる本初との扱いの差から本初が後継ぎとなるべきと思ひこんだわけじゃが……兄上は樂就の才とその忠義を認めておつたからこそ最も大切な公路を預けたのじゃな。

儂は袁家の当主である羽羽兄上よりも高位に上つたが……羽羽兄上には終ぞ敵わなかつたか。

いや、後悔するのは後じゃ。

今は袁家の未来を考える方が大事じゃからな。

儂は一度首を振つて首の緊張を解す。

そうして儂は改めて口元に右手を当てつつ考え込んだ。

現状から考えたら袁家の将来を担うのはどう見ても本初ではなく公路の方である事は一目瞭然じゃ。

しかし2年前に儂達が羽羽兄上の遺言を無視して本初を支持した為に袁家の資産の多くは本初の下に渡つておる。

本来ならばそれを公路の下に戻して有効に使つて欲しいところなのじゃが……一度掴んだものを手放すような者は殆どおらん。

袁家に連なる者の多くも本初を飾りとする事で甘い汁を吸おうとしておる。

今更公路を袁家の当主としたところで反発は必至じゃ。

となれば僕は公路がこれから更に力を付けやすいように便宜を図る方向で動くべきじゃな。

この短期間で南陽郡を発展させた公路ならばきつかけさえ与えれば必ずや自らの力とする事じゃろう。

今の公路は南陽の太守じゃ。

南陽郡を見事に治めた功をもって洛陽で役職を与える事も出来るが……これは愚策じゃな。

公路が確固とした地盤を築き、勢力として拡大しつつあるということにも拘わらず態々それから離す事など無い。

それに今の洛陽は言わば魔窟。

宦官共が主上の威を借りて好き放題しておる上に最近は何皇后の兄の何進が大將軍となつて宦官一派と争つておる。

このような状況の洛陽で役職を得たところで権力争いの渦中に巻き込まれる事は必定じゃ。

僕が司徒の位に在りながら未だ無事なのは中立を守りつつ欲を出さない事で無害と思われておるからに過ぎぬ。

となれば公路を南陽から動かさない事を前提とすべきかの。

順当に考えれば公路を荊州州牧に任じるように仕向けるべきなのじやろうが……荊州の州牧は劉景升じゃ。

皇族かつ名声高い劉景升を除く事は難しい。

荊州州牧を勤め上げた功をもって三公に任じること出来なくはないのじゃが……劉景升程の大物を洛陽に戻すとなれば宦官共も外戚共も騒ぎ出すじやろうな。

それに劉景升と公路との間に何があったのかは分からぬが劉景升は何かと公路に目をかけておる。

せつかく良い後ろ盾があるというのに態々これを除く手はない。

ならば残された手は公路に南陽郡に加えて他の地を任せるしかないのじゃが……ちと難しいのう。

公路は以前南陽に加えて寿春を預かった事があるのじゃがあれは例外措置じゃ。

その点を突かれれば仮に兼任させたとしてもいつ取り上げられる事となるか分からぬ。

そう考えれば公路が九江郡を手放す事で孫家と盟を結んだのは実に見事な手じゃったな。

「……八方塞がりじやのう」

いくら考えても一向に良い手が浮かばぬ事に儂は溜め息を吐いた。

三公の位にもありながら袁家の未来の為に有効な手を打てぬとは……自分が情けなくなるわい。

「……ん？」

自身の無力さを齒痒く思いながら儂がふと机の上に目をやると机の上に広げていた書簡の文字が目に入る。

そして次の瞬間儂の頭の中にある考えが浮かんだ。

「これじゃー！」

思わず儂は書簡を握りしめつつ座っていた椅子から立ち上がる。

そうか、この手があったわ！

確かに公路に太守を兼任させる事は難しい。

じゃがその配下の者を太守に任じればそれは実質公路が太守を兼任している事と同じじゃ！

確かこ奴の父は生前司徒の座にあった筈じゃ。

儂も面識はあるがこ奴の性格からして太守に任じられれば公路を頼るのは間違いなかつ。

我ながら名案じゃー！

問題となるのは何処の太守に任じるかじゃが……ここは我ら袁家の地以外あるまい。

ふむ、そうと決まれば早速仕込みを始めねばの。

先ずは高望あたりの宦官から渡りをつけるとするか。

袁家の未来の為じゃ、金を惜しんではいられん。

儂は羽羽兄上が亡くなった時その意を汲む事が出来なんだが今こそその詫びをする時じゃ。

さて、明日からは忙しくなるの。

しかし袁家の繁栄の為じゃ、老骨に鞭を打つとするか。

第32話 袁隗（後書き）

今回美羽様と楽就はお休みです。

以下恒例の人物紹介です。

袁隗

袁術の叔父。袁術の父で袁家当主である袁逢より早く三公の座に就いた。長く三公に在任し、袁家の後継者としての袁紹を支援した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854t/>

真・恋姫†無双 ～袁の王佐～

2011年11月9日17時50分発行